
いばら姫-WORLD END FAIRY TALE-

KIKKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いばら姫 - WORLD END FAIRY TALE -

【Nコード】

N4810Y

【作者名】

KIKKA

【あらすじ】

犬飼亮介、15歳。どこにでもいる、ごく普通の少年。中学を卒業し、東京西部に広大な敷地を持つ私立御園学園高等学校に入学が決まっている。

そして3月、親友に入学前の学校見学に誘われた亮介は雪に閉ざされた学園の門を開き、自らの運命と出逢うことになる……。更新はWEBサイトでも行っています。

【<http://www.wett.jp/>】

【予言 終焉の魔女】

一人の女が赤子を抱き、バルコニーから今まさに沈まんとする夕陽を眺めている。山々の稜線は赤く燃え上がり、女はとある神話の、世界の終末に太陽を呑み込む役目を与えられた狼のことを思った。よくよく見れば、山の峰は獣が大きく口を開けているようにも見える。そんな想像がおかしくて、女は少しだけ笑った。

背は凍るように冷たく、吹きさらされた長い髪はとぐろを巻き、白いドレスに絡みつく。

もう戻れない。

「かわいい子」

女は腕に抱いた赤子の薔薇色の頬を撫ぜた。あたたかい。どんな悪意も呪いも知らず、この子は眠っている。

さあ、贈り物をしましょう。

世界の隅々にまで聞こえるよう、女は高らかな声で予言する。

「この子は誰より美しくなるでしょう」

「この子を誰もが愛するでしょう」

「誰より聡明になるでしょう」

慈愛を、富を、美しい声を授かるでしょう。

そのようにして十二の贈り物を終えると、女は赤子を見つめ、うっとり笑った。

「でもこの子は——、私しか愛さない」

ふくよかでやわらかい肌。赤い唇。まだ何も知らない可愛い子。

「他の誰も愛さない」

「だからこの子は永遠に、幸せになれない」

「かわいいそうな子。かわいい子ね、由姫……」

女は赤子をきつく胸に抱いて蹲った。夕陽はもうすっかり獣の喉に

呑み込まれ、世界に夜が訪れる。白亜の城はいばらに深く閉ざされ、
かりそめの永い眠りが始まる。

その予言をただ一人、登場を許されぬ人間が闇の帳の奥で聞いてい
た。

第1章 - 01

「……すつ、げー……」

見上げる風景に圧倒され、犬飼亮介はマフラーの奥、呆然と白い息を吐いた。

門の向こう、丘の上にそびえ立つのは白いレンガ造りの巨大な城の一群だ。庭園の木々も尖塔も、降り積もった雪が朝日を反射して幻想的に輝いている。

ここが本当に日本なのかどうかあやしい。亮介は思わず、ここに至るまでの道のりを回想した。自宅を出て駅まで歩いて八分、そこから各駅停車で三十分、モノレールに乗り換えて七分。さらに森の中を歩いて十分弱。

間違いない。ここは東京郊外、御園学園高等学校の入り口である。

『おまえ、入試は大学校舎のほうでやったんだよな。どうせ春休みで暇してんだろ、出て来いよ。案内してやる』

親友の秋津久志からそんな電話があったのは昨夜遅くのことだった。中学の卒業式を終えて高校の入学式を待つばかりとなったこの時期、することと言えば二匹の犬の散歩と姉の買い物の荷物持ちだ。喜んで親友の申し出を受けた。

文化祭にも学校案内にも参加できなかったから、亮介が学校を訪れるのはこれが初めてのことになる。合格発表は風邪をひいてしまった自分の代わりに親友が番号を見てくれたし、入学手続きやら制服のサイズ指定は気がついたら母の手によってすっかり終わっていた。自分がもたもたしている間に何もかもが整っているのは昔からで、周囲が常に自分の二倍のスピードで動いているか、自分が常人の二倍ムダに遠回りしているのか、どちらかだと思う。後者であれば少しだけ悲しい。

それにしても、肝心の親友がまだ来ていないようだ。亮介はポケットから携帯電話を取り出した。スライド式の画面に表示された時間

は待ち合わせの時間を十五分も過ぎている。遅れた自分が言うのも何だが、几帳面な親友にしては珍しい。

「……、ん？」

バイブ音が鳴り、画面に新着メール一件と表示された。もしかしてと受信ボックスを開いてみると、それは案の定、親友からのメールだった。

『寝坊した。悪い、もう少し待っててくれ』

晴天の霹靂だ。それではこの数十年ぶりの春の降雪は親友のせいなのだろうか。亮介は珍しく自分が優位に立った貴重な瞬間を噛み締めつつ、『わかった。俺も今来たところだし、ゆっくり来ていいよ』と余裕ぶった返信をする。寒いが我慢できないほどではない。ここで待ってしよう。

ざりざりと雪を踏みしめる音が聞こえたのは、その時だった。

「おおーい」

大きく手を振って、誰かが坂を下ってくる。誰だろう。亮介は首を傾げつつ、つられて小さく手を振り返す。

やがて近づくにつれ、それが白衣を着た男性であることがわかった。眼鏡をかけている。年齢はずいぶん若そうだ。二十代の後半から三十代前半のあたりだろう。

教師だろうか。

「あー！」

亮介は叫んだ。坂の途中、大振りの落葉樹の枝から今にも雪が滑り落ちそうになっている。

このままだと直撃だ。

「あ、あの、上！ 上！」

指で合図するが彼は一向に気付かない。よく見えないが、履いているのは、あれはサンダルではないのか。足取りが微妙な滑りを挟んで危なっかしい。

「はは。すごい雪だねー！ あ痛たっ！」

「あー……」

どさどさつと音を立てて、彼の頭上に雪が弾けた。見事なタイミングだ。

「痛ったた……。はは、やられてしまった」

門の前まで辿り着いた彼は怒ることもなく、雪まみれで鷹揚に笑っている。

「僕はどうにも運がなくてね。困ったもんだね」

「あの、眼鏡」

「え？」

「眼鏡が歪んでいます」

銀縁のフレームは元の形を留めることに飽いてしまったらしく、だらりと歪曲している。指先で確認した彼は、「これは困ったね」と全然困っていない顔で眼鏡を耳にかけ直した。そうしたところで歪みが元に戻るわけではないのだが――。

「いやあ、雪は素敵だね。昨日は仕事で徹夜だったんだけど、気付けば一面雪景色じゃないか。いい大人がって笑われるかもしれないんだけど、興奮してしまっただけ」

「確かにすごい積りましたよね。膝まで埋まるのって、俺初めてかも。……です」

「君くらいの年齢の子だとそうかもしれないね。僕が小さい時は雪の中でかくれんぼができるくらいだった。それで、懐かしくて守衛さんと朝方この辺りで雪合戦をね。で、腕時計を無くしてしまったんだ。ああ、あれだ。ごめん、取ってくれるかな」

指さされた後方を森を振り向くと、木の根元、雪の中にきらりと光るものがある。近づいて腰を屈めてみると、それは確かに腕時計だった。辺りはずいぶん踏み荒らされ、雪が固まっている。なかなかハードな雪合戦だったようだ。

「どうぞ」

門の間から差し出すと、「ありがとう」と彼は時計を白衣のポケットに仕舞う。

「そういえば、君はどうしたんだい。部活かな。何部？ 私服のよ

うだけど……」

「あ。えっと」

亮介は目を逸らして口ごもる。

「学校を見学できたらと思って。俺、来月からこの生徒なんです。証明するものは……、えっと、すいません、無いです。それで一緒に入学する友達とここで待ち合わせしてたんですけど、そいつが遅れてて……」

休みボケした頭が寒さでさらに鈍ったのか、説明はこの上なく怪しげなものになった。子どもみたいな言い訳に聞こえてしまっただろうか。恥ずかしくなり、亮介はマフラーに顔の半分を埋めた。

「ああ、そうなんだ。じゃあ中で待っておいで。こんな寒い中にいたら風邪を引いてしまうよ」

「え？」

「守衛さんから鍵を貰ってきたんだ。えーと、うわ、冷たいな。いいしょっと」

ガシャン！

けたたましい音を立て、巨大な鉄の南京錠が外れる。

「古いからこういうところもアナログだね。さ、どうぞ」

キイ、と蝶番が鳴り、両開きの門の片方が薄く開かれた。

「いやでも俺、友達を」

「歩きながらメールすればいい。門は開けておこう。ああ、そうだ言い忘れてた。僕は御園高校の看護教諭で、四宮。どうぞよろしく」
右手を差し出され、亮介も慌てて差し出した。触れた手はひんやりと冷たい。

「犬飼です。犬飼亮介。よろしくお願いします」

「犬飼くんね。近くで見るとますます、何だかテレビに出てるみたいな顔だね。今の子はほんと垢抜けてるなあ」

「テレビ？」

アカヌケテルとはどういう意味だろう。亮介が首を傾げると、四宮は声を上げて笑った。

「あはは。それにいい子みたいだ。さあ、とりあえず保健室に行こう。暖房が入ってる」

導かれ、亮介は門を潜った。

坂を登る途中で一度だけ後ろを振り返る。親友はまだ来ない。どうしてか、それがたまらなく心細かった。

第1章 - 02

ちよつと遠いけど覚悟してくれと四宮に言われた通り、校舎の玄関まで辿り着くにはおよそ二十分を要した。坂を登り切った先にあったのは、テーマパークでしかお目に掛かったことがない跳ね橋だ。城門を潜ると噴水を中心としたフランス式庭園が広がっており、それを抜けるとようやく鐘楼のある本校舎が見えてくる。

「本校舎の隣が別館。左は校庭。見えるね。横にあるのが体育館。あとは温室とかいろいろあるけど、自分で探検したほうが楽しいと思うよ。迷ったらあちこちに案内板があるから、参考にするといい」
「はあ……」

思った以上の広さだ。亮介は本日二回目のため息を吐いた。自分がいた中学校の校舎が五つか六つ……、いや、比べること自体がおかしい。

「何年前だったかな。外部から入学したての子が遭難して、大学の辺りまで迷い込んだことがあってね。幽霊に会ったとか何とか、ちよつとした騒ぎになったんだ。それで、案内板をつけることにしたってわけ。犬飼くん、この御蘭学園の土地の由来は知っているかな」

「はい。入学案内のパンフレットと、あと友達……、今日来る親友なんですけど、そいつから聞きました。御蘭ザイバツのシユーチだったって」

その通り。四宮は頷き、玄関脇の下り階段へと亮介を導く。

「君の友達は物知りだね。そう、初代御蘭学園理事長である御蘭彰氏の持ち物だ。彼と彼の意思に賛同したメンバーが理事会を作り、第一次世界大戦の後すぐに旧御蘭学園高等学校を作った。その後小中学校、大学と大学病院が併設されて、今の御蘭学園が完成する。現在の理事長は東雲詮房っていうおじいちゃん、御蘭のパトロンだった東雲家の末裔だ。——歴史の勉強はこれくらいかな。ああ、

そこで靴を脱いで。教職員用のスリッパを貸してあげる」

地下には下駄箱があった。在校生は普段、この入り口から校内へ入るのだろう。亮介は四宮に渡されたスリッパに履き替え、彼に倣って硬い石の階段を昇る。足の先は凍えるほどに冷たく、静けさは冬の匂いがする。四宮と自分の足音以外、何の音も聞こえない。すべてが雪に埋もれて深く眠っているかのようだ。

「この上が玄関ホールだ」

先に踊り場を曲がった四宮の声に顔を上げると、視界が一瞬真っ赤に灼ける。

光だ。

「天井を見てご覧」

「……すごい……」

再び地上に出た亮介は息を呑んだ。

見上げる高い天蓋の一面に荘厳な絵が描かれている。絵は円の中心から放射線状に九つのパーツでできており、時計回りにオレンジから濃紺へと少しずつ色を変える。外周、ちょうど壁との境目となる部分には太陽と月らしき円が描かれ、この絵が朝から夜への移り変わりを表しているのだとわかる。距離が遠いので細かいパーツはよく見えないが、宗教画ではないようだ。白い衣を纏った神様も、背に羽が生えた天使の姿もどこにもいない。

「ユミルの頭蓋骨」

「え？」

ぎよつとして振り返ると、四宮が悪戯っぽく肩を竦める。

「吃驚するだろう？ この玄関ホールの名前だ。通称、ユミルの頭蓋骨」

「頭蓋骨って、……ガイコツ？」

「ユミルというのは、北欧神話に出てくる巨人の名前だ。神話によると、神は殺害したユミルの身体から世界を創造したんだそうだよ」
肉から大地を、血から海を。頭蓋骨からは天を。太陽と月を浮かべて馬車に乗せ、その馬車を狼が追いかける。世界樹が九つの世界に

根を伸ばして支え、大鷲の羽ばたきは風となつて天地を駆ける。

「この絵はキリスト教の流入する以前、北欧の人々が信仰していた世界の縮図だ。宗教ではないよ。あくまで信仰だ」

「宗教と信仰って、違ふんですか？」

「違う。そうだね、宗教は運動会の組体操で、信仰は夏休みのラジオ体操って感じかな？」

「……すみません、全然わかんない」

「うっん、僕は例え話が苦手だね。ごめん。この天井画も、創設者の御園彰氏の趣味だ。彼は太の欧州覇君でね、長い間に留学をしていた。魔法使いだったって噂もあるくらいだから、相当入れ込んでたんじゃないかな。——おっと、話が長くなつた。これも僕の悪い癖だね。さ、行こう」

「いえ……」

亮介は白い息で煙る天を再び仰いだ。壁の所々嵌め込まれたステンドグラスから惜しみない光が降り注ぎ、亮介の額と臉を暖める。肉から大地を、血から海を。頭蓋骨からは天を。

それは凄惨であるはずの物語だ。だというのに不思議と嫌悪感は浮かばない。小さい頃に読んだ絵本と再び巡り会つた、そんな懐かしさと親しみを感じる。事実、姉のおかげで家には女の子が読む絵本はたくさんあるし、自分が気付かない場所で多く引用されているのかもしれない。

——絵本。

絵本。そのキーワードが何故か気に掛かる。そうだ、小さい頃、自分は誰かに絵本を貰つたことがあつた。ぼろぼろになるまで繰り返しページを捲つた。

どうして自分はそこまで熱心にその絵本を読んだのだろう。部屋でおとなしく本を読むような子どもでは、自分は決してなかつたはずだ。タイトルは何だったか——。

「そつといえは友達から連絡は来たかい？」

顔を上げると、四宮は玄関ホールを抜け、ずいぶん先の廊下を歩い

ている。

「えっと……、いや、まだみたい、です！」

慌てて後を追いなから携帯電話を確認するが、電話着信もメールもないようだ。受信があったときすぐわかるよう、マナーモードをオフにする。

帰ったら屋根裏を探してみよう。亮介は思う。手にした感触とカバ―の装丁は何となく覚えているから、きっと見つかる。

——きっと。

第1章 - 03

保健室は廊下の一番奥、階段の手前にあった。玄関ホールがあの通りだったのである程度は予想していたが、保健室というよりは貴族の書斎といった赴きだ。革張りのソファセットも薬品棚も、おそらく四宮がいつも座っているのだろうデスクも、すべて年月を経た滑らかな飴色をしている。

結露で湿ったガラスの向こうには背の低い植え込みが見える。いつの間にか空は曇り、再び雪がちらつき始めているようだ。久志は大丈夫だろうか。コートの中、鳴らない携帯電話を握る。

赤いホーローのポットを持った四宮は「ソファへどうぞ」と亮介に声を掛けた。

「僕はちよつと給湯室に行ってくるよ。水道管が凍ってるらしくて、シンクがいま使えないんだ。コーヒーしかないけどいいかな？」

「あ、えっと、おかまいなく！」

「遠慮しなくていいよ。それより頼みたいことがあるんだ」

四宮は部屋の奥に視線を投げた。

「眠っている子がいるんだ。立ちくらみを起こしちゃったみたいだね」

促されて覗き込むと、部屋の奥に三つ折りのパーティションが見えた。亮介のいた位置からはちょうど死角になっていてわからなかったが、この部屋はどうやら背の高い大きな本棚によって二つに区切られているようだ。わずかに開いた棚との隙間から、窓際のベッドが膨らんでいるのが見える。

「起こさないようになるべく静かにしてあげてほしいのと、もし起きたら勝手にどこかに行かないよう釘をさしてほしい。心配だからね。僕はすぐに戻るから」

「わかりました」

「よろしく。じゃあ、気をつけてね」

寧ろ見送る自分が言うべきはずの言葉を残し、四宮は部屋を出て行った。

亮介はマフラーを外し、コートの前を開けて部屋の中央にあるストーヴの前に屈み込む。ガードに両手をかざすと、凍えた指先にじんじんと熱が灯った。

本当に来てしまった。

この学校に入学するのだ。改めて実感すると、むず痒いような誇らしいような、言葉で言い表すことのできない気持ちが胸の中に膨れあがる。

御蘭学園高等学校は父母、そして現在は隣の御蘭大学に通う姉の出身校だ。なので亮介も中学二年の夏には自然と第一志望校を御蘭に決めていたのだが、文字通り決めただけだった。

『なあ、前から不思議だったんだけどさ。おまえ中間テストも補習だったし塾も行つてなさそうだし、受験勉強とかしてんのか？』

『全然！』

秋津久志とのつきあいは、こんな会話が切っ掛けで始まった。中学三年の夏、同じクラスだった久志が教室で声を掛けてきたのだ。

それまではクラスメイトといっても特別仲が良いわけではなかったが、夏休みが終わる頃には親友になった。毎日一緒に勉強をして――、というよりほとんど教えてもらって、毎日一緒に過ごした。採点の赤ペンがキュツと鳴る音が若干トラウマになってしまった気がしないでもないが、自分がこの学校に合格できたのは、ひとえに全国テスト一位の彼のおかげだ。

そんな久志の父親が御蘭学園理事会の弁護士をしていることを知ったのはつい先日のもので、二週間後には生徒になるとは言え、現在は学校関係者ではない自分が見学できるのはそのあたりの関係なのだと思う。

久志とまた同じクラスになれるだろうか。友達が増えるだろうか。勉強についていけるか不安だ。部活は何にしよう。子どもじやあるまいし、遠足の前夜みたいな気分にいるなんて久志に知られたら笑

われる。だから昨日の電話では必死に退屈している振りをした。電話越しの様子では、もしかしたら悟られているかもしれないが――。ばさっ。

何かが落ちる音がして、亮介は顔を上げた。外の植え込みの雪ではない。もっと近い。

ふとベッドのある方角を見ると、パーティションの奥、床の上に紺色の上着が落ちていた。色合いからして制服だろう。同時に、亮介は同じ方向から冷たい風が吹き込んでくることにも気がついた。まさか窓が開いているのだろうか。

亮介はすぐ腰を上げた。寝ているところを勝手に立ち入るのは良くないが、外は雪だ。そんなものに晒されたら治るものも治らない。足音は絨毯が消してくれた。ステンドグラスの嵌ったパーティションを越え、上着を拾う。そしてベッドに横たわる人物に何気なく目を映し――。

亮介は、呼吸するのを忘れた。

眠りに抱かれているのは信じられないくらい美しい人だった。

閉じられた長い睫、白い頬、赤い唇。全てが宝物のようだった。流麗な線を描く眉、鼻梁を滑る上品な知性。柔らかそうな髪が桜色の耳朵を辿り、華奢な顎に繊細な陰影を添えている。寛いだシャツの襟元から覗く肌は真珠のように滑らかだ。

心臓がどくどくと脈打つ。体中の血が沸騰したみたいに熱い。肺が甘い蜜に侵されて上手く息ができない。隠された宝物を暴いてしまった後ろめたい気持ちと、それをも上回る途方もない悦びとがない交ぜとなって亮介の身を襲った。

触れてみたい。目を離せない。上着は腕から滑り落ち、足は勝手に枕元へと向かう。

そうして近くで見て初めて、亮介はその人物の眦がうつすらと濡れていることに気がついた。

雪だろうか。

違う。

亮介は見た。いま、その表情が悲しげに曇るのを。

そうしてまた、長い睫が震えて透明な雫を湛えるのを。

『……亮介、』

強い風に赤い尾籠度のカーテンが翻り、幕間で誰かが自分をの名を呼ぶ。

これは母の声だ。暖かい暗闇の中、母が自分を呼んでいる。

『亮介、ごめんなさい。お母さんを許してね』

額にぶつかる強い風。

落ちないように一生懸命抱きついた誰かの背の暖かさ。

逆さになった天と地。

消毒液の匂い、白いカーテン、絵本を差し出す誰かの手。

『大きくなったらまたおいで。それまでこの子は眠り続けるだろう。荊の棘に、深く深く守られて……』

亮介は手を伸ばし、寝台の上、白い頬を流れる涙を人差し指で掬った。

触れた肌は温かい。

息をしている。とても嬉しい。言葉にならないほどに――。

リ——ン、リ——ン、リ——ン。

ポケットの中から電子音が鳴り響き、亮介はふと我に返った。大きな瞳の中、間抜けな顔をした自分が映り込んでいる。

目の前の人物は瞬きを一回。ぎりつ、と物騒な形に眉が寄る。

「ふざけんなよ」

「へ？」

息づかいを感じるほど近くにいることに、亮介はようやく気がついた。

いつの間に。どうして。自分はいま一体何を？

混乱でうまく働かない頭に衝撃が走ったのは次の瞬間だった。バキッ。

妙な音がしたと思った次の瞬間、ぐらりと視界が揺れ、足が纏れる。為す術もなく床の上に倒れ、火花が散る視界に天井の火災感知器を認めてようやく、亮介は今の自分の状況を理解した。

思いつきり左頬を殴られたのだ。

「へえ、けっこう素早いな、おまえ」

ベッドから降りた人物は亮介の身体にひょいと跨がると、襟ぐりを無遠慮な力でぐいと掴み上げた。

「鼻の骨折ってやろうと思ったのに避けやがって。次は絶対に外さないからな変態チカン野郎。おい、聞いているか？ ひよつとして耳がイカれたか？」

揺さぶられながら、亮介はにわかには信じられない光景に呆然と目を見開いた。

いま、この人が自分を殴り、且つ罵ったのか。銀のスプーンとフォークしか持ったことがなさそうな手で、悪魔だつて聞き惚れてしまふいそうな美しいこの声で？

「じゃあお揃いで右も殴ってやらなきゃ平等じゃないよな。悪いが利き手じゃないから、うっかり別のところ殴るなんてこともあるかもしれないから、最初に謝っとくな。ごめんな変態。おとなしく死ね」

可憐な唇から変態だの死ねだのという言葉がぽんぽん飛び出してくると、外国の砂糖菓子の名前に聞こえるから不思議だ。

それにしても。

「へ、変態つて……。あの、俺には犬飼つて名前が」

「変態だ。おまえ、俺を知らないってことは今度入ってくる一年だろ。自覚が無いなら先輩が直々に教えてやろう。いいかおまえは変態だ。おまえが襲おうとしたのはな、俺は、立派な男なんだよ！」
激昂と共に再び拳が降ろされる。亮介は目をぎゅっと閉じて叫んだ。
「知ってる！」

覚悟していた衝撃は来なかった。恐る恐る目を開けると、彼は握った拳をそのままに、当惑した表情で自分を見下ろしている。

「知ってるって、何がだ。俺はおまえなんか知らない」

口の中は血の味がした。切れているようだ。亮介は構わず続ける。

「あー、そうじゃなくて、わかる。見ればわかるよ、男だってことくらい。そうじゃなくて、あの、大丈夫？」

「何がだ」

言うべきなのかどうかは迷ったが、亮介は再び彼に手を伸ばした。頬に指を置くと、びくん、と華奢な肩がかわいそうなくらい驚きに震える。

やめてあげられなかった。欲望に負けた。もう一度触れたかった。

「泣いてたから」

濡れている眦を親指で拭くと、眉間から剣呑な色が消えた。次いで白い頬に薔薇色が差し、瞳が恥じらいに潤む。

「あの、先輩。俺……っ！」

奥歯はぎゅっと噛み締められ、背は震え、拳は今一度握られ、そして。

「~~~~~っ！」

ドゴッ。

再びの衝撃に、亮介は今度こそ沈黙した。

「ただいまー。あれ、御園君起きたんだ」

「お世話になりました。もう大丈夫です。帰ります」

「それは良かった。ところでもう一人男の子がいたと思うんだけど

……」

「さあ、人間には会いませんでした。駄犬のしつけならしましたけど」

遠ざかる声、乱暴に閉まるドア。床に転がった携帯電話から親友の声が聞こえる。

『亮介、おまえいま一体どこにいるんだ。亮介？』

第2章 - 01

四月七日、月曜日。校門前駅改札の外、自分の姿に気付いた親友は分厚い文庫本から顔を上げニヤリと笑った。秋津久志がこういう顔をしている時はよくない。大抵意地の悪いことを考えている。事実、合流するなり左頬の湿布を人差し指で突つつかれた。

「おはよう亮介。カッコイイじゃないか。初日から泊がついたな」

「おはよ久志。朝っぱらから心にも無いこと言っくなよな。あと突つつくな！」

嫌がる亮介に、久志は眩しい笑顔で「まさか」と白々しい嘘をつく。

「心からそう思ってるって。ほらさっさと行くぞ、寝ぼすけ」

「誰が寝ぼすけだよ！ 今日はずりぐり間に合っただろ！」

「でも寝坊はしたんだろ？ 寝癖、いつものとこな」

「~~~~~、待ててば久志！」

亮介は右耳の後ろ、跳ねた髪を引っ張りつつ親友の後を追う。

本日はお日柄もよく、御園学園高等学校の入学式である。駅公舎の外、森の中へ続く桜色のトンネルは真新しい制服を着た新入生で一杯だ。よそゆきの匂いをさせた母親たちがそこかしこでカメラを構えている。

隣を歩く久志はそんな中、いつものように肩で風を切り颯爽と歩いている。背筋はすつと伸び、タイの形も完璧。上着は余計な皺ひとつない。亮介は自分の上着のぶかぶかな袖口が恥ずかしくなり、ポケットに両手をつっ込んだ。

久志は亮介の家の近くに住んでいるのだが、昨日は神奈川県にある祖父の家に泊まりだったらしく、今朝この駅で待ち合わせた。亮介の寝坊は、だからいつも迎えに来てくれる久志が不在だったせいでもある。

「で、亮介。大介さんは結局どうなったんだ？ 飛行機間に合いそうなのか？」

今朝のメールの続きだ。ちょうど電車を降りたところで中途半端になってしまった。

「大丈夫。母さんが車で送ってつたし、間に合わなかったら適当な便に乗せるよ。久志が心配することないって」

亮介は親友の杞憂を呑気に笑う。

大介というのは亮介の父の名前だ。御園大学で働いている父は今日は母とふたり揃って入学式に来る予定だったのだが、昨日急にドイツへの出張が決まり、今朝は亮介より早く家を出た。

「なあ亮介、昨日決まったんだよな、出張。フィールドワークって話だけど、ずいぶん急じゃないか？　しかも半年って結構な長さだ」久志はどこか思案気な面持ちだ。

「まあ、急と言えば急だけど」

「いったい親友はさつきから何を気にしているのか。」

「そういえば、と亮介は思い出す。去年の夏以来、久志は父を訪ねてくることが度々あった。――ひよつとして。」

「なあ久志、確かに今回はちょっと長いけどさ、でも電話もメールも普通にできるし、ネットで顔見ながら話できるし寂しくないよ？」

「ん？　ああそうか。そりゃ良かったな」

「そうだよ。亮介は鼻息荒く続ける。」

「だから半年なんてあつという間だって！　父さんのメアド、久志は知ってるんだっけ？　教えよっか！」

亮介はポケットから携帯電話を取り出し、ずいっと親友の鼻先に突きつけた。

すると当の親友は立ち止まってぽかんと口を開ける。

のち、腹を抱えてげらげらと笑い始めた。

「あっはははは！　はは、おまえってほんと、くっく」

「な、何で笑ってんだよ！　俺何か言った！？」

「気遣ったつもりで何故こんな仕打ち。シヨックと恥ずかしさで涙目になる亮介の頭を、久志はよしよしと撫でる。」

「心の底からいい子だよなおまえは。大丈夫、俺はおまえがいるか」

「らちーっとも寂しくないからな」

「久志の嫌味は高度すぎて意味わかんないんだよ……。わかりたくないから、別に教えてくれなくたっていいけどさあ……」

詳細な内容を聞いたところでさらにシヨックを受けるのは目に見える。がつくりと頂垂れる亮介に「褒めてるんだよ」と更なる嫌味を言つて、久志は湿布が貼られた亮介の頬を再びぷにぷにと突つついた。どうも気に入ららしい。

「まあ、そっちの件は俺の勘違いだったらそれでいいんだ。偶然かもしれないしな。——それにしても大変だったなあ亮介。二発も殴られたんだって？」

「……っ！」

亮介は息を詰まらせる。悪魔はニヤリと笑う。

「まあ、俺は殴られるほどおまえが一体何をしたのかってことのほうが気になるんだけどな？ 初恋も未経験だったおまえがさ。なあ、いい加減口を割れよ」

途端、亮介の脳裏にあの日の光景が蘇り、カッと体中の血が燃えた。殴られた痕に血がめぐつてじんじんと痛い。

「そ、それは……！ 久志に関係ないだろ！ ぜってえええ喋んないからな！」

知られたが最後、生涯ネタにされ続けるに決まっている。亮介は湿布を掌で押さえつつ、完全なる黙秘を誓った。

そう、二発も殴られて当然だったのだ。よくよく思い返してみれば、自分は寝ている人間に無意識とはいえ——、いや、だからこそひどいのか、不埒なことをしようとした。久志がああ瞬間電話を掛けてくれなければ、もしあの人が目覚まさなければ、あのまま——。

「……亮介、悪かったよ。俺が悪かったから百面相の路上パフォーマンスはやめてくれ。俺が苛めてるみたいだろ」

苛め以外の一体何なんだ。亮介はぐすんと鼻を鳴らす。

無論、すべての行動の責任は自分にある。あるのだが、あんな最悪

な印象を与えずに出会うこともできたのではないかと思う度、やお
ら暴れ出したくなる。

そうだ、親友に改めて恨み言の一つでも言ってやらねば気が済ま
ない。亮介は精一杯の勇気を奮い起こし、すうつと息を吸い込んだ。

「そ……つ、そもそも、久志が遅れて来るからだろ。人のこと寝ぼ
すけとか言つといてさ、何でそんなところにいるんだって、誘ったの
はそっちだろ！」

殴られた後、久志から改めて掛かってきた電話は悉く要領を得ない
ものだ。今どこにいる、保健室ってどういうことだ、学校って
御園高校か――。

「前の日に言ったこと忘れるとかさ、ほんとやんなっちゃうよな―
……って、あれ、……あの、怒んないの？」

おそろおそろ隣を見上げると、久志は前を向いたまま厳しい横顔を
している。

まさか本気で怒らせた？

「ぼ、ボケナス野郎は僕でした本当にすいませんでした……」

小刻みに震えながら謝る亮介に、しかし久志は「違う」と否定して
目を細める。

「そうじゃない。あのな亮介、俺は――」

バキッ。

「――何？今の音」

ものすごいデジャヴを感じる。亮介は辺りを見回した。中くらいの
太さの枝を無理矢理折ったような音だ。しかし無論、並木道に特に
木こりはいない。

グシャ、バキッ。青空に似つかわしくない物騒な音は続く。

「あれじゃないか？」

久志が指さしたのは並木道から逸れ、校門から続く高い塀を曲がつ
た場所だ。内容まではわからないが、言い争う声が聞こえてくる。

時折見える背格好からして御園学園の生徒だろう。

「ケンカ？」

「みたいだな」

にしては妙だ。音も声も聞こえているだろうに、ほど近い校門の前、入学式の立て看板の前に立つ教師らしき人物が止める気配は一切ない。困惑顔の新入生と保護者を中へ誘導している。

「ちょっと覗いてみようか、亮介」

「久志！？」

いつもなら馬鹿馬鹿しいと一蹴するのにどういう心境の変化だ。亮介は慌てた。躊躇わずにがさがさと枝を分けて森の中を進む久志の背を必死に追う。

「待てって！ 巻き込まれたらどうすんだよ！ 久志、新入生代表だろ？ 怪我でも……って久志に限ってそれはないだろうけど、もし上級生だったら面倒だって！」

「おまえに諭されるのは妙な気分だな。そうじゃなくて、おまえ、俺に聞いたよな。心当たりはないかって」

「え？」

「熱に浮かされたみたいに電話で喋ってたじゃないか。忘れたのか？」

確かに喋った。

あの後、四宮は手当てだけはしっかりしてくれたものの、彼の正体だけは決して教えてくれなかった。だから亮介は殴られた理由だけはそっくり抜いて、久志に相談したのだ。

「二年か三年で、身長はおまえと同じかちょっと上くらい。色素が薄くて華奢で可愛くて、でも男。それで『ちょっと』口が悪くて？ 腕っ節が強くて名前が『ユキ』って——、そんな人間、世界中探したって一人しかいない。亮介、おまえが押し倒したのはな」

「お、おお押し倒してなんかはない！」

亮介は必死に否定した。まさかそんなこと。

「訂正。キスしたのはな」

「し、してない！ 未遂だ！」

亮介は必死に主張した。

「へえ、キスしようとしたのか。やるな亮介」

「~~~~~！」

亮介は言葉を失い、久志はにんまりと笑う。黙秘の誓約はこうして破られた。

その代償は——。

「いいぜ、教えてやるよ。おまえのことだから言つとすぐ飛び出して行くと思つて、今日まで言わなかったんだけどな。——有名な人だよ」

そう、四宮もあの日、亮介にこう言った。

（有名な子だよ。いろんな意味でね）

そして今、親友は木々の枝を手で避け、亮介に恭しく道を譲つてこ
う言つた。

「おまえが探してるのは『御園由姫』。俺たちより一つ上の二年生
だ」

（けれど扱いにはくれぐれも注意したほうがいい。言っただろう？

気をつけてねって）

「気をつける。彼は正しい意味で——」

お姫様だ。

第2章 - 02

「——今、とても不愉快な単語を聞いた気がするんだが」

どさつ、と鈍い音を立て、最後の一人が地面へと崩れ落ちた。倒れ伏す生徒たちの中央に佇むその人物は地面と並行に構えた拳を下ろし、亮介たちに向き直る。

色素の薄い髪、白い肌。今は溢れんばかりの生気を湛える瞳、不機嫌そうな表情。華奢だが決して弱々しさを感ぜさせない、優雅ですらりとした体躯。

御園由姫。

「気のせいですよ先輩。おはようございます」

久志が挨拶をすると、由姫は眉を寄せたまま僅かに首を傾げる。

「おはよう後輩。どこかで見た顔だな。名前は？」

「秋津久志。親父が世話になりました、毎度どうも」

「ああ、秋津さんの。道理で見覚えがある筈だ。で、そっちの駄犬は？ 挨拶無しか」

ジトつとした眼差しを向けられ、しかし亮介は何の反応も返せない。

「おい聞いているか？ おまえを待ってたんだ。おかげで朝から絡まれるし最悪だ」

喋ってる。こちらに近づいてくる。確かに自分を見ている。

「そいつらは？」

「俺が知るわけないだろう。こいつらは俺のことを知ってたみたいだがな。よくわからないが、朝っぱらからキモチワルイことを言うから殴ってやつただけだ」

呆れた息を吐く。眉間に深い皺が寄る。疑いようもなく、彼は今ここにいて、目の前で、ごくあたりまえのように息をしている。

夢じゃない。

「いい洗礼になったじゃないですか。彼ら、あなたのおかげで目が覚めるかもしれませんよ。ま、別の意味で目覚めたらそれはその時ってことで」

「別の意味？　どういうことだ」

「独り言ですからお気になさらず。おい亮介、どうしたんだ固まって――」

「そうだ犬飼！――俺はおまえに話が……」

再び亮介を見る由姫の肩がびくりと跳ね上がった。

「お、おまえ、どうしたんだ？」

「へ？」

まばたきをすると冷たいものを睫が弾くので、亮介は頭上を見上げた。葉っぱから雫でも落ちたのかと思っただ。けれど見上げる空は一面の青、雨の気配は微塵もない。ではこの頬を流れるものは一体何なんだろう。

「おまえ一体何泣いてるんだ？　お、俺はまだ何もしてないぞ！？　なあ何もしてないよな、秋津！」

由姫は激しくうろたえながら久志に同意を求める。どうやら突発的な出来事に弱い性質のようだ。

「せ、先輩かわいい……」

「先輩いい人ですね」

「前者、泣きながら鼻の下を伸ばすなキモチワルイ！　後者は鼻で笑うな！　――ああもう、とりあえず泣き止め！　話がちつとも進まない！」

「うわっ……！」

上着の袖で乱暴に目元を拭われ、今度は亮介がうろたえる番だ。由姫の指先から何かの果物のような、頭の芯をくくらさせるいい匂いがする。

「わ、わかりました！　あの、自分で出来ますから触らないでください……！」

聞いた由姫はムツと眉を寄せ、後ずさる亮介のネクタイをむんずと

捕らえて引き寄せる。

「随分な物言いだな、ええ？ 俺にあんなことしておいて」

ささやく声は内緒話の意図しかないし、頬が薔薇色に染まっているのは怒っているからだとわかつている。わかつているのだが――。

「犬飼。おい、犬飼？ ……なあ秋津、こいつは熱でもあるのか？

どうも様子がおかしいんだが」

その場にぐにやりと崩れ落ちる亮介に由姫は首を傾げ、久志は喉奥でくつくつと笑う。

「いま熱を計れば面白いことになるかもしれないですよ。おい亮介、俺は先に行くからな。半生カステラみたいになってないでしゃんとしろ。先輩、あとは二人でごゆっくり」

「キモチワルイことを言うな！」

遠ざかる久志の背を睨み、由姫はぎりつと奥歯を噛む。

「くそ、一筋縄じゃいかなさそうな奴だな……。おい犬飼、聞こえるか？ 話がある」

「き、聞こえてます。ちょっと色々衝撃が強すぎて」

じんじんする鼻の根元を抑えつつ、どうにか人としての形を取り戻した亮介は立ち上がる。

気を抜いたら確実に鼻血が出る危険なラインだが、こちらもしておかなければならない話があるのだ。

「先輩、あの、俺」

「――しつ。黙れ」

由姫は声を潜め、亮介のネクタイを再び強く引つ張った。

「先輩？」

そつと空を見上げた由姫の視線を追う。

高い鉄柵に一羽のカラスがとまっている。珍しいカラスだ。翼はマントを羽織ったように分厚く、尾が長い。つぶらな目でじつところちらを見つめている。

「いつの間に……。最初からいたっけ？」

カラスはゆつたりとした仕草で翼を広げ、高い空へ飛び立って行く。

その姿がすっかり消えてしまつまで見送つて、由姫は口を開いた。

「犬飼。誰にも言つな」

「何を？」

わからずに首を傾げると、悟れと言わんばかりに由姫が睨めつけてきた。心なしか頬が赤い。

「俺がその、……な、泣いてたことだ。誰かに言つたらぶちのめすからな。引きちぎるからな？」

何をとツツコミを入れたいが我慢だ。

「もちろん！ 絶対に言わない。誰がそんなもつたいない！」

「は？」

「じゃなくて、言いません。絶対」

由姫は大きな瞳で亮介をじつと見つめ、「うん」と頷いた。

「信用する。あれはその、……夢を見てて。それだけだ」

夢？

「それって、」

「ふたつ」

太陽がふいに雲の中に姿を消した。

森を吹き抜ける冷たい風に乗って、由姫の手からするりと亮介のネクタイが離れる。

「二度と俺に近づくな」

氷の眼差し。斬るように告げられた言葉に、亮介は目を見開いた。

――それは。

「いいか、絶対にだ。……俺の話はこれで終わりだ」

言い含め、由姫はあっさりと背を向けて去ってゆく。

「先輩、待つて、先輩！」

それはできない。

亮介は震える咽喉で叫んだ。

「俺、あの日のこと謝りたくて、それで！」

「謝罪は受け取る。けどそういうことじゃない。俺は一人でいたいんだ。だから近づくな」

「先輩！」

どんなに呼びかけても、由姫は決して立ち止まらない。拒否しか示さない後ろ姿に、亮介の胸がぎゅっと苦しくなる。

初めて会った日から二週間、ずっと由姫のことばかり考えていた。何度も悲しい夢を見た。記憶の中の由姫はやはり泣いていて、頬を止め処なく流れる涙を拭きたいのに、震える肩を抱きしめてやりたいのに、いつも手が届く寸前でその姿が闇に掻き消されてしまう。門の錠前は非情な音でこちらをあちらを分け隔て、声すらも届かない。

校門が近い。あの門を潜ってしまったら、もう本当に二度と会えない気がする。

この人を――。

この人を一人にしてはいけない！

「先輩！」

「！」

強引な力で由姫の腕を掴む。

驚いて振り向いた細い身体を、亮介は精一杯の力で腕の中に抱きしめた。

「それは聞けない。絶対に嫌だ！俺、……俺、先輩が好きなんだ！」

縋るように首筋に顔を埋めると、狂おしいくらい甘く切ない匂いが肺を満たした。熱い血は体中を駆け巡り、言葉にならない衝動が由姫の背を抱きしめる力を強くする。

嫌だ。絶対に嫌だ。

離れてしまふのは絶対に嫌だ！

「好きなんだ。だから——」

「……犬飼」

由姫が静かな声で自分の名を呼んだ。

「せんぱ——、あ」

顔を上げると、真顔でこちらを見つめる教師と目が合った。教師だけではない、はらはらと桜が降り注ぐ中、生徒も保護者も、すべての人間が動きを静止してこちらを見ている。

「……せ、せんぱ……い……」

亮介は自分の身体からさーっと勢いよく血の気が引く音を聞いた。ごきり、と胸元で由姫の拳が鳴る。

「ちよ、あの、すいませ、心から反省しっ……！」

ア——ッ！

「——何だ、今の悲鳴は」

跳ね橋の上、亮介の声を聞きつけた一人の少女がふいに立ち止まった。顎に添うように切り揃えられた黒髪が印象的な、涼しげな眼差しの少女だ。彼女は後ろを振り返り、既に見えなくなった坂の下を眺める。

「御園君が来ているから嫌な予感はしていたんだが……。まさかもう被害者が出たのか」

そもそも二年生の彼が今日一体何をしに来たんだ？

考え込む彼女の隣でくすくすと笑う声がある。

「何がおかしいんだ、七瀬」

「だって、椿がすごく可愛いんだもん」

長い巻き毛が花束のようにふわふわと揺れる。まったく外見の異なる二人だが、注意して見てみると、その顔立ちがよく似ていることが分かる。彼女たちは双子だ。

「可愛い……？」

七瀬と呼ばれた少女は片割れの少女の前髪に手を伸ばした。

「ほら、花びら」

白い指先から零れた桜の花弁は風に乗リ、跳ね橋の下を流れる小川にちいさな水紋を投げかけた。椿は表情を変えぬままその光景を見つめる。

「そういうことは早く教えてくれないか、七瀬……」

「ふふ。照れなくなつていいのに、椿」

周囲から次々掛けられる挨拶に笑顔で答えながら、七瀬は軽やかな足取りで歩いてゆく。

その背を見守る椿の目にふいに暗い影が過ぎった。

一羽のカラスが翼を広げ、城門から空へと飛び去ってゆく。

【予言 黄金の魔女】

暗闇の中、古めかしい電話の音が鳴り響いている。時刻は午後三時を回った頃だが、部屋をぐるりと囲む黒い遮光カーテンは厚く、どんな光も通しはしない。この部屋は主が起きたときに朝になり、眠る時に夜となる。

電話は未だ鳴り響いている。諦める気配はない。しばらくした後、ようやくといった具合にギシリと音がして、乱暴に受話器が上げられた。

『やおおはよう。雨も上がって素晴らしいティータイムだぞ。さっさと起きたらどうだ』

「……。」

『ああ待て！ 頼むから出てきてくれ。久しぶりなのに顔も見せてくれないなんて酷いじゃないか』

長いためのらいの後、暗闇に刺し傷のような光が差し込んだ。ベッドの上、妙齡の女性が真鍮の受話器を片手にカーテンを引き、雨上がりの世界の眩しさに目を細めている。よれよれの大きなＴシャツにハーフパンツというだらしない格好だ。背の中程まである長い髪は寝癖だらけで、所々絡まっている。

彼女は電話機を乱暴に蹴り出してベッドを降りると、寝る前床に脱ぎ捨てた白衣に袖を通し、バルコニーへと続く扉を開けた。

青空の下、ガーデンチェアに腰掛けた男はその姿を見るなり呆れた顔をした。

「寝起きが悪いのは相変わらずだな、朱葉」

一見しただけでは男の年頃はわからない。若い顔つきをしているが、その瞳は恐ろしく深く、覗き込めば奈落に堕ちてしまいそうな気さえる。羽織るコートも闇の色だ。

「人の部屋に勝手に電話を通すな、無礼者」

散らかった床の上、蹴り出されたはずの電話機はどこにもない。電

話線はとうの昔に寸断され、部屋の隅で埃塗れになっている。

「俺なりに気を遣ったつもりだよ。いくら幼なじみとはいえ、女性の寝室に勝手に入るのはよくないと思ってね。こいつの嘴で窓をノックした。でもおまえが起きないから」

男の傍らに置かれたスーツケースの取っ手には、一羽の鴉がとまっている。随分懐いているようで、男が頭を撫でるとくすぐったそうに身を揺らす。

「いつ戻ってきたんだ」

「ついさっき」

「どこへ行っていた」

「いろいろな所へ」

「――何を始めるつもりだ」

問われた男は悪だくみの顔をし、椅子の肘掛けに頬杖をついた。

「いばら姫の童話を知ってるだろう、朱葉」

長い間子どもが産まれなかった王様とお妃様に、待望の姫君が産まれた。祝宴の日、招かれた魔女は十二人。招かれざる十三番目の魔女は、姫君は十五の誕生日、糸紬の錘に指を刺されて死ぬと呪いを掛けた。しかしまだ祝福を贈っていなかった十二番目の魔女がこの呪いを修正し、姫君は眠りにつくことになる。

そして百年後、運命の日は訪れる。

「姫君はいばらを越えてやってきた王子様の口づけで目を覚ます――」

男は遠い日を懐かしむように目を伏せた。

「……そんなはずはない」

朱葉は震える手をきつく握りしめた。

「終わったんだ。すべて、終わってしまった……」

両手を血に染めて立ち竦む男。膝を折る少年。骨の欠片も残さず消えてしまった姫君。今も記憶の炎の中で揺らいでいる、それは悲劇に終わってしまった物語だ。

「違う。幕が下りても、呪いはまだ続いている。俺にはまだ為すべ

きことがある。人間の傲慢が全ての始まりだというならば、俺は全てを終わらせなければならぬ。――この命に代えてでも」

男は立ち上がり、足元の水溜まりに革靴のつま先を浸した。

「ご覧、面白い子がいるんだ。彼ならば新しい王子役に相応しいと思うんだが」

揺らぐ水面には、青空ではなく別の風景が映し出されている。校舎の中だ。一人の少年が前を歩く少年を追いかけている。気付いた少年にアップパーをくらっている。床に倒れた。めげずに立ち上がってまだ後を追いかける。抱きついた。吃驚したらしい少年の肘で鳩尾をやられ、ついでにマウントポジションをとられて顔中を引っ掻かれている。

「――誰が何だって？」

朱葉が白い目で見つめると、男は苦し紛れの咳払いをした。

「素質はあるぞ。大介の息子だ」

「大介？ 犬飼大介か。あの童顔の」

「似てるだろう？ 見ているこっちが照れてしまうくらい、とてもまっすぐでいい子なんだ」

「関係のない人間を巻き込むのか。おまえのそれだって、結局は自分の欲望じゃないか！」

「そうだ。朱葉も気づいていたはずだ。俺という人間の本質に」

そう、紀野由彰はそういう男だった。自分自身が気付いていなかっただけで、すべての人間を受け入れながら、本当は拒絶していた。

たった一人を除いて。

「朱葉は今この第九病棟に引き籠もって、依頼を受けたりしているんだって？ 生徒の間でも噂になっていているようじゃないか。第九病棟には魔女がいて、辿りつけた者の願いをたった一つだけ叶えてくれるって。ということはつまり、俺も立派な資格者ということになるんだが」

「残念だが私は仕事を選び好みする。おまえの顔は私の好みじゃない」

「選んでいるのは仕事でなく顔なんだな……。生まれつきだから諦めてくれ」

カラスが漆黒の翼を広げ、青空を裂くような声で鳴いた。

「もう時間だ」

「由彰！」

男は朱葉の白衣のポケットに何かを滑り込ませ、耳元でこう囁いた。
「協力しろとは言わない。だからせめて邪魔だけはしないでくれよ、朱葉。幼なじみの惨い死体なんて、俺は作りたくもないし見たくもないんだ」

酷薄に微笑む男の右目が蒼い光を灯す。

「！」

息を奪うほどの突風に朱葉はきつく目を瞑った。

再び目を開けた頃には、バルコニーにはもう誰もいない。朱葉はポケットを探り、男が寄越したものを確認して思い切り顔を顰めた。
チョコレートだ。

「あいつめ、私を一体いくつだと……」

再び水たまりを覗き込むと、先ほどの少年は気を失ってしまったらしい、攻撃を加えた少年に廊下をずると引き摺られている。辿り着いた場所は保健室だ。開いた扉の中にぽいと放り込まれている。

「……王子様ね」

亮介を見据える朱葉の目が黄金に輝く。これでは王子様というより――。

第3章 - 01

「はい、ちよつと沁みるよー。えいつ！」

「ふっ！」

額に消毒液の染みこんだ綿をじゅつと押しあてられ、亮介は声にならない悲鳴を上げた。

「えらいえらい。そうだよ、男の子なら我慢しなくちゃね。えーつと、大きめの絆創膏まだあったかなあ」

「楽しそうですね先生……」

放課後、保健室である。じんじん痛む額をどうすることもできず、涙ぐむ亮介を尻目に、戸棚のガラスに映る四宮は「そりゃ楽しいさ」と朗らかに笑う。

「由姫君に殴られた子は大勢手当てしてきたけど、大抵は一回殴られておしまい。けど君は思ったとおり、骨がありそうじゃないか。今日も保健室皆勤おめでとう、犬飼亮介君」

お祝いの言葉と共に、新たに四角形の絆創膏がぺたりと額に貼り付けられる。両頬と鼻の頭、顎に続いてこれで四力所目。勲章はもうこれ以上貼るスペースがない。

入学から一週間、亮介はすっかり保健室の常連になっていた。つまり――。

「君、すっかり有名人だよ。あの御園由姫君に何回殴られても懲りない新生がいるって。この調子でがんばってね！」

「がんばります！」

四宮の励ましにぐつと拳を握る、つまり亮介は由姫の『二度と近づくな』という言いつけを全く守っていなかった。

「……って有名人？」

「まあそれはともかく。休み時間に昼休みに放課後に、本当に頑張るね。そんなに由姫君と一緒にいたい？」

問われ、亮介は「それはそうなんだけど」と口ごもる。

「俺にもよくわかんないけど……。何となく嫌なんだ。先輩を一人にするの」

「一人、ねえ。確かに由姫君には特別親しい友達はいないみたいだけど、君の考えるような心配はないと思うよ？」

「そうじゃない。亮介は首を横に振る。」

「先輩、休み時間も昼休みも教室にいないんだ。放課後も授業終わったらすぐ教室出て行っちゃうみたいで、でも探すと必ず学校のどこかにいる。帰ってるわけじゃないんだ」

四宮の言う通り、由姫は中学の頃から特別親しい友人はいないらしい。ただしクラス内で浮いた存在というわけではないようだ。由姫のクラスメイトは亮介にも好意的で、彼がどちらの方角に向かったか時々こっそり教えてくれたりもする。

何か原因があつて、結果的に一人になつたわけではない。由姫は恐らく、最初から望んで一人でいる。

「怖いんだ。だからどんなに怒られても殴られても、……嫌われても、先輩と一緒にいたいよ」

だけど弱気にならないことがないわけじゃない。拒絶されるより嫌われるより、もっと辛いことだってある。

亮介が俯いていると、絆創膏に覆われた鼻の頭を四宮の人差し指がちょんと突ついた。

「……？」

見上げると、その顔は何故か嬉しそうだ。

「大丈夫。君は見込みがあるよ。御園君は犬飼君のことを嫌ってなんかない」

四宮は断言する。

「……なんでわかんんの？」

「君の顔の傷が良い証拠だよ。青あざはともかく、ひつかき傷なんてつけられたのは君が初めてだ。よほど混乱したんだろうねえ。入学式といい今日といい、君、彼に一体何をしたんだい？」

「……の、ノーコメントでお願いします」

鼻を抑えて真つ赤になる亮介の様子に、四宮はくすくすと笑う。

「ませた事を言うね。いいよ、勝手に想像するから。そうだなー、例えば公衆の面前で告白しちゃったり、思わず抱きついちゃったりとか？」

「~~~~~」

亮介は頬を膨らませた。その通り、今日も我慢できずに抱きついてしまったわけだ。結果として顔中をしこたま引つ搔かれた。通りすがりの久志に笑われた。

四宮といい久志といい、自分の周りにはどうしてこう一筋縄ではないかない人間ばかりなのか。これはもう二人揃って仕返してやらなければ気が済まない。亮介は床の上に置いた鞆を肩に掛け、澄まし顔を作って立ち上がる。

「先生、俺の親友にちよつとだけ似てる」

「ん？」

「秋津久志って言うんだけど、すっごい優等生でさ。でも大人の前では猫被ってるだけから、先生騙されないほうがいいよ」

「それはそれは。会うのが楽しみだ。でも僕にバラしてしまっているのかい？」

「いい。代わりに久志には、保健室の四宮先生はキク……、キチクですって言うておくから！ 手当ありがとうございました！」

言い捨て、亮介は保健室の扉を開ける。

ちなみに『キチク』の意味を亮介は今ひとつ理解していない。

「あつははは！ はいはい。また明日ね、犬飼君」

四宮は亮介の背後で盛大に笑い転げている。悔しいので振り返らない。結局は弄られっぱなしのまま、しかし少しだけ元気をもらって、亮介は保健室を後にした。

第3章 - 02

もう大方の人間が帰ってしまったのだろう、校舎内はしんと静まり返っている。今日は水曜日だ。部活動も行われていない。腹も減ったし、駅前で寄り道して帰ろう。亮介は鞆を背負い直し、久志の待つ玄関ホールへと走る。

廊下はステンドグラスから斜めに差し込む陽の光で虹色に輝いている。ゆらゆらと、海の中から水面を見上げているようで気持ちがいい。

よそ見をしながら歩いていた亮介は、なので曲がり角の向こうから誰かが来ることにまったく気がつかなかった。

「う、わ……っ！」

衝突は避けられたものの、亮介は身体のバランスを崩し、その場にどすんと盛大な尻餅をついてしまう。

「つてて……、」

一体誰だ。いや、ぼんやりと天井を見上げて歩いていた自分が悪いのだが。

身体を起こそうとした亮介にすつと白い手が差し伸べられる。

「すまない、大丈夫か」

揺らめく虹色の光の中、亮介の前に跪いたのはひとりの少女だった。

「あ、えつと……、大丈夫です！ 自分で立てます」

亮介が慌てて立ち上がると、少女は無表情のまま「そうか」と頷いた。

耳の下で切り揃えられた髪が印象的な少女だ。雰囲気は大人っぽいから、上級生だろう。

「私の不注意で、すまなかった。考え事をしながら歩いていた……」それはこっちも同じだ。亮介は軽く頭を下げる。

「俺の方こそちゃんと前見てなくて、すみませんでし……た……？」言葉尻が疑問系になったのは、彼女が亮介の頭のとっぺんからつま

先までを検分していることに気付いたからだ。

「…………あの？」

「君だな。入学式の日、校門の前で悲鳴を上げていたのは」

「え？」

「顔の傷だ。由姫君にやられただろう。新入生の中に、彼に果敢に挑戦する人間がいると聞いている」

「あーえつと…………あはは…………。はい」

実感するのはさすがに恥ずかしい。亮介は顔を赤くする。

「名前は」

「い、犬飼です。犬飼亮介」

彼女は表情に乏しく、果たして今自分が尋問を受けているのか笑われているのかわからない。

もしかして由姫のクラスメイトだろうか。問おうとした時、彼女の右手が握手の形に差し出された。

「私は天竜寺椿。三年生だ。遅ればせながら、この度は入学おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

亮介は上着で掌を擦り、恐る恐る手を伸ばす。

女の子と握手をするなんて初めてだ。緊張する。

しかし。

「——君、もしかして犬飼奈月先輩の弟じゃないか？」

握手の寸前、椿の口から飛び出た思わぬ人名に、亮介はびしりと石化した。

「…………な、なつ姉を…………。知ってるんですか…………？」

「知っている。というか、今の三年生で彼女を知らない人間はいないだろう」

「…………！」

椿の言ったとおり、犬飼奈月は亮介の姉であり、現在は隣の御園大学に通っている。

どうして考えなかったのだろう。亮介の唇が戦慄く。姉が卒業した

のは一昨年のもので、だからもちろん、現在の最上級生には奈月を知っている人間がいるのだ。

姉は一体この学校ではどんな暴虐の限りを尽くしたのか。どうしよう。復讐される！

まだ見ぬ復讐者に怯える亮介を置いてけぼりに、椿は話を続ける。

「無論、彼女は私のことなど知らないだろうが、美しい人だからなどこにいてもよく目立った。彼女には弟がいると風の噂に聞いていて、もしかしたらと思ったんだ。犬飼なんて、そうよくある苗字でもないだろう」

美しい。美しい。美しい。

美しい？

姉から最も遠い惑星の言葉が亮介の石化の呪いを解いた。

「先輩！ 美しいって、何だ！ それ！ あいつ家じゃすんげえだらしないんだぜ！？ 食器片付けないし俺のセーブデータ勝手に消すし、コップの飲み物最後まで飲まないで部屋に放置するし夜中でも平気で俺をパシリに使うし！ 昨日も俺の買ってきたアイス勝手に食べたんだぜ！？ あー思い出したら腹立ってきた！」

亮介は頭を抱える。美しいとは目の前の椿や、それこそ由姫に捧げる言葉であって、姉ごときに使って良い形容詞では決して無い。

「あいつ学校でも猫被ってたんだ……うええ……」

ちなみに、奈月は近所でも『犬飼さんちの綺麗なお嬢さん』で通っている。

この分では大学でも同じ調子か。亮介が食傷気味に口を抑えようと、それまで事態を静観していた椿の唇がふいに緩んだ。

「ふ、ふふ」

その光景を見た亮介はぽかんと口を開けた。口元に指先を置き目尻を下げて笑う椿の印象は、たった今話していた人物と同じなのかを

疑ってしまうほど妖しい魅力に溢れている。

「ふふふ。そうか。人は見た目によらないということだな。わかった、心得ておこう」

椿は呼吸を落ち着けると、「では」と亮介に別れを告げる。

「私は行く。君は追いかけていいのか？」

「え？」

「由姫君だ」

彼女が視線を送った方向を見ると、窓の向こう、プロムナードへと歩いて行く由姫の背が見える。

「先輩！」

ぱつと顔を輝かせる亮介を、いつの間にか無表情に戻った椿が窘める。

「念のため言っておくが、廊下は走らないように」

「う。はい、すみません」

「それではまたな、犬飼」

「はい。さよなら……」

通り過ぎる瞬間、椿の白い頬が何かを反射して光る。

虹色にきらきらと光が零れるそれは――。

鱗？

ぎょつとして振り返るが、椿はもう後ろ姿しか見えない。

亮介は窓を見上げ、分からないよう小さく息を吐いた。まさか、間違いだ。ステンドグラスの光か何かだろう。

踵を返し、由姫の元へ急ぐ亮介の背後、虹色の光がぐにやりと蠢く。波のように思えるそれは形を取り、亮介を観察する仕草を見せた後、椿の影にしゅるりと巻き付き、消えた。

それは翼を持つ巨大な龍のようにも見えた。

第3章 - 03

「先輩！」

「——おまえ、まだ残ってたのか」

声を掛けるなり、キツと睨み付けられるが挫けない。亮介は由姫の後を追う。

「先輩こそどこ行くの？ もう帰ったかと思った」

「おまえに関係ないだろう。さっさと帰れ」

「先輩が帰ったら俺も帰るよ」

「ついてくるな」

「やだよ」

由姫がぴたりと立ち止まったので、亮介も立ち止まる。

「なあ、犬飼……」

「なに？ 先輩」

「おまえ、日本語理解できるよな」

「できるよ。あんまり難しいことだとわかんないけど」

「日常会話ができれば充分だ。なあ、おまえ俺が言ったこと覚えてるか？」

「どれのこと？ 俺が先輩の言ったこと忘れるわけないよ」

「そうか……」

振り返った由姫は不機嫌そうな顔をしている。

ここ数日でわかったことだが、彼はその表情がニュートラルらしい。中学からエスケーターで上がってきたクラスメイトに聞いた話では、中学の時から彼はずっとそんな具合だそうだ。反面、どうにも思っていることが態度に出やすい性質でもあるようで、亮介はこの一週間で、エビフライが由姫の好物であることを知った。学食で定食の食券を買う由姫の頭の上に明らかに不機嫌な音符が浮かんでいたからだ。先輩カワイイ！と後ろから抱きついて強烈な回し蹴りを食らった。頭には未だにこぶが残っているが本望だ。

発見はまだある。彼が本当に不機嫌な時、怒っている時は眉間に深い皺が寄るのだ。

そう、今みたいに。

「俺、おまえに言っただよな？ 二度と俺に近づくな。なあ、確かに言っただよな？」

「うん。聞いた」

亮介は頷く。確かに聞いた。

「それなら……、」

一旦言葉を句切った由姫は両手の拳を握り、すっつと息を吸った。亮介はぐつと肩に力を込めて衝撃に備える。

「何でおまえは！ ずっとこうして俺につきまとってるんだ！ いい加減にしろ！」

ビリビリとした怒号に驚いた鳥たちが、一斉に街路樹の枝から空へ飛び立って行く。亮介といえbaum慣れたものだ。鼓膜の震えが収まるのを待つて、まっすぐに由姫を見据える。

「俺、決めたんだ。それに関しては先輩の言うことは一切聞かない」「はあ？」

由姫が心底呆れた顔をする。

「何なんだそれは。どういっつもりだ？」

「先輩、一人でいたいって、そう言っただよな。だから自分に近づくなつて。覚えてる？」

「……言っただ」

「嘘だろ、それ」

言っただ瞬間、由姫の瞳が剣呑な光を帯びた。

亮介の背に冷たい汗が伝う。ごくりと喉が鳴る。ここで退いてしまつては駄目だ。

「そんな顔して睨んだつてダメだよ。先輩が何で嘘つくのかわかんないけど、……うまく言えないけど、俺、先輩を一人にしたいくないんだ」

四宮にも言っただように、それはただの直感であつて何の根拠もない。

けれど由姫の行動は、一人を好むという漠然とした理由の裏付けとしては不自然なくらい一貫していた。

休み時間も昼休みもない。放課後もない。けれど帰っているわけではない、正門が閉まる時刻まで必ず学校内にいる。見つかる場所はいつも違う。学校の地図にも載っていない場所にいることが多い。

「先輩、何か探してるんじゃないの？」

それが亮介の出した結論だった。

「——何のことかわからない」

「嘘だ」

御園由姫は正直だ。必ずどこかに嘘の証拠を残す。握り込んだ拳に、悔しそうな表情に。

「おまえには関係ない！ 何のつもりか知らないが、もう俺につきまとうな！」

「関係あるよ！ 先輩こそ聞いてなかった？ 俺、言ったよ。先輩のことが好きだって」

「おまえ、まだそんなことを……」

肩のため息を吐く由姫に、亮介の胸は軋む。そう、拒絶されるより嫌われるより辛いこと。

「……やっぱり、信じてないんだ。俺が先輩のこと好きだって」

「当たり前だ。俺は男で、おまえも男なんだぞ？ 冗談はよせ」

由姫は信じていない。信じない。当たり前のことだ、男は男を好きにならない。

受け入れて欲しいと思うのは亮介の願望で、離れていると不安になるのは亮介の主観だ。結局のところ、亮介は由姫に自分の我が儘を聞けと訴えているだけで、由姫には充分、亮介を殴る権利がある。それでも、この想いだけは嘘だと思って欲しくない。

「俺、本気だよ」

切実な気持ちが堰を切って溢れる。

「俺の事、気持ち悪いって思つかも知れないけど、これだけは譲れ

ない。俺、先輩が好きなんだ。先輩のために何かしたい。先輩が考えてること知りたい。俺、本当に、本当に先輩が好きなんだ！」

告白はもう幾度目になるか知れない。

切っ先だけでもいい。届いてほしい。
願う亮介の表情に何を読み取ったのか、由姫は不可解なものを見るような顔をし、怯えたように一歩後ずさった。

「——知らない」

「先輩！」

再び背を向けた由姫の手を掴まえた亮介は目を瞋る。

由姫の薄い肩が、指先が、小刻みに震えている。

「……ごめん」

気付いてしまえばもう触れていることはできなかった。亮介が謝って手を離すと、由姫はその行為にこそ傷ついた顔をして振り返る。

「何でっ……！」

そうして口を噤む。

「先輩？」

「……もう、帰る。おまえも、……帰れ」

俯いた由姫がどんな言葉を呑み込んだのかはわからない。けれど逃げるように走り去った背をこれ以上は追えなかった。

亮介は由姫の姿が植え込みの向こうに消えるのを見送って、力なくベンチに腰を下ろす。

「……嘘だ」

嘘だ。拒絶されるのも嫌われるのも本当はイヤだ。届くだけではだめなのだ。

恋なんて想像していたのと全然違う。亮介は苦しい息を吐く。

たとえば世界中の善いものばかりを集めた箱があったとして、今までの自分は、恋とはその中で一番素晴らしい秘密なのだと信じていた。だからずっと、自分は秘密を分かち合える人を探していた。父と母のように。

けれど違った。亮介にとっては由姫こそが途方もない秘密そのもの

だ。すべてを知りたい、すべてを暴きたい、すべてを手に入れたい。身の内に巢食う得体の知れない澱はただ恐ろしくて、けれどその場所こそ、由姫に掬い上げてほしいとも思うのだ。

「こんな欲張りだったかな、俺」

由姫の怯えた目を思い出せばどうしようもなく切なくなつて、亮介は再び空を見上げた。

オレンジ色の夕陽は由姫の瞳と同じ色だ。

涙でうつすらと滲む世界は亮介を慰めるようにやさしく、美しかった。

【幕間】

「——あれっ？」

目を開けると、満点の星空が視界を埋め尽くしている。亮介は身を起こし、辺りを見回した。

夜だ。

自分は眠ってしまったのだろうか。それにしても眠気の残滓が欠片も残っていないが——。

亮介は制服の上着から携帯電話を取り出した。時刻を確かめようとするが、画面は真っ暗だ。電源ボタンを長押ししても反応がない。充電が切れたらしい。

とりあえず帰ろうと立ち上がったところで、亮介は重大な事実に気がついた。

「——ごめん、久志……」

亮介の顔から見事に血の気が引いた。

そういえば、秋津久志と玄関ホールで待ち合わせをしていたのだった。駅前の本屋に寄って帰ろうと約束をしたのだ。

由姫を追いかけるのに夢中で、すっかり忘れた上に寝こけてしまった。

「なんて言えない……けど言われる……絶対絶対言われる……！」

明日は一体どんなお仕置きが待ち受けているんだろう。考えると背がぶるぶる震えてとまらないが、とにかくまず家に帰らなければならない。フォローは帰ったら速攻、正座でイイ電だ。

ここから跳ね橋へは一本道だ。迷うこともない。

そうして帰途についたはずの亮介は、何故かその十分後、白薔薇の生垣の迷路の中で途方に暮れることになる。

「……どう？」

真っ青になる亮介の頭上、静かな空に星がひとつつ流れた。

第4章 - 01

遭難しかけた子がいてね。

とぼとぼと道を歩む亮介の脳裏に、初めて学校を訪れた日の四宮の言葉が蘇る。

『幽霊に会ったとか何とか、ちょっとした騒ぎになったんだ。それで、案内板をつけることにしたってわけ』

「……ねーよ」

無かった。

「どこにもねーよ案内板！ どこだよこー！」

薔薇の生垣の迷路の中、亮介の叫びが星空の下に虚しく響き渡る。

無論、答える声はない。

代わり映えしない景色の中をもうどれくらいうろついているのか検討もつかない。袋小路にぶち当たっては引き返し、ぶち当たっては引き返しを延々繰り返している。

由姫を追いかけて学校の様々な場所を探検した経験上、学園の地図に載っていない建物がいくつも存在することは既に知っていた。恐らくここもそうした場所なのだろうが、たとえプロムナードを逆にいったとしてもこんな広大な迷路はない。校舎に戻るだけだ。分かれ道もない。

「つーか、何なんだこの霧」

亮介は辺りを見回す。いつの間にか濃い霧が空から降りてきている。三歩先とは言わないが、消失点は真っ白だ。街灯が規則正しい間隔でぼんやりと光っている。

『幽霊に会ったとか何とか』

ぴたりと亮介の足が止まる。

まさか。

「……無いな」

まさかまさかそれは無い。亮介は自らの空想を鼻で笑った。

何でそんなこと考えちゃった俺。亮介は再び軽い足取りで歩き始める。

ユーレーなんてありえないって現代社会。亮介の足が少しだけ早くなる。背筋が冷たいのは気のせいだ。後ろに何かの気配を感じたりなんて絶対しない。

気がつけば亮介は全速力で迷路の中を走っている。

だから無いって絶対無いって霧が濃いのは自然現象だってあーもー帰ったらまた久志にバカにされる久志迎えに来てお願いiiiiiiiiい！

「ふあぶっ！」

何かが顔面にぶち当たり、亮介は本日二度目の尻餅をついた。

「つててて……」

踏んだり蹴ったりだ。身を起こした亮介の上に、ぬっと影が被さる。恐る恐る見上げた先に、血のように輝く一対の赤い目が――。

「ぎゃあああああああー！」

ユーレーiiiiiiiiい！

「うつせーよクソガキ」

「あてっ」

ごつんと頭の天辺に軽い拳骨を喰らった亮介は、霧の中、自分の知っているスニーカーの星形のロゴを発見する。

再び見上げると、逆光になった街灯の下、Ｔシャツにジーンズ、パーカーを羽織った出で立ちの青年がかつたるそんな顔で亮介を眺めていた。

「こんなとこで何やってんだ、おまえ」

「い、……生きてる？」

「はあ？」

事情を話したところ、ユーレー改めきちんと足がある青年はそれこそ死ぬほど呆れながらも、亮介を迷路の出口まで案内してくれるこ

とになった。

「高校生が何でこんなところにいんだよ。ここ大学の敷地内だぜ？
しかもとくに閉鎖されて、入口にも出口にも鍵が掛かってる。お
まえどっから入ってきたんだ？」

「それがわかればって思うんだ、ですけど。ここ、何で迷路になっ
てんの……ですか？」

「知らね。大昔の防犯のためとかじゃねえの？ 俺も最初は迷い込
んだんだけど、迷路の真ん中にある東の塔がけっこう居心地よくて
さ。よく入り浸ってたんだ」

「ふうん。俺は普通にプロムナードから跳ね橋に歩いて行っただけ
で、何がどうなったのかさっぱり」

「プロムナード？ へえ、そんなのが出来たのか。俺が居た頃には
無かったな」

「もしかして卒業生？」

「そ。大先輩だぜ。ちゃんと敬語使えよなー、クソガキ」

亮介は「うん！」と元氣よく返事をし、また頭をばかりとやられた。
見たところ、青年の年齢は二十代前半くらいだろう。カッコイイと
いうより美人という言葉が似合う顔をしている。かと言って女性め
いた雰囲気はかけらもない。亮介の周りにはちよつといない、少し
危うい感じがする人だ。こんなことでもなければ知り合うきっかけ
すらなかっただろう。

「なあ、おまえ新入生だろ」

「うん。何でわかんの？」

「制服ブッパ力だし、背もちっせーし。顔なんてまだまだお子様
じゃねーか。中学四年生って言った方がいいぜ」

「コーコイチネンセイ！」

気にしていることを言われて涙目になる亮介を、男はけらけらと楽
しそうに笑う。

「まーそのうち嫌でも伸びんだろ。あんま気にすんなよ」

遠慮のない力で頭をぐしゃぐしゃに撫でられる。態度も言葉も乱暴

だが、いい人のようにだ。

「おまえ、名前は？」

「犬飼亮介」

「犬飼？」

青年が驚いた顔で亮介を見る。

「なに？」

「俺の後輩にも同じ苗字のヤツがいた。親戚……、ってことはないよな。うん」

「大先輩の名前教えてよ」

「俺はダメ」

「えー。不公平」

「ダメなもんはダメなんだよ。御園学園に通ってる奴が俺の名前知ってる、ちよつと面倒なことになるかもしれない。てかおまえ敬語はどうした敬語は」

「ね、今日何でこんなとこにいの？」

「無視かよ……。まーいいけどな、俺も敬語苦手だし。――今

日はちよつとな、約束があつて来たんだ」

「待ち合わせ？」

青年は首を傾げ、「……どうかな」と言い淀む。

「待ち合わせ……、かな。一応約束はしてんだけど、向こうは覚えてねーかも……。ってか、絶対に覚えてねーな。約束したのはすげえ前だし、全然会ってねーし」

「電話とかメールとか」

「番号もアドレスも知らねー。わざわざ聞けるかよ、今更」

ふてくされる横顔に、亮介はそれを感じ取って目を輝かせる。

「恋だ！」

「うつせーよクソガキ！ そんなんじゃねえよ！」

「あだっ！」

今度は容赦ない拳骨を頭に喰らう。が、亮介はめげない。涙を滲ませながら青年に詰め寄る。

「告白すんの!？」

「う、打たれ強いなおまえ」

亮介が諦めないと知ったのか、青年は明後日の方向を見上げ、ぼそりと呟いた。

「……会ってどうするかなんて、考えてねーんだよ」

それはつまり、ただ会いたかっただけということだ。

「やっぱり恋だ」

「違いーっての。大体、賭けてもいいけどぜってー来ねーぞアイツ。来られても困るんだよ!」

「何で?」

「……。いや、だから……」

「何で困んの?」

視線の攻防の後、先に折れたのは青年のほうだった。

「……っ、何なんだよおまえ! だから、ケンカってわけじゃねー

けど! 前会った時、最後にあんまり気持ち良くねー別れ方しちまったから、……それで」

「それで?」

「……。どんな顔して会ったらいいかわかんねー……」

不機嫌な顔はポーズだ。髪で隠したつもりの目元がほんのりと朱い。

「あのさ、大先輩って実はけっこう可愛いタイプだよね? 俺の好きな人もそんな感じ」

素直な感想を言うと青年は首筋を掻きながら舌打ちをした。

「……たたく末恐ろしいぜ、おまえ」

「あのさあのさ、俺と昔どっかで会ったことない? 何か懐かしい感じがするんだけど」

「しかもナンパかよ……。今の高校生ってどうなってんだ一体」

そうこうしている内に、ようやくゴールまで行き着いたらしい。二人の行く手に古びた小さな門が現れた。いつの間にか霧もすっかり晴れて、綺麗な星空が広がっている。

慣れたもので、青年は頑丈そうな門の錠前を幾度か左右にガチガチ

と引つ張つてあつさり外してしまった。コツがあるようだ。

青年は門の中から、あつちだ、と亮介の帰り道を指さした。

「階段が見えるだろ。降りてまっすぐ行けば、大学の裏門に続く道の途中に出る。もしかしたら守衛がいるかもしれないねーから、そこんとこ上手くな。出たら左。道なりに行けば駅に着く。大回りになるから気合い入れて行けよ」

「ありがとう、……ごさいました」

「ん。氣イつけてな」

青年はひらひらと手を振ると、また鍵を掛け、迷路の中に戻つてゆく。景色の隅には半月を頂く白い塔が見えた。あれがきつと東の塔だ。更に奥には高校の時計塔が見える。

この人とはきつと、もう二度と会うことはないんだろう。そう思うとこのままさよならをしてしまうのが何となく惜しくて、亮介は後ろ姿に声を掛けた。

「賭けようよ！」

青年が立ち止まり、振り返る。

「賭けてもいいなら賭けようよ。大先輩の待ってる人が来るか来ないか。俺は来るほうに賭ける！」

「——じゃあ、俺は来ないほうだな」

乗ってくれた。亮介はにんまりと笑う。

「決まり。もしその人が来たら、大先輩はちゃんと仲直りする」

「もし来なかったら？」

「探す。電話もメアドも、きつと誰かが知ってるだろ？ 探して、仲直りする。これでどう？」

「……おまえ将来大物になるぜ、絶対」

青年は苦笑すると、「考えとく」とぶつきらばうに言い残し、亮介に背を向けた。

ありがとな、と最後に小さな声が聞こえたのは空耳ではないだろう。亮介は嬉しくなって、「うん！」と力強く返事をした。

携帯のバイブ音が鳴ったのはその時だった。

充電が切れたはずじゃなかったのか。ポケットから取り出すと、明るい画面が目眩しい。

表示された名前は『秋津久志』。電話だ。亮介は慌てて通話ボタンを押す。

「はいもしもし！ ごめん！ ほんつとごめん！ え、今？ えつとまだ学校で、その……」

亮介は言い訳をしながら何気なく門の中に目をやり、ぽかんと口を開けた。

薔薇が枯れている。

薔薇どころか生垣の葉までもが茶色く枯れきって、もはや何の植物だったのかさえわからない。辿ってきたはずの道には落ち葉が積もったまま、街灯に明かりはなく、何年も手を入れられていないに違いない。

当然、あの青年の姿はどこにもない。

放心状態の亮介の掌からずるりと携帯電話が滑り落ちる。もしかしてもしかしなくても。

「ユーレ、イ……っ」

ぎゃあああああー！

星空の下、再び亮介の情けない悲鳴が訝した。

第4章 - 02

「それで、俺にこいつをどうしろと？」

「引き取ってください。昼休みの間だけでいいんで」

翌日、二年C組の教室前は賑わっていた。知名度において右に並ぶ者のいない御蘭由姫に注目度赤マル急上昇中の犬飼亮介、新入生総代の秋津久志が一同に会していたからだ。

開いたドアを境目にして教室の中に御蘭由姫、廊下に秋津久志。そしてその背中に何故かべったりとくっつく犬飼亮介。

「こいつ昨日の夜遅く、学園の中で迷子になった挙げ句大学の守衛に保護されたんです。俺が迎えに行った時からずっとこの調子で」

「……それと俺と何の関係が？」

「特にありません。任せられる人間の心当たりが他に無かったのとばつちりですね、御蘭先輩」

「そこまで堂々と言われると正論に思えてくるから不思議だな……。何があった」

「幽霊見たとか何とかって言ってますけど。詳しくは本人に聞いて下さい。おい亮介、おまえの大好きな由姫先輩だぞ」

久志の背後、亮介の肩がぎくりと震える。

「……う」

「う？」

「きよ、今日は、いい……」

瞬間、ブチッと何かの袋の緒が切れる音がした。

「おいふざけんなよ亮介……」

条件反射で亮介の肩がぎくりと跳ねる。

この声のトーンはやばい。忘れもしない去年の夏休み、psycho logyのスペルを三回間違えた時と同じ低さだ。だってPとSとYで何でサイって読むのおかしいって！

「せっかくこの俺がここまで連れてきてやったのに何なんだそれは

……？ 昨日も待ち合わせの約束すつぽかすわ夜中に迎えに来させるわ、お前何最近調子に乗ってんだ？ ん？」

久志の額にブチブチと青筋が刻まれるのを、亮介は震えながら見上げるしかない。確かに調子に乗った。昨日も怖いから泊まって行ってくれとさんざんごねた。

「俺を振り回していいのはな、二十歳以上且つ俺好みの美人だけなんだよ！ わかったらさっさと離れる！ うつとおしい！」

「イヤッ！」

抵抗むなしく、亮介は久志の手によって背中からべりつと剥がされ、謹んで由姫の前に放り出された。

「う、あ、……あの、」

由姫のまっすぐな目に耐えられず、亮介は俯いて身を縮める。一昨日までの自分なら抱きついてるところだが、昨日の今日でこんな風に会うのは色々辛い。

「あ、あのさ、先輩……」

何を話したらいいのかもわからない。亮介が泣きそうになっていると、由姫は「わかった」と手短かに了承を告げた。

「昼休みの間だけでいいんだな？」

亮介は驚いて顔を上げる。

「……いいんですか？」

荷物を押しつけに来たはずの久志も同じ表情をしている。まったく期待していなかったのだろう。聞き返す久志に、由姫は「いい」と頷く。

「しつこい。引き受けると言ったんだ。犬飼、おまえ昼は？」

「ま、まだ」

「弁当か」

亮介は首をぶんぶん横に振る。今日は学食の日だ。

「俺もだ。じゃあ外で食べよう。購買に行くからおまえも来い」

「う、うん……！」

一緒にお昼。亮介は全開の笑顔になって、教室を出て行く由姫の後

を追う。

途中、一度だけ振り返って口の動きで親友にありがとうを言うと、何のことやらという顔をしてそっぽを向かれてしまった。親友は偉大だ。

でもやっぱりユーレイは怖いので、放課後も背中を貸してもらうことにしよう。亮介の薄っぺらい辞書には、『懲りる』という文字は今のところ、ない。

第4章 - 03

御園学園は広大で、至るところに庭園や温室がある。亮介が由姫に連れられて訪れたのは裏庭、本校舎から少し離れた位置にあるイギリス式庭園の中だ。跳ね橋から続く幾何学的なフランス式庭園とは違い、ありのままの自然が風景に凝縮されている。昼休みを満足にとるには少し遠いから、あまり人もいない。とても静かだ。

由姫は迷うことなく、小さな湖からほど近い木陰の白いベンチに腰掛けた。お気に入りの場所なのだろう。

「何やってるんだ、さっさと座れ」

いつまでも突っ立ったままの亮介に焦れたのか、由姫が自分の隣を掌で叩く。

「い、いいの？」

「立ったまま食べるつもりか？ 早くしろ」

亮介は恐る恐る、由姫の隣に腰を下ろした。緊張で食事どころじゃないというのが正直なところだが、由姫はカツサンドのビニールをびりびりと破いて食事を始めている。亮介は意を決して牛乳のパックを開け、勢いよく嚥下した。

「で？ 幽霊に会ったって？」

「そ、その話やめない？」

思い出すとぞつと背が冷える。

本当に怖かったのだ。あの青年には親切にしてもらったし一緒にいて楽しかったが、それとこれとは別の話だ。亮介の悲鳴を聞きつけた守衛によれば、数年前、迷子になった生徒が幽霊を見たと言ったのもこの場所だと言う。

昨今の幽霊はきちんとスニーカーを履いている。亮介は深く心に刻み込んだ。

「男のくせに幽霊が怖いのかおまえ。情けないな」

「おおお俺だってホラー映画とかは平気だよ！ こういう本当にあ

った系はマジで無理っただけで！ ゾンビとかは全然平気！」

「ゾンビは可愛いじゃないか。特に犬のやつ」

由姫はサンドウィッチにばくと噛みついた。……冗談を言っている顔には見えない。

「せ、先輩の新たな一面手……はっけ〜ん……。あの、犬ってここに深い意味ないよね？」

「？」

それからしばらくめいめいの食事を片付けることになった。

人の食事しているところをじろじろ見るなど以前由姫に怒られたので意識して見ないように努めたが、どうしたってちらちらと目がいつてしまう。食堂で向かいの席に押しかけることはあっても、よもや隣に座れと言われる日が来ようとは思ってもいなかったのだ。

由姫は一体何を考えて、いま亮介と一緒にいてくれるのだろう。

「先輩、髪の毛」

「ん？」

「葉っぱが……」

由姫の髪に小さな葉がついている。亮介は何気なく手を伸ばした。

「……っ！」

「あ」

髪の一筋に触れただけで、由姫はびくと震えて身を避けた。やってしまった。

「……ごめんね」

落ちた葉は螺旋を描き、由姫の手元に滑り落ちる。離れる指先から、木漏れ日にきらめく由姫の髪が零れた。

亮介は頂垂れた。本当に自分は学習能力がない。

「なんで、」

由姫は掠れた声で昨日と同じことを言った。

「何で、おまえが、謝るんだ」

けれど今度は途中で言葉を呑み込んだりしない。

「おまえは謝るようなことは何もしてない。謝るのは俺だ。……人

に触られるのは、昔からあまり得意じゃないんだ。過剰に反応したりして悪かった……」

「先輩……」

「あ、でも人前で抱きついたりするのはおまえが悪いんだから！それは殴るからな！」

頬を赤くして主張する由姫に亮介は目元を緩ませる。

由姫は自分が怯えることで、亮介が傷ついたと思った。だからちゃんと理由を話してくれた。

それがとても嬉しい。

「な、何で笑ってるんだ。殴るって言ってるのに」

「いいよ。殴られてもヘーキ」

「抱きつくなくて言ってるんだ！」

由姫はいつもの調子で怒っている。

今なら聞ける気がした。亮介は一呼吸置いて、ベンチに座り直す。

「先輩さ、今日はどうして俺といてくれるの？……探し物はいいいんだ？」

しばらくの間、返答はなかった。二人の目の前、青々とした芝に雲の影が流れ、木々が涼しい風に葉を揺らす。どこからか鳥の鳴き声が聞こえた。土の匂いにする。

隣の肩までの微妙な距離がもどかしい。

「——おまえ、何で俺のことが好きなんだ？」

思ってもみない言葉だった。亮介はそつと由姫の表情を窺う。けれど前を見つめたままの横顔はいつもと同じ、どこか怒ったような表情のままだ。

「……信じてくれたんだ？」

信じない、と由姫は言った。冗談はよせ、男同士でそんな感情はありえないと言った。

それがどうして。

「……。先に俺の質問に答えろ」

由姫はいつもよりほんの少し柔らかい目で亮介を見つめる。話して

くればきちんと聞く、そういう姿勢だ。

亮介は困ってしまう。

「どうしてって、わ、わかんないよ、そんなの」

思わず由姫から目を逸らした。鼓動が早い。好きな人を目の前に、どうして好きか説明しろなんて言われて冷静でいられるほうがおかしい。もしかしたらここは口説く場面なのだろうか。だとしても、愛する人に捧げる気の利いた甘い台詞なんて亮介は何ひとつ持っていない。

「わからないのに好きなのか？」

由姫は黒板に書かれた問題の回答を欲しがる生徒のようだ。

ああ、本当にわかっていないのかもしれない。亮介は茹だる頭で思う。

今まで寄せられたどんな好意も、由姫は本当の意味で理解していないのかもしれない。証拠に、由姫はこんなことを言う。

「おまえも最初は、どうせ俺の顔につられたんだろうと思った。そういう奴は実際多いんだ。でも一発殴ってやれば大抵は目が覚める勝手に思い込んでるんだ、俺が窓辺で詩集を読むのが趣味で、甘いお菓子が好きで、虫も殺さないって。あとトイレに行かないとか言う奴もいた。狂ってるだろ？」

「あはは……」

亮介は苦笑した。まあ、気持ちはわかる。由姫はそこら辺の女の子よりよほどきれいな外見をしているし、仕草はいちいち可愛い。幾重ものフィルターを通して、色々想像を膨らませてしまっただろう。

「俺はれっきとした男だ。それを手っ取り早くわからせてやればいい。俺はおまえにもそうしたつもりだ。でもおまえ、全然懲りないし」

「これから懲りる予定もないよ」

「……この調子だしな。だから、不思議に思った。おまえは一体、俺を何と勘違いしてるんだ？何の夢を見てるんだ」

亮介はふいに切なくなった。

これまで寄せられた好意の中には、それなりに思い詰めたものもあっただろう。そのどんな思いも、由姫は信じていることができない。自分自身で外見と内面が乖離していると思っっているからだ。外見だけで由姫は自分の判断が下されていると思っっている。亮介も同じだと言っている。

「俺、勘違いなんてしてないよ」

侮ってもらっては困る。亮介の声に熱が籠もる。

「だって俺、もう知ってるよ。先輩は甘いものがダメで、エビフライとクリームシチューが好きで、詩集なんて読まない。それにけっこう乱暴者だ。それは本当の先輩じゃないんだ？」

由姫は驚いた顔をした。

「だったら俺に教えてよ。先輩のこと、もっと知りたい。知れば知るほど、きつと俺、先輩のこと好きになる。俺が好きになったのは、今こうして俺の隣にいて、俺が悲しくなっただことに気づいてくれた先輩だよ」

最初は確かに一目惚れだったのかも知れない。けれど追いかけるうち、亮介はどんどん由姫のことが好きになっていった。昨日よりも今日、今日よりも明日。加速は止まらない。

「だから……！」

「——どうしろって言っただ、こんなの……」

押し殺したような由姫の声が亮介の言葉を遮る。眉を寄せた表情があまりに苦しそうで、亮介はふと疑問を覚えた。

由姫が確かめかったことは何だ。亮介がもし勘違いをしていたとして、由姫はそれをどうするつもりだったのか。不思議に思っただけなんて嘘だ。由姫の行動にはいつもきちんとした理由がある。

「先輩。もし、でいいよ。もし俺が先輩のこと本気で好きだったとして、——先輩はどうするの？」

「俺は、」

眼差しはまっすぐな決意を湛えていた。いつだって凜として美しいばかりの横顔は、いま亮介の目にひどく寂しく映る。

「俺は、おまえに——」

「見つけた。やっぱりここにいたのね、由姫君」
華やかな声が由姫の言葉を遮った。

第4章 - 04

さくさくと軽い足取りで芝を踏んで、一人の少女がやって来る。

「天竜寺先輩」

「七瀬でいいってば。もう、探したんだから。ケータイ持たないでどっか行っちゃうクセ、直したほうがいいと思うよ」

歩く度に長い巻き毛がふわふわと揺れる。きゅっと上がった唇、豪奢で長い睫、細い手足。女の子の「カワイイ」を凝縮した容貌を持つ彼女は、由姫の隣に座る亮介に気づくと少しだけ腰を屈めてにっこりと笑った。

「あなたが噂の犬飼君ね。こんにちは。わたし天竜寺七瀬。一応、この学校の生徒会長やってます。よろしくね」

「こんにちは……」

一種迫力のある美貌に覗き込まれてときどきしてしまう。と、亮介はその顔に見覚えがあることに気づいた。

由姫はこの人を何と呼んだか。

「双子？」

「え？」

「天竜寺先輩って、もしかして双子？ 俺昨日、先輩とそっくりな人に会ったんだ。天竜寺……、そうだ、天竜寺椿先輩」

七瀬は驚きに長い睫をぱちぱちと瞬かせた後、とても嬉しそうに笑った。

「ええ、そうよ！ 椿と私は双子なの。でも顔はともかく髪型も性格も全然違うから、初対面じゃほとんどの人が気づかないの。すごい、犬飼君」

「俺も最初、教えられるまでは気づかなかった。よくわかったな」「だって本当にそっくりだよ？」

笑った顔が瓜二つだ。間違える要素が見当たらない。亮介は首を傾げる。

七瀬は本当に嬉しかったのだろう、頬を上気させている。

「いいなあ、由姫君。こんな子に好かれちゃって。あ、もしかして私、邪魔しちゃった？」

「別に。俺に用事って何ですか？」

「理事長が呼んでるわ。間に合えば昼休み中に行ったほうがいいと思う。駄目なら放課後でもいいそうよ。どうせ来週の件でしょ」

「わかりました」

由姫は腰を上げた。

「先輩。俺、ゴミ捨てとく」

「ん。ああ、悪いな」

亮介を見る由姫の目に少しだけ迷いが交じる。振り切るようにして、由姫は背を向けて去っていった。

結局何を話していたんだっけ。亮介は遠ざかる後ろ姿に焦がれる。

どちらにせよ現状はあまり変わっていないようだ。由姫はまだ亮介の気持ちを信じてくれてはいないだろう。

うまくいかない。

ため息をつく亮介の隣に、すとな、と七瀬が腰を下ろした。

「ふふ」

「？」

「私ね、あなたのこと聞いた時から、ずっとお話がしたいと思ってたの。犬飼君……、亮介君って呼んでもいい？ 私も七瀬でいいから」

「は、はい……」

距離が近い。女の子の匂いがする。亮介はひどく狼狽した。中学の頃は性別のことなんて深く考えたこともなかったのに、高校生になった途端意識してしまって困る。御園の女子はレベルが高いともしっかりと自分でも十二分に心得ている。

だって。

「ふふふー。可愛いなあ亮介君。ねえ由姫君やめて私にしない？」

「せ、先輩肩押しつけるのやめてくれませんか……。あとほつた突つつくのも」

「顔真つ赤にしちゃってー。ねえ由姫君と私どっちが可愛い？」

「由姫先輩」

「ふふふ。一途だね、ほんと」

七瀬は亮介への攻撃をやめると、背もたれに寄りかかったのんびりと雲が流れる空を眺める。

「あのね亮介君。私たち、実は初めましてじゃないの。昔会ったことがあるのよ。覚えてる？」

「え？」

亮介は驚く。

「えっと……」

七瀬は回答待ちだ。にこにこ笑っている。

「えっと、先輩みたいな美人に会ったら、忘れるなんてないです？」

「よくできました」

「え、あの、本当に？」

「本当よ。小学生の時にね」

「どこで？」

「秘密。会ったのは一度きりだから、あなたが忘れているのは無理ないわ。でも私は忘れなかった。ねえ亮介君、私あなたのこと尊敬しているの。だから力になりたいのよ」

尊敬。あまりに馴染みのない言葉に亮介は困惑する。

「力に、って」

「由姫君のこととか、聞きたいこと色々あるんじゃない？ そうねー、例えば由姫君の弱点が耳とか？」

「ぐしゃっ。亮介の掌で食べかけのクリームパンが潰れる。」

「まあそれは冗談なんだけど」

「冗談なの！？ いや冗談で良いんだけど！ 何で先輩が知ってんのって話になるから！」

「あとは由姫君のウエストが、女子のMサイズの制服が緩いくらい

細いつてこととか……。あ、でもそれはいつも抱きついてる亮介君のほうがよく知ってるか。ね、どう？ 由姫君のカラダの感想は」

「な、七瀬先輩……っ」

「由姫君の鎖骨由姫君の腰骨由姫君の二の腕」

悩ましい呪文に亮介の煩惱が悲鳴を上げる。

「だああああああつ！ もういい加減にしてください！ このオヤジですかあんだ！」

「失礼ね、こんな美少女掴まえて。半袖の季節が待ち遠しいわねー、亮介君」

七瀬はくすくすと笑い、すっかり遊ばれてしまった亮介はベンチにぐったりと沈み込む。

とんでもない人だこの人。

久志といい四宮といい、そしてこの七瀬といい、どうして自分はいつもこうオモチャにされてしまうのだろう。どうも自分だけが原因ではない気がする。

七瀬はそんな亮介に満足そうに目を細めると、再び膝を揃えて前を向いた。

「あのね、亮介君。椿のことなんだけど」

「……？」

「昨日会ったって言ってたわよね。えっと、元気だった？」

「元気、って」

よそよそしい言い方に亮介は違和感を覚えた。と、七瀬が慌てる。

「あ、私と椿はね、クラスが離れてるの。椿は副会長をやってるんだけど、生徒会が無い日は学校の中で会うことってあんまりないんだ。それに椿ってば最近ぼけっとしてることが多くて、ちょっと心配で……」

そういうことか。亮介は七瀬に、椿に出会った顛末を話すことにした。廊下でぶつかりそうになったこと、考え事しながら歩いていたと言っていたこと。

姉の奈月の話は注意して避けた。気づかないならそのまま置いて欲

しい。

黙って聞いていた七瀬は肩を落とした。

「やっぱりね。普段の椿なら、人にぶつかりそうになるなんてこと無いもの」

「心辺りとかは？」

七瀬は首を横に振る。

「わかんない。双子って言ったって、別々の人間だしね。ただもうちょっと頼りにしてくれてもいいんじゃないかなって、……そう思っただけ」

「先輩、」

「あ、えっと、ごめんね変な話しちゃって。忘れて」

七瀬は快活な口調を取り繕い、ベンチから立ち上がった。

「亮介君、メイ・フェアの前夜祭のことはもう知ってる？ 新入生にも担任を通じて話が行ってると思うんだけど」

「うん。知ってる」

亮介は頷いた。

メイ・フェア

五月祭は御園学園の一大イベントだ。小学校から大学まで、地元の住民や卒業生を招いて盛大な催しがある。中高はクラス単位で出し物をするのではないが、園芸部など一部の部活が出展者として参加し、毎年かなり賑わうという。

そして一般には開放されないが、その前日、四月三十日未明から五月一日にかけ、学園のあらゆる場所で篝火を焚くのだ。この日だけは生徒が学園の中で夜を明かすことが許されており、これを前夜祭と言う。北欧では今も行われている行事だ。

「当日はともかく、前夜祭の夜はどんなに探しても由姫君はいないと思う。探さないでいてあげて」

「どうして？」

何故七瀬がそんなことを知っているのだろう。亮介の疑問に七瀬はただ微笑む。

「ほんと言つとね、あなたが近づかない方が由姫君のためなのよ。」

でもできないんでしょう？だから忠告をね」

「……七瀬先輩。それ、どういうこと？」

嫌な予感がする。こんな暖かい日だと言うのに、亮介は背が冷えるのを感じた。

「五月祭は古代ローマ、豊穡の女神に供物を捧げる祭りだったと言メイ・フェアわれてる。でもね、その前日は魔女たちがサバトを開く夜とされていたそうよ」

北欧神話においては主神オーディンがルーン文字を習得するために首を吊り、生者と死者を隔てる境界が消えるただ一度の夜――。

「ヴァルブルギスの夜。それが、前夜祭の本当の名前」

七瀬は輝かしい日差しを全身に受け、微笑みを浮かべている。

まるで彼女自身が女神であるかのように。

「その日、……由姫先輩がどうなるって？」

「少なくとも亮介君が力になれることはないと思う。言ったでしょ、近づかないほうが由姫君のためだって。私だってお父さんと椿ふたりに釘をさされちゃったんだから」

大丈夫。七瀬は自分に言い聞かせるように繰り返す。

「大丈夫よ。ただの記念行事みたいなものだし、危険なことは何も起こらないわよ」

「危険ってどういうことだよ！」

遠く、本校舎の鐘の音が聞こえてくる。

「予鈴よ。早く戻らないと午後の授業に間に合わなくなっちゃう」

「先輩！」

「誰にだって知られたくないことはあるでしょう？ 私にも、亮介君にも。これからも由姫君の傍にいたいのなら、ぎりぎりのラインを踏み越えないことね」

それじゃあまたね。

七瀬はスカートを翻し、来た時と同じように軽い足取りで森の中へ

姿を消した。

「ヴァルブルギスの夜……」

言葉は喉奥で不穏な響きを奏で、ふと亮介は玄関ホールの荘厳な天井画を思い出した。

——ユミルの天蓋。

四宮の言葉が脳裏を過ぎる。肉から大地を、血から海を。頭蓋骨からは天を。それはかつて神々が遍く自然と一体であった頃、原初の人間が思い描いた世界の姿。

——太陽と月を浮かべて馬車に寄せ、その馬車を狼が追いかける。

大鷲の羽ばたきは風となって天地を駆ける。

椿の頬に見えた虹色の鱗。何かを探し続けている由姫。七瀬の忠告。

『俺は、おまえに……』

あの時、由姫は亮介に何を言っつもりだったのか。

鐘楼から聞こえる十三回目の鐘の音は亮介の不安を反響させ、いつまでもいつまでも、耳の奥から消えなかった。

【予言 黒竜の魔女】

その晩、少女が夢に見たのは幼い頃を過ごした屋敷の風景だ。自分たちが産まれる前、色とりどりの花が咲き乱れていたという庭は褐色に荒れ、強い日差しに燃え尽くされるままになっている。

縁側に鮮やかな赤い着物を着た少女の後ろ姿が見える。大輪の菊が咲いた袖が風に翻っている。畳の上に散らばったビー玉、弦の切れた琴、転がった茶碗。少女の心に焼き付いている風景。

首に大蛇の尾が絡みついて、とても苦しい。畳の上、助けを求めて手を伸ばしても、やさしかった母はもうどこにもいない。

蛇が。蛇が私を殺してしまう。

混沌の中から浮かび出る、マグマのような何か。弾ける刹那、縁側の少女が振り返った。

あれは誰？

——ばた、と頬に何かが落ちる。

見上げると、蛇が喉咽から赤い液体を噴き出している。少女は白い掌で、どろりと頬を伝う雫を拭った。

血だ。

やがて蛇は藻掻き、たくさんの血を吐いて死んでしまった。畳に広がる赤い海の中、少女は自分の白い足袋が赤黒く汚れてしまったことをとても不愉快に思っている。

少女は何かを失った気がしてならなかった。けれど同時に、何かを手に入れた。

産声は歓びとなり、少女の世界を満たした。ほんの少しだけ残っていた悲しみは、気がつけばもう思い出せなくなっていた。

そんな少女を、縁側の少女が傍らで見つめていた。

首筋に鮮やかな赤い指の痕をつけた、私は私を悲しそうな目で見つめていた——。

『紀野由彰の帰国は確かなようですよ。成田空港の免税店でクレジットカードが使用された痕跡がありました。にしても買いい物がドイツ産の板チョコ一枚って、ひょっとしてお土産でも買いい忘れたんですかね？ 間抜けな人だなあ』

日差しが濃い影を落とす部屋、窓際に設えられたアンティークのデスクチェアに一人の男が座っている。壮年期を過ぎた相貌には無数の皺が刻まれ、髪には白いものが混じっている。だがそうして緩やかに年月を経た肉体とはかけ離れ、眼光は刀剣のように硬く、鋭い。それが男が今まで自らに律してきた厳しさの証明だった。

『あ痛っ！』

受話器の向こうから唐突な短い悲鳴と、何かが雪崩れる音がする。男は顔を顰めた。

『どうした』

『いや、ちよつと王様が僕の額に反乱をね……。どつから落ちてきたんだこれ。今ずつと見ない振りしてきた納戸を片付け中なんですけど、パズルの類があるわあるわ。こんなもの買ったかなあ。東雲先生、チェスはお好きですか？ 僕けっこう強いんですよ。どうです、今度一緒に』

『私はチェスはしない。話を続ける』

『残念。にしても、今年の前夜祭は派手になりそうじゃないですか。いやあ、楽しみだなあ。これは盛大にお持て成ししなくてはなりませんね、東雲老』

『……潜伏場所は分かっているのか』

一向に先に進まぬ話に、男は全ての戯言を無視することに決めた。すると電話口の向こうからあからさまなため息が聞こえてくる。

『皮肉ったんだから何か返してくださいよ、相変わらず堅物だなあ。頭ガツチガチだと、見えているものも見えなくなっちゃいますよ。見るのは目でも、理解するのは脳なんですから』

『いい加減にしないか。回りくどい話はいいい』

『はいはい。居所はまだ特定できていませんが、まあ、確実に近い場所にいるでしょうね。御蘭学園の結界網には今のところひっかかっていないようですよ』

「確かだろうな。学園の結界は紀野家の領分だ」

『あまりナメてもらっては困ります。僕はこれでも一応、東雲機関の主任研究員ですよ？』

「その主任研究員が三年前、貴重な観測士を取り逃がしたんだろう。自分の立場を弁えろ」

『うーん、それを言われると痛いなあー。大丈夫です、ハッキングで裏も取れてます』

「……そうか」

男は壁に並ぶ額縁を見上げた。一番端にセピア色の古びたポर्टレートがある。

御蘭学園創始者、御蘭彰の肖像だ。若くして夭逝した天才は一体何を思い、第一次世界大戦さなかのヨーロッパへと渡ったのか。穏やかな微笑みからは何も伺い知ることはいできない。

『しかし、創始者神話は根強いですね。紀野由彰の父親も随分心酔していたようじゃないですか。息子にあんな名前をつけるくらいね」「死んだ男の話はするな」

『ああ、ご学友でしたっけ？ 美しい思い出に触れてしまったようでしたら申し訳ない。他意はなかったんです』

男の表情が初めて歪む。

「追跡を怠るな。発見次第殺してしまっても構わん。ただし死体は必ず私が確認する」

『了解しました。それではよい一日を。理事長閣下』

優雅な挨拶を最後に電話は切れた。

男は受話器を戻すとデスクに両肘を立て、眉間を硬い指先で強く揉む。

「やはり生きていたか……」

デスクの傍らに視線を投げる。写真立ての中、制服姿の少女は卒業

証書を手に今日も健やかに笑っている。彼女が夢見たであろう未来は輝かしいまま、これからも永遠に損なわれることはない。

「聞いていたな。紀野由彰が帰ってきた」

「はい」

ソファセットの片隅で深い藍色の着物を着た少女が返事をした。

「御園由姫の様子は」

「変わりなく。第九病棟への道を未だ探しているようです」

「それは本人からも聞いている。止めはしなかったが、ただの噂に振り回されおって。幼いな」

返ってくる言葉はない。東雲詮房は沈黙に焦れ、「こちらへ来い」と命令する。少女は素直に立ち上がり、詮房の前にやって来た。

天竜寺椿。いつ見ても双子の七瀬とは似ても似つかぬ、冷え冷えとした美しさだ。

「理事長。紀野由彰氏の件は、私から御園由姫に話をしたほうがいいでしょうか」

椿からの提案は珍しいことだった。一考の末、詮房は判断を下す。

「いや、その必要はない。鍵は巫女自身。由彰が狙うのならばまず巫女だ。精々餌になってもらうこととしよう」

「はい」

「学園内には未だ紀野家の復権を望む連中が山ほどいる。事を起こす前に悟られては水の泡だ。ヴァルブルギスの夜までは、今までと同じように巫女に協力し、護衛を続ける。いいな」

「はい」

「——もう一度聞くが、本当にいいんだな。もし無事で済んでも、おまえは新たな封印の礎となる。二度と七瀬と会うことはできんぞ」
「構いません」

声に逡巡はない。詮房はそうと知られぬよう安堵の息をついた。拒否をされても他にとれる手立てはなかった。

「私だって、何も好き好んで若い命を犠牲にしたくはない。穏便な手段をとれるよう、ぎりぎりまで粘るつもりだ。そうだ、第九病棟

への道も探させよう。ひょっとしたら、魔女が願いを叶えてくれるなんてこともあるかもしれないからな」

白々しい冗談だとわかっていたが、口にせずにはいらなかった。椿はと言えば、どう反応を返したらいいのか判断がつかないらしく、黙ったままだ。それで良かった。

「紀野と東雲、どちらかが明確な勝利を収めない限り、争いは続く。私はあんなことはもうたくさんだ」

老人は写真立てに手を伸ばし、皺だらけの手で愛おしそうにガラスを撫でた。

「七瀬は私の娘によく似ている。死んでしまった、由彰に殺されてしまった私の娘にな……。もしお前に何かあっても、七瀬は必ず私を守る」と誓おう」

「お心遣い、ありがとうございます。……それでは、失礼します」椿は深く一礼し、扉を開け去ってゆく。

詮房は深く椅子に沈み込んだ。椿と会った後はひどい披露が残る。緊張しているのだろう。

少女の胸の内ではどんな決意があったのかはわからない。だが守りたいものが同じである以上、詮房と椿は共犯と言って良かった。

その事實は詮房を安心させた。十年前、七瀬のみを引き取り、椿を過酷な状況へ追いやったことを心のどこかで悔いていたのかもしれない。深く息を吸えば、清涼な空気は肺に染みいるようだった。背負っていた枷のひとつが解けた気がした。

血のない革命に真の革命はない。そして最後に流される血は穢れなものではなくてはならない。神に捧げる供物のように。

そうしてまたひとつ枷を背負おう。詮房は立ち上がり、御園彰のポートレートと向かい合った。過去は二人。今は一人で。とうの昔に死んだ筈の男が隣に立っている気がしたが、そこには壁紙に焼きついた己の影しかない。

詮房は埃の積もった額を外し、しばらく眺めた後、それを本棚の一番奥に納めた。

死者は何も語らない。

——少女が毎夜夢に見るのは、幼い頃を過ごした屋敷の風景だ。自分たちが産まれる前、色とりどりの花が咲き乱れていたという庭は褐色に荒れ、強い日差しに燃え尽くされるままになっている。

けれど少女は知っていた。庭の隅にはもう使われていない井戸があつて、その周りには毎年見事な彼岸花が咲くことを。井戸にはずつと昔、悪さをした大蛇の亡骸が詰まっているのだ。その血肉を吸つた彼岸花の根には途方もない毒があつて、どんな大男でも、化け物でも、たちどころに死んでしまう。

縁側に座る少女は部屋の中を振り返つた。

真つ赤な血の海の中、大蛇が藻掻き苦しんでいる。悪さをした蛇だ。私が退治してやった。

やがて蛇は腹の中身をまき散らし、長い舌をだらしなく伸ばしたまま死んでしまった。脱皮し損なつたようでもとても惨めだ。

その隣で蹲る少女のやせ細つた手足、薄い肩。赤黒く濡れた足袋。首筋を彩る鮮やかな指の痕。

あれは誰？

少女が少女を見上げている。鏡に映したようなその姿。

悲しみが少女の胸を強く打った。耐え難い喪失が少女の全身を襲つた。

かつて私であつた私。でもそれはもう私じゃない。

裏切られた。どこかへ行つてしまった。果てしなく遠い、私の手の届かない場所へ——！

「っ！」

下駄で走っていた少女は着物の裾を引っかけ、勢いのまま赤い絨毯の上に倒れ伏した。

「——大丈夫かい、お嬢さん」

少女はのろのろと顔を上げる。

黒いコートを着た見知らぬ男が少女の傍らに跪き、手を差し出していた。

「下駄で走ったりするからだ。さあ、立って」

歳の頃はわからない。若いようにも見えるし、老いているようにも見える。少なくとも今まで会ったことはない。

「……誰だ」

半身を起こし、後ずさりする。これは得体の知れない男だ。怖い男だ。

男はそんな少女の不安を可愛がるように微笑んだ。

「魔法使いさ。君の願いを叶えるために来たんだ」

「私に、……願いなどない」

少女の唇が震える。

「それは嘘だ。君には願いがあるだろう？　ずっと昔から、心の中に秘めた願いが」

男の右目に蒼い炎が灯る。それはあの日、縁側から見上げた空の青。視界の縁を焦がす狂った血の赤。緑は褪色に萌え、断末魔は産声となって少女の世界を二つに引き裂いた。

「さあ行こう。君はもう、彼女の半身でいる必要はないんだ」

少女の瞳から止め処なく涙が溢れた。ひっそりと孕み続けた欲望が今、闇を纏って胎生する。

傷口から覗くのは柔らかい翼の骨だ。

硬い殻を砕く男の手は乱暴で、酷く冷たかった。

第5章 - 01

土日明けて翌週の月曜。亮介は一限目が始まる前、三年フロアの踊り場で由姫とすれ違った。

「由姫先輩！」

「犬飼。何でこんなところにいるんだ」

「日直。職員室にプリント取りに行くところ」

職員室は新校舎二階の北にある。よって一、二年のクラスが入っている本校舎からは、一旦外に出て裏庭を通って行かねばならない。ただでさえ遠い。しかも月曜。加えて今日のように雨だと面倒な事この上ないのだが、朝から幸先がいい。憂鬱だった亮介のテンションが一気に上がる。

「おまえ、傘を差して来なかったのか？」

亮介の濡れた肩を見て由姫が眉を顰める。

「大丈夫だよ、そんなに降ってないし。風邪なんて引いたりしないって」

「誰がおまえの心配をした。周りに迷惑だと言っててるんだ。プリントが濡れるだろ」

由姫はふいっと顔を逸らした。亮介は脂下がるしかない。先輩カワイイ。

「先輩はどうしてこんなところに？」

「ちよつとな、天竜寺……、椿先輩の方に用事があつて来たんだが、今日は休みらしい」

「そっか……。七瀬先輩は？」

「七瀬先輩？ おまえが一体何の用なんだ」

由姫が訝しげな顔をする。

しまった。亮介は急いで適当な言い訳を作る。

「えっと、か、家族で風邪でも引いちゃったかなーって。最近流行ってるし」

「いや、あの二人は――」

「？」

「……何でもない。一応聞いてみたが、七瀬先輩も休みらしい。そうだな、風邪かもしれないな」

よくわからないが、上手く誤魔化せたらしい。

本当は七瀬に金曜日の話を詳しく聞きたかったのだ。あれは由姫のことについて何か知っている口ぶりだった。危険だなんて言葉を使うくらいだから、普通のことではない。

亮介はごくりと唾を飲み込んだ。

「あのさ、由姫先輩。木曜日の前夜祭って何してる？」

前夜祭、生徒は学園の中で自由に過ごすことが許されている。よつて、亮介が由姫を誘うのは当然の脈絡だ。実際、ホームルームで聞いた時はそうするつもりだった。

カマを掛けるように気分は悪いが、由姫の無事には代えられない。

亮介はおとなしく反応を待つことにする。

と、答えはすぐに返ってきた。

「俺を誘うつもりかもしれないが、その日はダメだ。用事がある」

やっぱり。亮介はさらに一歩踏み込んでみる。

「先約？」

違う。由姫はするすると回答を口にした。

「俺の苗字を知ってるだろ。御園の人間にとって、前夜祭は特別なんだ。創始者の御園彰理事長の命日だからな。毎年身体を清めて聖堂を墓参りだ」

「そ、うなの？」

あれ？

気合いが思いっきり空振りして、亮介は首を傾げる。

「御園の取り決めで、直系の誰かが花を供えることになってる。大変なんだぞ、前日の夜から食事はダメで、水かお茶しか飲めないんだからな。そういうわけで、あらかじめ言っておくが、探しても俺はいない。すまないな」

嘘をついている様子はない。亮介はわけがわからなくなる。

七瀬にからかわれた。最初に思いついたのはそれだった。

『大丈夫、ただの記念行事だって言ってたし、危険なことは何もないわよ』

……墓参りが？

「あの、途中危ないこととか、……ある？」

「橋の工事ならもう終わったぞ。来月にでも掲示板に張り出されるんじゃないか。有名な場所だし」

そう、御園学園における屈指のデートスポットだ。

聖堂は学園の中心部、堀池に囲まれた島の中にある。建物自体は一般生徒の立入禁止区域となっているが、周辺の森の散策は自由だ。現在は老朽化した橋の工事で閉鎖されているが、復活を待ちわびている生徒も多い。

そう、誰でも知ってる、——有名な。

「……悪いな。あの、そこまでがっかりされるとは俺も思わなかったぞ……？」

「いや、今自分の頭の悪さが改めて嫌になったとこ……」

蹲る亮介の頭の中、白旗を持ったヒヨコがピヨピヨと鳴いている。オーバーワークだ。

からかわれたのでなければ牽制。しかし七瀬が自分を牽制しなくてはいけない理由が分からない。由姫が好きとか？ いや、そんな感じはしなかった。

では何故——。

悩む亮介の頭にぼん、と手が乗せられた。びっくりして顔を上げると、亮介の前に腰を屈めた由姫がつかれて驚いている。

「あ、……あのな、前夜祭はともかく、当日は俺も学校の中にいるから」

雨で濡れた髪をぎこちない仕草で撫でてくれる、その指先はとてもやさしい。

「絶対戻ってくるから。だから、その」

「先輩大好き！」

第5章 - 02

「職員室までの道に爆弾でも転がってたか、亮介」

「えへへ。先輩が頭撫でてくれた。あと明日はお昼一緒に食べてくれるって！」

「ボコボコにされたの間違いだろ。頭大丈夫かお前」

どうせまた辺り構わず抱きついたんだろ。

一時間目の休み時間、保健室からぼろぼろの風体で戻って来た亮介に前の席に座る久志が呆れる。そう、どうせ抱きついてしまったのだ。今日はなかなか離れられなくて、ゾンビの如くひつついて昼の時間をお強請りしたら恐怖を感じたらしい由姫が了承してくれた。ともあれ、心配事の無くなった亮介は木曜日の予定について久志と相談してみることにする。

「久志、前夜祭の日って約束ある？ 無かったらさ、今度こそ学園の中探検したい！ 確か大学の方も行っていいんだよな？ 俺はまだ知らないといっぱいあるし、案内してよ」

「もう俺よりお前のほうがよく知ってると思うけどな……。俺は別に構わないが、御園先輩はいいのか？」

「うん。何か用事あるみたい。ダメだって」

「そうか……」

久志は何か考え事をする素振りを見せた後、一度立ち上がって椅子を逆向きに直した。

再び腰を下ろして、「なあ亮介」と改めて話を始める。

「おまえ、天竜寺の片割れと会ったって言ってたよな。椿の方と」椿に会ったことは、ユーレイに会った件の流れで既に久志に伝えていた。

「と、七瀬先輩も。昨日会ったよ」

「そうか。はつきり言うぞ亮介。俺は正直言えば、おまえにはあの双子に関わってほしくない」

鞆から紙パックのレモンティーを取り出す亮介の手が止まる。

「……何で？」

純粹に驚いた。久志がそんなことを言うのは珍しい。というか、成績はともかく人付き合いに口を出されるのは初めてだ。

「おまえ俺ん家の本業知ってるだろ」

「うん。神社」

秋津家は代々、神奈川県にある大きな神社の神職をつとめる家系だ。現在は久志の祖父が神主をしている。父親は弁護士の道を選んだために勘当されたのだそうで、久志自身は今都内で両親と一緒に暮らしている。祖父の家へはよく泊まりに行っているようだから、父と祖父の親子仲はともかく祖父と孫の仲は良好なのだろう。

「うちと天竜寺は遠い親戚みたいなもなんだ」

「えっ」

寝耳に水だ。

「つても、血の繋がりがどうこうって話じゃないけどな。俺は小さい頃あいつらに会ってる。今でこそあんまり似てないけど、昔はそっくりでさ。どこ行くにもべったりくっついてた。鏡のこっちとあつちみたいだなって言ったら、何がおかしいのか二人で楽しそうに笑ってたよ」

「そうなんだ……」

「そうなんだ。で、こっからが本題なんだが、椿と七瀬の両親はもう亡くなってる。父親のほうは事故だったらしい。問題は母親の方だ」

久志はとびきり嫌な顔をした。

「おかしいんだ。死に方が」

「……それ、怖い話？」

「とびきりな。一緒に寝てやるからちゃんと聞けよ。——拭れてたらしいんだ」

「拭れたって」

「こっ、雑巾を絞るようにさ。皮一枚残して、全身の筋肉と骨格が

擦れて死んだ」

ぎゅっ。久志が両手でジェスチャーをする。

「死因は内臓破裂と多臓器不全。力が加わったのは、外側からではなく内側からだそうだ。ちょうど蛇が脱皮し損ねたみたいな格好で死んでいたらしい。死体の胃からは少量のアルカロイドが検出されているが、致死量じゃなかった。アルカロイドってのは、まあ簡単に言えば毒の一種だな。何でそんなものが胃に残っていたのか、何のために誰に飲まされたのかはわからない。で、母親が死んだ時、同じ部屋に居合わせたのが――」

娘である天竜寺椿と天竜寺七瀬。

第5章・03

「……違うんだろ？」

「常識から言えばな」

遠回りな問いに、更に遠回りな答えが返ってくる。

「筋肉、骨格を皮一枚残して内側から変形させる力なんてありえない。少なくとも人間には」

それでは人間以外には？

亮介が目だけで問うと、久志は「長くなるぞ」と前置きし、躊躇いがちに話を始めた。

「天竜寺はな、亮介。龍を祀る家だったんだ」

龍神信仰は雨乞いと関連が深い。農耕を生きる手段としてきた日本人は田畑に恵みをもたらす神々を信仰し、今でも全国に龍を祀る神社がある。

「あれ、でも天竜寺って、寺じゃないの？　なのに神社の久志と親戚？」

「亮介。仏教の伝来は何年だ？」

「……。」

「おい中学生の問題だぞ。『ご参拝』で五百三十八年だろうが。日本に渡ってきた仏教は日本の土着の信仰と混じり、神仏習合が起った。うちと天竜寺の縁もその頃だろうって言われてる」

「……遠すぎて何がなんだか……」

「もうちよつとついて来い。天竜寺は、『天竜寺』となつて龍を祀る以前は蛇を祀っていた。これはもう縄文や弥生時代の話だ。蛇は水神だから、中国から渡ってきた龍と一緒にされたんだろうな」

「つまり？」

「形が似てたんだろ。龍と蛇」

「そんな単純な」

「そついうもんなんだ。そもそも仏教が日本に馴染んだのは、救済

のシステムが当時の日本の時流に上手くマツチしたからだ。当然、思想を持ち込んだ人間と流行らせようとした組織がいる。自然現象じゃないんだからな」

「はああ……」

「時間を千年早送りする。そういうわけで名を改めた天竜寺だが、大規模な干ばつで文字通り一旦干されてる」

「干す？」

「雨乞いで雨を呼べなかったんだ。村の人間が大勢火事や飢饉で死んだ。こうなると、それは全て天竜寺の責任つてことになる。供物を捧げてもだめ、家畜を捧げてもだめ。怒った村人たちが最終的にどうしたか」

——龍を神の座から引きずり降ろした。

「森や山から龍の眷属である蛇を徹底的に駆逐し、井戸に捨てた。ちようど廃仏毀釈のあたりだったから、村人も遠慮しなかったはずだ。天竜寺の人間ももちろん被害に遭った。どんな被害かは大体予想がつくだろう」

「……うん」

亮介は紙パックを両手で握る。水滴が伝い、掌から手首へと流れる。

「雨は降った」

天から恵みが降り注いだ。村人たちは涙して喜んだ。

「降り止まなかった」

いつまでもいつまでもいつまでも。

乾いた甕がいつぱいに満たされても、埋めた死体が流されても、水田が沈んでも。

雨は降り続けた。

「村は滅んだ。蛇の怒りを買ったんだ。怒りは呪いとなって、天竜寺の生き残りに降り注いだ」

「何で！ てか、呪いって」

「そついうもんなんだ、としか言えない。以来、天竜寺の家には女しか産まれない。それも大概が未熟児で、無事に成人できる可能性

は低いそうだ。ここまで来ると、呪いが本当にあるかもって思っちゃうだろ？」

「……そんな」

「祀って、崇られる。天竜寺はそういう家なんだ。今はもう寺もないが、呪いは生きてる。実際、七瀬はああ見えてあまり身体が丈夫じゃない。椿のほうは今に至るまで何の問題もないらしいがな」

母親の死後、一旦施設に預けられた双子は別々の家に引き取られる。「七瀬は東雲家へ。椿は係累の家へ。七瀬は特に生きていた頃の母親にも可愛がられてたらくて、今の家でもうまくいつてる。椿のほうは正直よくわからないんだ。高校に入ってから一人暮らしをしてるっていうこと以外はな」

亮介は廊下で会った椿のひっそりとした佇まいを思い出す。華やかな七瀬とは違い、彼女の美しさにはどこか影があった。しかし、亮介にはその影が空虚なものであるとは到底思えなかった。椿の微笑みには七瀬と同じ、充実した力があつたのだ。ちょうどスクリーンの女優が観客を魅了するように。

「結局、母親がどうしたあんな成りで死んだのかはわからないままだ。そういうわけで、曰く付きなんだよ。天竜寺の双子はな」

久志は手持ち無沙汰になったのか、亮介のジュースの封を開け、ストローを差す。

「亮介。俺はおまえに、今までこういう類の話をしたことはなかった。関わって欲しくなかったからだ。でもお前が何も知らないまま危ない目に遭うのは御免だ。俺の言ってること、わかるよな」

「……うん」

亮介が頷くと、神妙だった久志の表情が柔らくなる。

「強制したりはしない。ただ、気をつける。いつも俺が都合良く助けてやれるとは限らないんだからな」

「うん。わかってる」

「次の数学の小テストもな」

「えっ……、ちょ、ええええええええええ！？」

亮介は辺りを見回す。道理で教科書片手に集まってる連中が多いはずだ。

「俺知らないんだけど!？」

「そりゃそうだ、数学の茅野が来たのはおまえが職員室に行った後だったし、頼まれたけど俺言ってるないし」

「ひどい! 久志のドS! キク……、キチク! よりによって数学!」

「普段から勉強してれば慌てる必要ないだろ。ちゃんと『鬼畜』って言えるようになったら気合い入れて苛めてやるよ」

「うわああああん!」

非情にも休み時間終了を告げるチャイムは鳴り、亮介はそれからの十五分、沈痛な面持ちで小テストを受けることになった。

答えられる質問はひとつしかなかったので、後は諦めて潔く机に突っ伏す。久志の後ろの席で本当に良かったと思う。こんなところを見られたら正座コースだ。

『正直言えば、おまえにはあの双子に関わってほしくない』

前髪の間から前の席を覗く。久志は相変わらずぴんと背を伸ばして、静かにテストを受けている。

過保護にされていると思う。

自分自身で肯定してしまえるくらい、亮介はぬくぬくと育ってきた自覚がある。父も母も甘やかしてくれるし、……姉のことはちよつと余所に置いておくとして、親友もこの通りだ。

大事にされるのは気持ちがいい。だから与えられるよりもっとその人のことを大事にしたいと思う。好意の助言に耳を貸さないなんて不誠実だ。信じて身を任せることが正しいのだと、ずっとそう思っていた。

そうなのかな。

亮介の胸に初めて疑問が生まれる。

本当にそうなのかな。

――何が？

微睡みに溶けてゆく頭は上手く考えてくれない。

『大きくなったらまたおいで』

瞬きをすると、古ぼけた門の前に亮介は立っていた。先に続いているのはいかにも危険そうな暗い獣道だ。見上げる丘の上には白いお城が建っている。

見たことがある。絵本のページだ。ぼろぼろになるまでページを捲ったあの絵本。探したけれど結局見つからなかった。さあどうする。誰かが亮介に問う。

鍵はおまえの手の中にある。さあ、どうする？

第6章 - 01

明日も雨だったら植物園で。亮介は約束したとおり、四時間目が終わるとすぐさま弁当と傘を両手に裏庭を駆け、ドーム型の屋内植物園を訪れた。由姫は食堂は嫌なのだそうだ。おまえと一緒にいるところをなるべく見られたくないとおまじめな顔で言われた。二人きりになれるなら、亮介としても願ったりだ。

扉を開けると濃い緑の匂いが全身をさらった。温度と湿度は調整されているようだが、上着を着ていると暑いくらいだ。とりあえず傘立てを探し、ビニール傘を突っ込む。するとそこには既に二本の傘がささっていた。男物と女物が一本ずつ。

待ち合わせ場所は噴水前。亮介は珍しい植物を見回しながら、茶色のタイルが敷かれた通路を進む。花の名など亮介にはわからないが、色とりどりに咲く花はとてもきれいだ。

噴水は四本の柱に囲まれた中央にあった。

由姫は既に来ていた。噴水の縁に腰掛け、誰かと話している。亮介は足を止め、植え込みの中にある手近な木の陰に身を潜めた。別に隠れる必要はないのだが、何というか……、場の流れだ。

そうして葉の隙間から噴水を覗いていると、由姫と話している女子生徒に見覚えがあることに気がついた。あれはそう、体育の授業だ。隣のテニスコートにもものすごい美人がいるとランニングの時に噂になっていた。話題を振られた亮介もフェンス越しに横顔を見ているが、背丈といい黒く艶やかな長い髪といい、間違いない。

しかしさすがにここからでは話の内容まではわからない。彼女が由姫に何事かを告げると、由姫は俯いて悩む仕草をし、顔を上げて彼女に向かって返事をする。彼女はにっこりと微笑み、そしてまた何かを由姫に告げると、その場を後にした。

つまり、出口のあるこちらの方に歩いてくるということだ。まずい。

亮介は息を殺し、見つからないことを祈った。幸いこの場所は植え込みのおかげで死角になっているし、このままおとなしくしていれば大丈夫だろう。

だが予想は裏切られた。歩道を歩いて来た彼女は植え込みを越え、一直線に亮介がいる芝の中までやってきたのだ。足取りにあまりに迷いがないので、亮介は慌てることすら忘れた。

「……えっと……？」

「……。」

彼女は大きな瞳で亮介を見つめている。

こそこそ隠れていたと思われるのは心外だ。弁解しようとした亮介はふと疑問に思った。紺のハイソックスに包まれた彼女の右足がふつと消えたのだ。

刹那、静電気が一気に亮介の肌を駆け抜けた。

——攻撃される。

唐突に悟った。由姫に殴られる時とは訳が違う。間近に迫った彼女の瞳には、亮介を傷つけようとする確固たる意思があった。それは良く研がれたナイフの切っ先のように鋭く、ためらいなく領域に侵入してくる。

受け止めたい。

亮介は単純に足を踏み出した。敵を理解したかった。瞳に宿る闘争の正体を、もっと知りたくなったのだ。それは見惚れてしまうくらい純粋な熱を帯びていた。

だから、踏んだ地面に大きな石が埋まっていることには気づかなかった。

「あ」

よろけた亮介の隣を突風が吹き抜ける。ずん、と腹の底に響く地響き。

「……。」

亮介はまばたきをした。恐る恐る自分の背後を見ると、それまで亮介の身体があつた木の幹に、ローファアのつま先が苛烈な勢いで叩

き込まれていた。

さーっと血の気が引いた。

ローキックだ。

乾いた幹の表面は冗談みたいな形に抉れ、伝わった衝撃に枝からいくつもの葉が地面に落ちていく。とつさに避けていなければ脛を骨折していたかもしてない。予想し得た未来に、亮介の心臓がバクバクとうるさい音を立てた。

「な、……なにか、俺、なに、」

俺が何かしましたか。そう言いたかったのだが、思考がうまくまとまらない。

彼女はと言えば、幹から丁重につま先を抜き去ると乱れた髪を耳に掛け、すれ違い様に亮介の耳元でこう囁いた。

「立入禁止よ、番犬くん」

そうしてあつという間に亮介の前から去って行った。

「……何だったんだ、今の……」

亮介は地面とほぼ平行に裂け目が入った幹を見つめ、改めてぞっとした。彼女が履いていたのはただのローファーではあるまい。

つま先に（たぶん）鉄板を仕込んだ女子高生。それって一体。

亮介は背筋を寒くしつつ、ひとまず由姫の元へ向かうことにする。

「先輩！」

気づいた由姫は小さく頷いてくれた。このまま弁当を放り出して抱きつきたい気持ちで一杯だったが、何とか我慢する。せつかく二人きりなのだ。気絶したまま昼休みを終えるなんて勿体なさ過ぎる。

「早かったな」

「先輩こそ」

「移動教室だった。特教の購買に寄って、そのまま来たんだ」

由姫の隣にはビニール袋の他に美術の教科書とスケッチブック、ペンケースが置かれている。美術室のある特別教科棟は温室の隣にあ

る。道理で早いはずだ。

「先輩、今の誰？」

「ああ、すれ違ったのか。金森先輩だ。金森彩香。中学からのエスカレーター組で、三年生。一年の頃からずっと園芸部の部長をしている」

「園芸部って、花とか育てるアレ？」

「花とか育てるアレの園芸部だな。学園の庭木は全て園芸部が管理してるんだ」

「全てって……、もしかして学園の全部？」

それってちよつと、かなり凄いのではないだろうか。御園学園は高校だけでも庭園が三つ、植物園は二つ。プロムナードに屋上庭園、ルーフトラス。花壇を数えたらキリがない。

「もちろん全部だ。特に園芸部は中学から大学まであって、それぞれに連携し合ってる。ちよつどいいから教えておくが、木や芝生のそばに何かしらの札を見つけたら最大限注意しろよ。後が怖いからな」

園芸という言葉の印象と、恐怖の共通点が見当たらない。亮介は首を傾げる。

「怖いって、具体的にどんな？ 花萼つたら正座とか、肥料やりでも手伝わされるとか？」

「あるいは犯人が肩まで土の中に埋められて、萎れた花の気持ちになつてみるとかな」

「……。気をつけます」

まあそれはちよつと極端な例だが、と由姫がつけ加える。

「園芸部は武闘派揃いで有名なんだ。金森も小さい頃から父親に色々な武道を仕込まれてる。あまり目をつけられないようにしろよ」

「……。」

「？ どうした」

「いや、……俺さっき、あの人にすつごい弁慶の泣きどころを狙われたんだけど……」

聞いた由姫は悲しげに目を伏せた。

「かわいそうだが、……今生はもう諦めるとしか……」

「何！？ 俺そんなにヤバいの！？ 来世にしないと許してもらえないの！？」

「おまえ、養生中の芝生の中にでも入ったんじゃないか？ 何か札があつたんじゃないか。踏み込み禁止とか、実験禁止とか、ペット禁止とか」

「……そういえば……」

札の存在には気づかなかつたが、彼女は去り際に確かに『立入禁止』と言っていた。

「……入ったんだな」

亮介の態度から悟つた由姫がため息をつく。

「まあ、怪我が無くてなにより……、犬飼？」

亮介は屈み込み、噴水のタイルの上に突つ伏した。

「わかつた。あの人、うちの姉貴に似てるんだ」

「おまえ姉さんがいるのか」

「いる。多分、史上サイキョーだと思う」

見た目の話ではない。金森彩香の持つている雰囲気そのものが、どこか姉に似ているのだ。道理でこんな暖かい温室なのに背筋が冷えるはずだ。

「あれ？ でも先輩、部活やってないよね。どうして園芸部の部長と——」

「あ」

由姫の手が空中でぴたりと止まった。これは。

「せんぱい……」

「……う、」

引つ込みのつかない手をそのままに、由姫の頬が見る見るうちに赤くなってゆく。

これは。

ひよっとしてひよっとしなくても、また頭を撫でてくれようと。

「先輩カワイイ！」

抱きついた由姫からは相変わらずいい匂いがした。今日はゼロコンマ何秒で鉄拳をお見舞いされるだろう。亮介は覚悟しながら感覚の全てで由姫の温もりを堪能する。

が、いつまで経っても拳が飛んでこない。

「先輩？」

どこか具合でも悪いのだろうか。そつと身体を離す亮介の上着を、由姫の掌が掴んだ。

「犬飼——」

由姫はドームの天井を見上げていた。ただでさえ大きな目が見開かれている。それは危機を見る目だった。

「逃げる」

え？

亮介の真上で、ガシャン！ と大きな音がした。とっさに見上げると、ドームの天井に大きな穴が開いている。きらきらと輝いているのは砕けたガラスだ。二人を目がけ、速度を増して落ちてくる。

「先輩！」

時間が無い。亮介は由姫の身体を攫い、精一杯の力で噴水の縁を蹴って跳んだ。

「……っ！」

何とか石畳を越え、柔らかい芝の上を転がる。ガラスはそれまで二人がいた噴水へ突き刺さるようになって次々に落ちた。ゆうに一メートルはある巨大な破片が噴水を寸断し、さらに砕け、高く飛沫を噴き上げる。

「犬飼！」

亮介の身体の下で由姫が叫んだ。

「犬飼、おまえ、血が……！」

ばた、と芝生に赤い雫が落ちる。顔を拭くと、掌がぬるりと濡れた。

血だ。飛んできた小さなガラスで切ったのだろう。

由姫を汚さなくて良かった。亮介は立ち上がり、蹂躪された噴水をじっと見据える。

何かが居る。

「犬飼！ 俺のことはいい、逃げる！ 俺一人で何とかなる！」

「ダメだよ。ダメだ¹……」

亮介うわごとのように呟きながら、今や巨大な鏡となったドームの破片に目を凝らした。そこには亮介と由姫の姿が映っている。が、それだけではない。ガラスの表面にゆらゆらと二匹の魚が泳いでいる。いや、魚ではない。尾だ。獣の尾。

「狼……？」

口に出せば、二匹の灰色の狼が確かにそこにいた。どう猛な息を吐き、鋭い歯と長い舌をむき出しにしている。

そうだ、どうして気づいたのが今だったのだろう。亮介は確かに見ている。砕けたガラスを足場にして、空から二匹の狼が襲いかかって来るのを。

「犬飼。おまえ、見えるのか……？」

由姫の声が震えている。

「見える。これ、何？ 普通じゃない」

答えはない。なければないで構わなかった。対象が由姫に危害を加えるつもりがあるかということが、亮介の中では何よりも重要だった。そしていま、狼の凶暴な二対の瞳は立ちほかる亮介を透かして、はつきりと由姫を見ている。

狼は飢えている。由姫の柔らかい首筋に牙を突き立てるつもりなのだ。長い舌で甘い肌を犯し、肉を蹂躪するつもりだ。

そんなことは許さない。

「先輩。これ、殺していい？」

生まれて初めて口にする言葉だった。

殺したい。

衝動に名前を与えると、亮介の腹の底から妙な高揚感が迫り上がった。

てきた。それはあつという間に肺を満たし、全身を巡った。

呼吸が少しずつ速くなる。指先に熱が灯る。

「犬飼、」

「大丈夫、守るから」

亮介は振り返り、大好きな人に微笑んだ。その瞳が悲しみに翳るところがないように。

狼たちがぶるりと震え姿勢を低くした。亮介もまた腰を屈め、ガラスの破片を拾い上げる。

いいよ、いつでも。

「犬飼！ やめろ、おまえまでこんな世界に来るな！ 犬飼！」

由姫の悲痛な叫びを掻き消して、二匹の狼が咆吼する。亮介は迫り来る牙を見据えながら、ただひとつのことを思っていた。

——しつけがなっていない。

どこか同じ空の下、一羽の鴉を従えた魔法使いが苦笑した。

第6章 - 02

「おまえはいつも、授業をサボってこういうことをしているのか。しかも男と？」

ずっと胸が冷えた。

こいつも同じだ。急に何もかもがつまらなくなって、男の上から退いた。寝ているのなら眼鏡を取ってやろうとしたただけだった。

「おまえに関係ないだろ。何しに来たんだよ」

ご忠告ならうんざりだった。

男とは同級生であったが、クラスが一緒になったことはない。けれど顔は知っている、御園学園の生徒会長だ。クラスメイト全員の顔が未だに曖昧な自分にとっては、覚えていること自体がほとんど奇跡に近い。

「何っておまえ、ここは学校の施設だろう。勝手に使っていていいと思ってるのか？」

「そっちだって使ってただろ、勝手に」

「それはおまえを……！」

「何だよ」

「——何でもない」

男はベッドから足を下ろし、襟元を正して目を逸らした。真面目な生徒会長殿にとっては、自分なぞ目に入れる価値もないらしい。

こんなことならさっさと立ち去るんだった。数分前の自分を呪う。いつもの通り昼寝に訪れたら、自分より先にこの男がベッドで眠っていた。あまりにも気持ちよさそうに寝ていたので起こすのが躊躇われた。

言ったところでうまく伝わらないだろう。自分にだって、行動の意味がよくわかっていない。

「おまえこそ俺の質問に答えてないじゃないか」

「あ？」

「噂は聞いている。いつもこういうこと、してるのか。誰とでも？」
肺に再び苦いものが満ちた。慣れた毒だった。与えた者は気づかない、受けた者にしかわからない毒。氣遣うふりをした好奇心、諭す裏にべつたりと染みついた軽蔑。すっかり慣らされてしまったから、今やそれらが致命傷になることはない。

ほんの少し息ができなくなる。それだけ。

「してるって言ったら？」

この男がどういう反応をするのか知りたかった。軽蔑されたかったのだ、たぶん。自分と全く違う明るい世界にいる人間が、どんな目で自分を卑しむのを見てみたかった。それはとても楽しい遊びだと思った。

だが男は目に力を込め、大真面目にこんなことを言った。

「もうやめろ。傷つくのはお前だ」

「——は？」

言葉の意味がすぐには理解出来ず、呆氣にとられた。テレビドラマに出てくるみたいな陳腐な台詞だった。

「……ゴムしてるし、させてっけど。一応」

念のためを言うと、男がカツと頬を染める。

「か、身体のことを言ってるんじゃない！ 心の在りようの問題だ！ そうか、おまえひょっとしてまともな恋愛したことないんだな？ いいか、恋愛は誠実であるべきだ。相手を尊ばない限り、おまえ自身が大事にされることもない。男女がまわらず不特定多数と関係を持つなんてふしだらなことは今すぐに止める。今すぐにだ！」

大人と同じ事を言う。けれど不思議と耳障りじゃなかった。こいつをもっと怒らせてみたら、もっとからかってみたらどうという反応を寄越すだろう。

興味が湧いた。

「——で、止めてどうすんの？ あんたが俺の新しい相手になってくれんの？」

ベッドに膝をかけて、男の首筋にするりと手を回した。丁度良いタ

イミングで、ぎし、とそれっぽくスプリングが軋む。
また真っ赤になるだろうか。

しかし男は予想に反し、額にびしりと青筋を立てた。

「わかった、俺がおまえを更正させてやる」

目が据わっている。

「は？」

「聞こえなかったんならもう一度言うぞ。俺が、おまえを、更正させてやる！ 卒業までに立派な人格に矯正させて、おまえの口からありがとうございましたって涙ながらに言わせてやるからな！ いいな、絶対だ！」

意味を理解するまでたつぷり三秒かった。のち、盛大に嘖き出した。

「な、何だそれ！ 生徒会長、あんた案外面白い奴だったんだな！

あはは、やばい、涙が、あ、はははははは！」

「おい、俺は本気だからな！ 笑ってられるのも今のうちだぞ！」
宣戦布告はまつすぐに心に届いた。今まで聞いたどんな慰めの言葉よりも深く。

「いいぜ、やれるもんならやってみろよ。精々腰が砕けないようにな、生徒会長」

「そっちの話じゃないって言うてるだろ！ おまえは下半身の話しかできないのか！？ おまえ馬鹿か……っ、おい！」

罵られるのが楽しいなんて、妙なクセがつきそうで困る。最後は男を巻き込み、ベッドに倒れ込んで笑った。こうなると眼鏡はやはり邪魔だった。

「もう無理、腹筋痛え」

「おい抱きつくな。眼鏡が歪む」

「いいじゃん、コンタクトにすれば。俺あんたの顔好き」

「誰がおまえの好みを聞いた！」

文句を言いながらも、男はそこから動くつもりはないようだ。安心して目を閉じた。

「……奥永？」

「昨日寝てないんだ。このまま抱き枕になれよ。襲ったりしねーから」

「襲われてたまるか！ あとおまえ、俺の苗字をちゃんと——、奥永？」

「美月でいい……」

どんな人間と肌を交わしても、ずっと乾いていた場所。それがひたひたと満たされてゆく。

与えられる何もかもが新鮮で胸が苦しい、でもこのまま溺れたっていいのだ。仕方なさそうにため息をついて甘やかしてくれる男が、不慣れな世界での呼吸の仕方を教えてくれる。

声が滲んでいることに気づかれなくて良かった。本当に。

第6章 - 03

「良かった……」

目を覚ますと、慣れた天井が目に入った。

保健室だ。

「気がついたか」

「……先輩？」

傍らの椅子に由姫が座っている。慌てて起き上がろうとすると、支えにした左手に鋭い熱が走った。

「痛って！」

頭の天辺にまでじんじんとした痛みが突き抜ける。一体何だ。制服のシャツの袖をたくし上ると、左腕の肘から下にぐるぐると包帯が巻かれていた。左腕だけではない。右手の人差し指から小指までの第二関節にそれぞれ、親指の付け根にも巻かれている。

着ているシャツは自分のものではないようだ。サイズが大きいし、真新しい匂いがする。

一体何がどうなっているのか。

「あまり動かすな。縫う必要はないらしいが、出血がひどかった。念のため今日は病院に寄って帰れ」

「俺、怪我してる？」

寝る以前と以後の記憶が上手く繋がらない。日付さえも曖昧だった。窓の外はひどい雨で、今が午前であるのか午後であるのか、それすらもよくわからない。

おかしいのは、身体がいつもより軽く感じることだった。怪我をしているらしいのに力は溢れるほどに充実していて、今すぐにでも走り出したいくらいだ。

「おまえ、どこまで覚えてる？ 今日の日、俺と植物園で待ち合わせをした」

「あ、そっか。うん、覚えてる」

取っ掛かりがあれば思い出すのは簡単だった。そうだ、由姫と待ち合わせをしたのだ。金森という子にローキックを喰らわされそうになって、それで――。

「……先輩、」

亮介はシーツをぎゅっと握った。

「先輩。あれ、何だったんだ？」

ドームのガラスを割って、天井から降りてきた二匹の狼。

「あれって、何のことだ」

「狼だよ！ あれ絶対に普通じゃない。そうだ俺、先輩を庇って、それで……」

亮介の記憶は寸手のところで狼の牙から逃れ、由姫を庇って芝生を転がったところでぶつりと切れている。

「そこからは覚えていないんだな」

「……うん」

亮介は俯き、小さく頷いた。大方、自分は狼に左腕を噛まれて気絶でもしてしまったのだろう。無論亮介を見る由姫の目に軽蔑など欠片もなかったが、恥ずかしさに消えてしまいたくなる。

何もできなかった。その事実が亮介を打ちのめす。

「――あの狼、あれ、何？ 結局あいつらどうなったんだ？」

「俺が始末した。後のことは、おまえが気にすることじゃない」

「……？」

亮介は由姫の様子に違和感を覚えた。

「おまえが怪我したのは俺の責任だ。済まなかった」

「責任、って」

「制服は新しいものを用意させる。怪我については、おまえの親に俺から直接謝らせてほしい。おまえは俺と一緒にいて、野犬に襲われて怪我をしたんだ。いいな？」

「先輩、……何言ってるの？」

「通院で費用が掛かってしまったら、もちろん全額――」

「先輩！」

語調を強めると、由姫は厳しい表情で押し黙った。

まるで話が通じない。それぞれが違う世界の住人になってしまったかのような。少しは縮まったと思っていた距離も、今はこんなにも遠い。

「――犬飼、もう一度言うぞ」

由姫は俯き、あの日と同じ言葉を繰り返す。

「二度と俺に近づくな」

亮介は目を見開いた。だが今度はただ傷ついているわけにはいかない。

「何だよ、それ」

納得できない。亮介はベッドから立ち上がり、由姫の肩を掴む。

「なあ先輩、何隠してんの？ 何でそう一人でいようとするんだよ

！ 俺は……！」

「……かづきすぎた」

由姫が呟いた。

「俺が、近づき過ぎたんだ。おまえに」

それは懺悔のようだった。

「全部俺が悪い。俺のせいだ。おまえが怪我をしたのも、何もかも、全部」

「……こんなのかすり傷だよ」

亮介は由姫の前に跪いた。

由姫は泣きそうな顔をしている。こんな顔をさせているのが自分だと思うと、情けなくて怒りがこみ上げてくる。

「ごめん。俺、絶対に先輩のこと守れるようになるから」

膝の上できつく握ったそれぞれの拳に、両手でそっと触れた。ひくりと指先が動いたが、それ以上の抵抗はなかった。

「傍にいさせて。教えてよ、全部」

凍った指をひとつひとつ解いてゆく。

この人が好きだ。

この人が本当に好きだ。

「先輩のためなら何でもする。先輩を守るためなら——」
この命のすべてを懸ける。

「……っ！」

由姫が唐突に亮介の手を振り払った。

「やめろ」

「……先輩？」

「やめろ。俺は、そんなもの欲しくない」

由姫の唇が震えている。

「俺は……、そうだ、俺は、お前のことは好きじゃない」
怯えている。

由姫は立ち上がり、亮介の前から一步退いた。パイプ椅子がガシャ
ンと音を立てて倒れる。

「おまえの望む関係にはなれない。もっと早く言うべきだった」

「それとこれとは、」

「同じ事だ。おまえが俺のことを好きだって、本気で言ってるのは
わかった。でも諦めてくれ。俺には——、大事な人がいる。ずっと
昔から」

大事な人だ。由姫は繰り返す。

「だからおまえの想いには応えられない。俺はずっと、……ずっと、
その人だけを大事にしなきゃいけないんだ。ずっと、ずっと大事に

……」

何度も何度も、呪いのように。

「それでも！」

「そばにいただけでいいなんてふざけたことを言っなよ。俺は、あ
んな連中ひとりで何とかできるんだ。今までだって、ずっとそうし
てきた……！」

「……『ずっと』？」

ずっと一人で、あんな普通ではないものと。

「——迷惑だ、犬飼」

由姫が乾いた声で告げた。

「おまえのことが迷惑だ。自分の身体をよく見てみる、たかが使い魔程度でその様じゃないか。足手まといなんだよ」

左腕には二カ所穴が開いている。右手には裂傷。挙げ句の果てに気を失った。

「おまえに足を引つ張られて俺まで死ぬなんて冗談じゃない。俺は、……俺は絶対に！死ぬわけにはいかないんだ！」

静まり返る部屋に秒針の音が響いた。喘ぐような言葉の余韻を刻み、容赦なく未来へと時を進めてゆく。

「おまえの命なんか、……いらない」

拒絶は諸刃の剣となって互いの心を通った。血を噴き出した傷口に絡みつくのはいばらだ。傷つきながら守り、守るために傷つけるいばらの棘。

—— いばら姫。

繰り返し繰り返し、ページを捲ったあの絵本。

「俺のことが好きだって言うなら、俺のために何だってできるって言うなら！——俺の前からさっさと姿を消せ！」

第7章 - 01

古来、人々は夏至の頃に大がかりな火の祭りを行ってきた。太陽が黄道の頂点に達するこの時期、人々は地上で浄火を焚き、あらゆる厄災を取り除こうと考えたのだ。

特にキリスト教到来以前のヨーロッパにおいては、それは生と死を象徴する儀式でもあった。とある地域では「死」と名付けられた藁人形が火にくべられ、灰は畑にまかれる。そうすることで、彼らは植物を害虫から守ることができると信じられていた。またある地方では、夏至の頃に人間が生け贄として捧げられていた証拠がはつきりと残っている。それはヨーロッパの深い森の神に捧げられ、来るべき夏、豊かな収穫の約束となった。

スカンジナビア人の場合、この祭りは五月一日に行われてきた。前日、ヴァルプルギスの夜は西暦七七九年に没したドイツの聖人の名にちなんでいるが、古くは北欧神話における主神に関わりの深い日だ。彼はルーン文字の神秘を知るため、自身を槍で貫き、世界樹ユグドラシルで首を吊ったのである。

冬の終焉と共に死に、新たな夏の始まりと共に蘇る神。人々に光と闇を教えた篝火は災厄を燃やし尽くし、新たな大地への祝福となった。

そしていまこの極東の地で、同じように儀式は始まる。

四月三〇日午後二十一時、犬飼亮介は他の生徒に混じって、本校舎の屋上から校庭の篝火を見守っていた。

ここからは学園のあらゆる場所で同じように火が焚かれているのが見える。それらは薄い霞のかかった夜空と瞼を焦がし、春の夜から未だ残る微かな冬の気配を奪ってゆく。

由姫も今頃、聖堂からこの炎の一群を見ているだろうか。亮介は給水塔に寄りかかり、膝を抱えた。さすがに立入禁止のこんな場所にまで登ってくる生徒はいないから、いくらでも落ち込んでいられた。

「昨日の夕方、保健室で別れてから由姫とは会っていない。休み時間も昼休みも、ほとんど教室の中に籠もっていた。

あんなに早かった一日が拷問のように遅く感じる。何をしたいとも思わない。ひっくり返した砂時計が落ちきるのを、テーブルの上に頬をくっつけてじっと待っているだけだ。そのくせ放課後は逃げるように学校を後にした。たとえ偶然でも、決して会ってしまわないように。

さつさと自分の前から姿を消せと由姫に言われた。だからこれでいい筈だ。

一瞬でもそんなことを考えてしまう自分は、我ながらサイテーだった。

「亮介」

振り返ると、ハシゴを登って来る親友の姿があった。

「……久志」

秋津久志は明かりの消えたランタンをコンクリートの上に置くと、

一息にハシゴを登り切って亮介の隣に腰を掛けた。

「おまえ落ち込むと絶対高い所に登るよな」

「……そうなんだ？」

「気づいてなかったのか？ おかげで探しやすくていいけどな」

久志は昨日も今日も、明らかに様子がおかしい亮介に何も聞かなかった。けれどずっと様子を気に掛けていたことは知っている。こうしてそばにいてくれる。今も。

「探検はいいのか」

「……うん」

薄闇の中、亮介はスニーカーの白いつま先をぼんやりと見つめる。

そういえば、これはいつぞや会ったユーレイが履いていた黒いスニーカーと色違いのローカットモデルだ。昨日母親に無理矢理駅前に連れ出されて適当に選んだものだったが、気づかなかった。

「クラスの間中が心配してんぞ。おまえがいよいよ御園先輩にフラれたって」

ああ、そういうことになってるのか。亮介は空を仰いだ。星はひとつも見えない。

「フラれた……、んだと思う。うん」

「……そうなのか？」

久志は心底意外だという言い方をする。

「迷惑だつて。俺なんかいらなくて。……俺が、言わせたんだ」
言わせてしまった。ひどい言葉を、あんなにやさしい人に。

亮介は右手を見た。そこにもう傷は残っていない。左腕は包帯こそまだ巻かれてはいるものの、痛みはいつの間にか消えてしまっていた。

けれど由姫の傷は消えない。自身が放った言葉の棘は、きっと今も由姫を傷つけている。そうやって遠ざけることで、由姫はきっと今までたくさんの人を守ってきた。

その事に気づかず、一方的に気持ちを押しつけて由姫を困らせたのは誰だ。挙げ句の果てに由姫を守ることもできないで、ひどいことを言わせて、こうやってただ膝を抱えて。

「……俺、いつもこうなんだ」

篝火が揺れている。いくつもいくつも、王を弔うために、新しい王を迎えるために、来る夏の収穫のために。それは暗闇の中の道しるべのようだ。

「俺が余計なことしなければ、全部うまくいく。昔からずっとそうだった」

亮介の周囲には常に手を引いてくれる人がいて、注意を促してくれる人がいる。あらかじめ道は舗装されていて、標識に逆らわず進めば一番いい結果に辿り着くことができる。

「だから、俺はたぶん何もしないほうがいいんだと思う。でもそれは……」

「嫌なんだろ」

「！」

「おまえはどうしたいんだ。どうなりたいんだ、亮介」

久志がまっすぐに亮介を見つめる。その瞳に嘘を決して許さない厳しさと、全てを受け止める深い慈しみを宿して。

「俺は……」

亮介は暗闇に目を凝らした。そこに自分の光があると信じて。

「俺さ、言われたんだ。七瀬先輩に。傍にいたいなら、踏み越えちゃいけないラインを守れって」

守れなかった亮介は由姫を傷つけた。一方的に近づいたのは自分だ。そうだとばかり思っていた。けれど。

『おまえに近づきすぎた』

保健室で、由姫は亮介に言ってくれた。

『俺が、近づき過ぎたんだ。おまえに』

「俺だけじゃなかった」

自分だけじゃない。由姫からも、ちゃんと近づいてきてくれていた。由姫は亮介を理解しようとしてくれていた、本当に信じてくれていたのだ、亮介の想いを。

だからあの拒絶は何としても否定すべきだった。迷惑だと言われても、消えろと言われても。亮介は由姫のそばに居続けるべきだった。それを、逃げた。

「俺は弱い」

由姫のやさしさに甘えた亮介はとても弱い。

「俺は、弱い。——それでも俺は、先輩のそばにいたい！」

一層燃え上がった火が天高く闇を焦がし、亮介の瞳に光を灯した。強くなる。

決意と共に握り込んだ拳の中に幻の鍵がある。守ってくれる声も手も遠くなり、自分ひとりしかない。けれど戻りたいとは思わない。それはひよっとしたら、自分を大事に思ってくれている人をおろそかにする行為なのかもしれない。ワガママかもしれない、思い上が

りかもしれない。それでも今の亮介には欲しいものが、自分自身の手で探し、見つけ、守りたいものがある。

門は開かれたのだ。もう、いつだって走り出せる。

「俺、行かなくちゃ」

そうだ、どうしてこんな場所で膝を抱えていたのだろう。由姫は今も戦っている。

行かなければ。由姫の元へ。

「……おまえはいつも、そうやって勝手に立ち直るんだよな」

亮介の隣で久志がふてくされている。

「おかげで俺の出番が無いんだよ。おまえさ、俺のこと一体何だと思ってるんだ。親友だぞ？ 慰めようとした俺がバカみたいじゃないか」

「そんなことないよ。絶対」

決して無い。亮介は微笑む。自分の背中を押してくれるのは、いつだってこの親友だ。

「久志」

「ん？」

「抱きついていい？」

久志は嘖き出した。

「子どもかおまえは。どうぞ？」

広げられた両手に迷いなく飛び込む。

「ありがとう。大好きだ」

ぽんぽん、と背を叩いてくれる頼もしいこの手が、親友が、亮介は本当に大好きだ。

「おまえはおまえの思う通りにすればいい。首を突っ込みたい物好きはいくらでもいるさ。ここにもな。——行つてこい」

「うん！」

亮介は力強く頷いた。立ち上がって見据えるのは御蘭学園の中心にある聖堂、かつての王の墓。

そこに、きつと。

第7章 - 02

御園由姫は百合の花束を手に、巨大な鉄の鎖に囲まれた白亜の聖堂を見上げていた。

聖堂は十八世紀後期の北欧に見られる、ネオ・クラシック様式の石造りの建築物だ。入り口の三角屋根は細かい金で装飾がされ、左右対称に描かれた模様の数々は華美と言うより、論理的で厳粛な性格を感じさせる。

屋根の上には御園学園の中で唯一の小さな十字架がある。これはおそらく建築当時、周囲への説明のために不本意ながら付属させたものだろう。資産家がわけのわからない神殿を建てるよりは、キリスト教の教会だと言ってしまったほうがきつと都合が良かったのだ。教会の横には大きなトネリコの木があり、空へと燃え上がるように枝を広げている。

これと同じ風景を、由姫は本で見たことがある。カール・ラーションという画家が描いた、冬至の生贄という油絵だ。

スウェーデンの王、ドーマルデイの治世は不作と飢饉が続いた。そこで民衆は王の血を神に捧げることにした。王の血は大地に染み渡り、その息子が王の座に就くと豊作となったと言う。

王は祭司であり、また人間神であった。民衆は王を尊敬し、力が衰えるとこれを殺した。死は人間にも神にも訪れる絶対の真理であり、避けられない衰弱が訪れる前に、王の魂を新しい器へと引き継いだ。王が生き続けるには、剣を取り後継者を殺し続けるしかなかった。

——由姫はオレンジ色の明かりが灯る聖堂の階段を登り、古く重い木の扉のハンドルに手を掛けた。

油絵の構図はこうだ。

女たちは踊り、背を向けた介錯人が後ろ手にナイフを持ち、蒼い衣

を纏った男たちがホルンを吹いている。引つ立てられた王はマントを脱ぎ、気高く天を仰いでいる。

なお、完成後の絵では削られてしまった部分がある。絵の隅には本来、木に吊された人間とそこに群がる鳥があった。

北欧神話においては、吊るされた男とは即ち神である。欲のために槍で自らの命を自らに捧げ、九日九夜、世界樹に吊られて生と死の境界を彷徨い続けた神――。

扉を引き、蝋燭の灯りに導かれる。高い天井からは聖堂の周囲と同じように太い鎖が下がり、四方へと張り巡らされている。それらは真つ白な壁に無尽の影を造り、ゆらゆらと揺れた。吊られた男。

祭壇には影絵に吊られるようにして、一人の男が立っていた。

「やあ。久しぶりだね、由姫」

「……父さん」

由姫はその男、紀野由彰を父と呼んだ。十七年前、途方もない力に手にし、狂ってしまった男だった。

「元気そうだ。学園生活も楽しいみたいだし、新理事長としては大いに結構」

由姫は眉を顰める。

「理事長？　どうということだ」

「そういうことさ。東雲翁に聞いてみるといい。死体は雄弁だよ」

「おまえ……！」

「俺じゃない。いたのさ、東雲詮房を殺したくてたまらなかった人間が」

それは誰だ。

「古典的に脅してみようか、由姫」

紀野由彰はゆったりとした動作で階段を降りる。由姫は花束を握りしめ後ずさった。が、背後に感じた気配に振り返る。

開けたはずの扉は閉じて、そこには制服を着た一人の女子生徒が佇んでいた。

白い肌、赤い唇。闇を掬いあげたような黒髪。

——天竜寺椿。

「おまえ、椿先輩に何を言った。何をした!？」

紀野由彰はわざとらしく肩をすくめる。

「俺じゃない。彼女が選んだんだ。擦りたかったから擦ったのさ。母親と同じようにね」

「……っ」

「さあ、鍵を開ける。由姫」

由彰の羽織る黒いコートが見えない風によって翻る。差し伸べる手が、全身が蒼い光を帯びた。一際輝くのは右目だ。左目の光は力の代償で失った。

戦争と死、知識と詩。全知全能、万物の父。ルーンのスクリプトを知るために世界樹に自ら吊られた、その神の名は。

「オーデインが所望する。王の写本を渡せ、エッダの巫女よ!」

蠟燭の火が消え、聖堂の窓ガラスが一瞬で碎け散る。

月は闇に呑み込まれ、篝火は印となって御園学園の結界を燃やし尽くす。

——ヴァルプルギスの長い夜は、こうして幕を開けた。

第7章 - 03

亮介は森の中を走っていた。ブロムナードをくぐり抜け、獣道をひたすら北へ。学園の中心地にある聖堂を目指して。

何かが既に起こっている。走る途中、ぶるりと地面が震えて空中に深い亀裂が入った。そうしてこの時になってようやく、亮介は学園全体を覆っていた薄い膜があったことに気づいたのだった。剥き出しの魔術に満ちた空気は塞がらない傷のように五感をひりつかせる。変化は自身にも訪れていた。

目だ。夜だと言うのに、森の中の様子がよく見える。色こそ無いが明暗ははっきりとしていて、どこに何があるのかがよく分かった。そうしているうち、亮介は自分が景色を追いついてゆく錯覚を感じた。坂道を自転車を下るような、違う、もっとだ。もっと早く走れる。

由姫の居場所を嗅覚から感じる。原初の森の匂いに混じって、それはたまらない薫香となって本能に届いた。あまりに無防備で危険だ。数え切れない意識が由姫に向いている。

結界が破られた今、御園学園は外部からの魔術を阻む術がない。いま、御園由姫を守るものは何ひとつない。

何ひとつ！

『御園は巫女の一族だ。御園彰がヨーロッパから持ち出した魔術の源である王の写本を、その血筋に封印してる』

屋上で別れる前、秋津久志が亮介に教えたのは御園の血統にまつわる伝説だった。

『写本の元々の持ち主が誰だったのかはわからないが、御園彰は正式にそれを譲り受けたらしい。以来、御園一族は血を守り、結界の中で穏やかに暮らしてきた。パトロンである東雲家と、大戦の最中に御園彰の命を救った紀野家の子孫が写本を巡る争いを始める前までは』

やがて世代を経た両家は争いを止めるべく、互いに和解策を提示した。

その象徴こそが紀野と東雲の婚姻だった。

『十七年前、この三家の間に何があったのか。誰も語ろうとしない。何もわからないんだ』

東雲沙姫が死んだ理由も、紀野由彰が両家の人間を大量に惨殺し、姿を消した理由も。

『でも、はつきりしてることもある。写本の封印は百年しか保たないってことだ。そしてちょうど百年目が——』

今宵、ヴァルプルギスの夜。

あらゆる境界が消え失せ、王の写本がこの世に再び現出する。

『東雲の動きもおかしい。対外的には御蘭由姫が再び写本を封印する儀式を行うだけだと言ってるが、きっと何かが起こるんだ。そのために御蘭先輩がおまえを自分から遠ざけたんだとしたら——』

相応の危険が由姫自身に降りかかるに違いない。

「先輩……」

心が焦燥に喘ぐ。感覚の全てが警報を鳴らしていた。

もっと。もっと早く由姫の元へ。あのひとを一人にしてはいけない。

『——そういや、御蘭先輩が妙な事言ってたな』

久志は一度、正面切って御蘭由姫に訊ねたことがあるのだと言う。今年のヴァルプルギスの夜が神社筋でも噂になっている。その日、一体何があるのかと。

『御蘭先輩はすらすら答えたぜ。あらかじめ用意してあった台詞を読み上げるみたいに』

——俺の苗字を知ってるだろ。御蘭の人間にとって、前夜祭は特別なんだ。創始者の御蘭彰理事長の命日だからな。毎年身体を清めて聖堂を墓参りだ。

——御蘭の取り決めで、直系の誰かが花を供えることになってる。

大変なんだぞ、前日の夜から食事はダメで、水かお茶しか飲めないんだからな。そういうわけで、あらかじめ言っておくが、探しても俺はいない。すまないな。

『俺は探すなんて一言も言っていない。謝られる筋合いもない。探すとしたらおまえだろ、亮介』

それは亮介が由姫を問い質す前日、日曜日の出来事。

亮介が聞いた台詞と全く同じだ。一字一句。間違えずに。

「覚えてやがったな、先輩……！」

御蘭由姫は嘘が苦手だ。だからきつと、何度も何度も練習したに違いない。嘘が嘘とバレないために、亮介を遠ざけるために、守るために。

「先輩、」

すごく可愛い。すごくムカつく！

亮介は奥歯を噛み締める。気を抜くと由姫のやさしい指先の感覚が蘇って涙が出そうだった。

「先輩、」

狼の遠吠えと荒い息づかいが背後からどんどん近づいてくる。

「先輩……！」

亮介はきつく拳を握った。信じている。

それでも信じている。由姫は自分自身をそう容易く犠牲にしたりしない。

だって由姫は約束してくれたのだ。

『絶対戻ってくるから』

亮介に、その先の未来を約束してくれた。

だから行くのだ。亮介は強く足を踏み込み、斜めに歪曲した木の幹に飛び移った。まだ足りない。もっとだ。もっと早く。もっと遠くへ！

——亮介は跳んだ。

額を強い風が打った。土で汚れたスニーカーのつまさを、葉の波がさがさと攪う。前方に島へ渡る橋と白い聖堂が見える。

飛んでいるわけではない、けれど跳躍と呼ぶにはデタラメな距離を、亮介は跳んでいた。

不思議には思わなかった。身体は万全に機能している。左腕に巻かれていた包帯が風に巻かれて吹き飛んだ。傷はもう跡形も残っていない。

再び森の中へ潜り、地上をひた走る。狼の群れは亮介に追いつき、ついに姿を視認できるほどになった。時折亮介に飛びかかり、牙を剥いてくる。が、構っている暇はない。避けながら走っているうち、亮介は唐突に出現した城壁に行く手を阻まれた。森の終点だ。城壁には蔦もなく、落葉樹の枝は飛び移るには弱い。この高さでは十分な助走がなければ跳ぶことも不可能だ。

やがて亮介は追い込まれた。

数十匹に及ぶ狼が、興奮に毛並みをぶるりと震わせて亮介を囲む。狼の狩りだ。狼は牙でなく、脚で獲物を狩る。群れで追い込み、動けなくなったところを襲うのだ。

「くそっ……！」

焦る亮介の視界にヒビが入った。こぼれ落ちた景色から覗いたのは巨大な獣の目だ。爪を立て、喉を鳴らし、境界を噛み砕きながら現実へと浸食してくる。

異形の獣だった。身体に不釣り合いなほど顎ばかりが発達し、支えきれなくなった前脚が変形してしまっている。耳まで裂けた口、剥き出しになった鮮やかな歯茎の隙間から、血の混じる涎がとめどなく地面へと滴り落ちる。

「……おまえ、」

程なくして亮介は獣の正体を知った。右目が潰れている。植物園で自分と由姫を襲ってきた狼の片割れた。自分が殺した、あの狼の。

「動くな！」

「!?!」

満月に一閃、白い光が煌めいた。

刹那、狼が蛙のような声で鳴いて喉を仰け反らせた。暴れ狂う背には真つ白な刃が突き刺さっている。その柄を両手で握りしめているのは――。

「椿先輩！」

白い肌、赤い唇。闇を掬いあげたような黒髪。

――天竜寺椿。

彼女は刃を抜き去り、獣の脚を蹴って後方へと着地した。異形の狼は崩れ落ち、生まれたばかりの動物の子どものように腹を晒して血の海の中を這いずり回る。

だが瞳からは未だ光が失われていない。

「先輩、まだまだ！」

狼は息も絶え絶えに体勢を整えると、咆吼を上げ渾身の力で空中へ跳んだ。

目標は亮介だ。

凄まじいスピードで頭上に迫り来る牙、血に濡れた灰色の毛並み、純粹な獣の殺意。

亮介は姿勢を低くしたまま地を蹴り、狼の腹の影をすり抜けた。滴り落ちた血の雨が全身を濡らす。

目標を見失った狼は轟音を立ててレンガ造りの城壁に激突した。椿に視線を送ると、意図を察した椿が刀を鞘に納め、亮介に向けて放り投げる。

狼は瓦礫からどうにか顎を引き抜こうと身を擦らせている。

亮介は受け取った刀を鞘から引き抜き、逆手に柄を握って瓦礫を登った。巨大な左目がぐるりと動いて亮介を見る。忘れない。

決して忘れない。これから自分が殺す命の名を。

「終わりだ。……フレキ」

いまの亮介にはすべてが分かっていた。二匹の狼の名も、その片割れをこんな姿にしてまで生き長らえさせた主人の名も。

そして他でもない、自分に宿った力の名も。

亮介は深く息を吸い、血に濡れた刀を獣の前脚の付け根に深く沈めた。

肉を断つ感触、血管を破き、心臓を貫いた切っ先から指先へと伝わる命の重さ。頬に降りかかる血の温もり。唇を噛みしめながら、柄を握る両手を震わせながら、それでも亮介は目に、耳に焼き付けた命の終わりを、断末魔が永く永く、暗い森へと響き渡るのを。

事切れたフレキの体はやがて粒子となつて景色に融け始めた。亮介の全身を濡らしていた血もまた還つてゆく。ここではないどこか、それが一体どんな場所あるのかは、今の亮介にはわからない。辺りを囲んでいた狼たちもまた闇の中へと引き上げて行く。弔いは終わったのだ。

「……あの狼たちは何故攻撃して来なかったんだ」

瓦礫から降りた亮介に椿が問う。

「見届けたかったんじゃないかな」

眷属の最後を、命の結末を。肥大化した魔力のせいで、どちらにせよ永くは保たなかった。

亮介は改めて椿の面立ちを見つめる。

ひとつの確信があった。

「椿先輩。俺のこと知ってるの？」

これで全てが分かるはずだ。亮介の問いに、椿は不思議そうな顔をする。

「お前と会うのは始めてだ。お前は誰だ。どうして私を知っている？」

椿の疑問は当然だった。

何故なら、椿は亮介に会ったことが一度もない。

『少なくとも亮介君が力になれることはないと思う。言ったでしょ、近づかないほうが由姫君のためだって。私だってお父さんと椿ふたりに釘をさされちゃったんだから』

七瀬は本当に何も知らなかった。そう聞かされていただけだった。月曜日、由姫が会いに行こうとしていたのは椿だ。七瀬は関わっていなかった。

—— その時まででは。

『気をつける』

久志は言った。特に椿の方には気をつけろと。けれど違う、違うのだ。椿は違う。

「俺は犬飼亮介。一年生だよ」

椿は目を睨った。

「犬飼……。もしかして奈月先輩の弟か」

「なつ姉のこと知ってるんだ？」

「無論、知っている。私の剣の師匠だ」

どうやら奈月もこの件と無関係ではないらしい。亮介は苦笑いをする。

「犬飼。私は入学式の夜以降、ずっと結界の中に軟禁されていた」よく見ると、椿の指先は真っ赤にひび割れている。亮介が持つ刀の柄もつつすらと赤い。力尽くで結界を破ってきたのだろう。

「じゃあ廊下で俺と会った、あれは」

椿は頷いた。

「もしおまえが私に会ったことがあると言つのなら、それは——」

「

第8章 - 01

同刻、玄関ホールには秋津久志の姿があった。

誰もいない。前夜祭で残っている生徒のほとんどが外へ出払っているとは言え、通りかかる人間すらないのはおかしい話だった。満ちた静寂は耳が痛いほどだ。

久志はホールの中央に立ち、天井を見上げる。

——ユミルの天蓋。

肉から大地を、血から海を。頭蓋骨からは天を。牡牛と共に生まれたユミルはその血を受けたオーデインによって殺された。

子が父を殺し、王が王を殺す。それは死と再生、繰り返される因果の物語だ。

「御影」

名を呼ぶと、いつの間にか久志の後ろにはスーツ姿の男が背中合わせに立っている。

男はため息をついた。

「久志様。面倒事には首を突っ込むなど、私のような下僕風情にあと一体何言われたら気が済むんです？ 犬だってもう少し賢いですよ。それとも被虐趣味がおありで？」

柔らかい声と口調でずいぶんなことを言う。久志は慣れたもので、毒を吐く従者を「おまえは相変わらず喋りすぎるんだよな」と窘める。

「前から思ってたんだが、おまえさ、主である俺に敬意を払うとか、そついうのをもつと態度に表すべきじゃないのか？」

「さあ、主に敬意を持ったことがないもので、何とも……」

「おまえ帰ったら正座な！ 正座……っ！」

急に強い突風が吹き荒れ、久志は思わず目を閉じた。

「——これはこれは。実にあなた好みの獲物のようだ」

庇われた御影の腕の中から天蓋を見上げると、北の方角、裂けた境

界の隙間から白い羽が次々に降ってくる。

「……そうみたいだ」

久志は不敵な笑みを浮かべ、腕を解く。

「念のためお伺いしますが、ご友人のためですか」

「まさか。当然、俺のためだ。おまえはいつものとおり巻き込まれただけだ、可哀想だな。でも付き合えよ。どうせ巻き込むならおまえがいい」

口説き文句とも取れる言葉を聞いた御影は最上級に嫌そうな顔をし、深い深いため息をついた。

「……本当に、犬飼亮介君は何だつて貴方みたいなのだろうもなのと付き合つていらっしやるのか……」

「それは亮介がいい奴だからだろ。おまえのはただ単に俺に惚れた弱み——」

シュツ。

久志の頭の上数ミリの地点を銀色に光る苦無が通過した。

その背後、鳥ともコウモリともつかぬ小さな化け物が身体の真ん中を貫かれ、ぼとりと床に落ちる。

「……おまえな……」

「失礼、手元が狂いました。久志様の冗談が悪趣味なので」

「悪かったよ、遊びすぎた」

久志は卵の殻を割るようにしてこの世に現出した巨大な驚を見上げた。その周りを夥しい数の眷属が羽虫の如く飛び交っている。

「久志様。僭越ながら、客分が勝手に暴れるのはいかなものかと」御影は再び久志の背中に立ち、両手に黒い革の手袋を嵌めた。

「やる気満々でよく言う。それに俺たちはパーティー会場に行く途中、散らかったゴミ箱を見つけたから片付けてやろうとしてんだぜ？ 親切だろ」

「物は言い様ですね……」

まったく、これだからあなたは始末が悪い。苦笑する御影の両手、十指の間で細い鉄針が鋭く煌めく。

「俺の担当は当然、あの一番でかいやつな。ちゃんと残しとけよ」

「結構。小物に飽きたら久志様を狙うことにします」

「……ったくおまえ、はっ！」

秋津久志は強く床を踏み鳴らす。瞬間、足元に五芒星が現れ白い光を放った。

太陽も月も呑み込む星の光。久志は今ひとたび眦を決し、天空の神に向けて弓を引いた。

第8章 - 02

聖堂の中、発動させた防御結界の反動によって由姫の身体は扉付近の壁に強く叩き付けられた。背に受けた衝撃に目が眩み、由姫はわずると沈み込む。

不十分だが、初めてにしては上出来だ。そう思わないとやってられない。由姫は頭を振り、花束の中に隠し持っていた杭を構える。敵を見据えた由姫は呆然と目を見開いた。

「七瀬先輩……？」

天竜寺椿だったはずの人物は、いま、天竜寺七瀬となって目の前に存在していた。

一体いつから。

——最初から？

「くんばんは、由姫君」

七瀬は床の上に散った百合の花弁を踏みにじり、女神の微笑みを浮かべた。

傍らに巨大な有翼の黒竜を従えて。

「そんな物騒なものの構えて、どうしたの？ 危ないじゃない」

「七瀬先輩、どうして……。その竜は」

「この子の名前はニーズヘッグ。私が契約したの。やっぱり血筋なのかしらね、相性がいいみたい」

七瀬は頭を垂らした黒竜に腰掛け、虹色に煌めく漆黒の鱗を撫でた。気持ちが良いのか、竜の長い尻尾がゆらりと揺れる。

「東雲翁は、それじゃあ」

「お父さん？ そうよ、私が殺しちゃった。だって私から椿を取り上げようとするんだもの」

竜の首はゆっくり上へ上へと昇ってゆく。

「拭って」

「千切って」

「殺したの」

私がこの子の力を使って。七瀬は子どものようにくすくすと笑う。

「上と下で半分つになっちゃった。東雲詮房はね、最後まで信じらんないって顔をして、とつても間抜けだったのよ。どうしてあんなに驚いていたのかしら。ねえ、あの人が企んでたこと、由姫君は知っていたんでしょ？ 儀式に乗じて由姫君を殺して、王の写本を手に入れようとしていたことを」

バカね。七瀬は鼻で笑う。

「椿はやさしいから、そんなこと出来るはず無いのに。だから椿は悩んでたのね。悩んで悩んで、由姫君に相談した。どうしてかしら。私に言ってくれば、直ぐにあんな男殺してあげたのに」

由姫はやりきれない気持ちになる。

魔術は七瀬の言ったとおり相性だ。一定の形を成し、名を与えられた魔力は程度の差はあれど自我があり、使い手を選ぶ。七瀬は天竜寺の娘だ。素質も血筋も、契約するには申し分ない。

この人はもう間に合わない。

「……黙ってたのは、七瀬先輩のためだ」

それでも伝えたいことがる。由姫は立ち上がった。

「私のため？」

「そうだ。椿先輩は、何があっても七瀬だけは関わらせたくないと言っていた。……七瀬先輩の言う通り、俺は東雲の思惑には気づいてた。俺を殺して写本を奪おうしてたことも、今夜、こいつが俺の前に現れるかもしれないってことも」

由姫は碎け散ったシャンドリアの下に立つ由彰を睨み付けた。肩を竦めて微笑む男は、無論一つも乱れたところはない。

「椿先輩が黙ってたのは、七瀬先輩が大切だったからだ。椿先輩はきっと俺を殺すことより、自分がいなくなつて七瀬先輩が悲しい思いをすることを嫌がつてた」

椿はこうも言っていた。

『七瀬はやさしいから、私が死ねばきつと泣いてしまうと思う』

「絶対に巻き込まない。絶対に、一緒にいられる方法を探すって！」
由姫はその言葉を聞いて、椿を信頼することに決めた。それは自分には決してできないことだった。

「椿、」

七瀬は愛おしい双子の名を一心に呟く。

「椿、椿、つばき……」

繰り返す、繰り返す。呪文のように。希うように。

少女の姿は龍の鱗が光を照り返すように椿になり、七瀬になり、また椿になる。

「——ほとんど無意識だったんだ、彼女は」

由彰が七瀬を見上げる。

「片割れを愛しすぎた彼女は、心の奥底に天竜寺椿が自分のことを愛していないという不安があった。その不安が爆発したのが入学式の日だ。おそらく本人の口から直接的に何かを言われたんじゃないか？そこで七瀬は椿を閉じ込めることにした」

二人が生まれ育った、今はダムの奥底に封印された生家へと。

「生家は母の子宮の代替だ。七瀬はもう一度戻りたかったんだろうずっとふたりきりだった母親の腹の中、羊水の海へ。あの楽園へ。」

「以来彼女は椿となり、また七瀬となって生活をしていた。自覚は無かった。椿になれば、彼女が何を隠しているのかわかると思ったのかもしれない。健気だと思わないか？」

「それを暴走させたのがおまえか。紀野由彰」

「父さんって呼んでくれるのは一度きりなのか。寂しいな。……天竜寺の双子はとも興味深い。とても希有な結果だ、由姫」

「……どういう事だ」

「天竜寺七瀬。君の願いは？」

呼びかけた由彰に、七瀬が虚ろな声で答える。

「もう一度、ひとつになりたいの……。椿と、ひとつに」

ずっとふたりきりだった。互いを分け隔てるものはなく、どこまでもひとつだった。

七瀬が母親を殺した、その日までは。

「天竜寺の双子はかつて、ひとつの意識を共有していた」

二人は姿形がそっくりだった。あたりまえだ、同じ存在が重なってそこにいるだけだった。

「椿と七瀬という名は、身体が二つあるから名が二つなければならぬ」という外界のルールだ。彼女たちにとって、名前なんて他者が決めた記号に過ぎなかった」

鏡とのあつちとこつちみたいだという少年の言うことがおかしくて、クスクスと笑った。二人は最初から一人だ。鏡なんて最初から存在していない。

『椿』はおとなしいが健康で、『七瀬』は病気がちだが人見知りをしない。器の特徴が出てくるに伴って、大人たちがそう決めた。この世界で生きるため、彼女たちはルールに従った。

「もしかしたら、そういった器の差異が分化を促したのかもしれない。が、それが決定的になったのは『椿』を虐待していた母を『七瀬』が殺した時だ」

——椿は何かを失った気がしてならなかった。けれど同時に、何かを手に入れた。

産声は歓びとなり、椿となった少女の世界を満たした。ほんの少しだけ残っていた悲しみは、気がつけばもう思い出せなくなっていた。

——蹲る少女のやせ細った手足、薄い肩。赤黒く濡れた足袋。首筋を彩る鮮やかな指の痕。血の海の中、彼女が得たのは二度目の生。悲しみが七瀬の胸を強く打った。耐え難い喪失が全身を襲った。

かつて私であった私。でもそれはもう私じゃない。裏切られた。どこかへ行ってしまった。

——果てしなく遠い、私の手の届かない場所へ。

「椿は、喜んだ」

椿の姿をした七瀬が嘆く。

「椿は手に入れてしまった。私が知らない、椿だけの何かを。そして忘れてしまったの。わたしたちがかつてひとつだったことを――」

「違う」

開かれた聖堂の扉から、日本刀を手にした少女が姿を現した。

「それは違う。七瀬」

「椿……」

天竜寺椿は巨大な竜に臆することなく、自分と同じ姿をした双子の片割れを見上げる。

「由姫先輩！」

その後ろから犬飼亮介が現れ、由姫に駆け寄った。

「……犬飼」

「先に言つとくけど、俺、滅茶苦茶怒ってるから。怪我は？」

「無い。……俺も、おまえに話したいことがある」

だが今はあちらが先だ。由姫は椿と七瀬を見守る。

椿は日本刀を床に置くと、七瀬に手を差し伸べた。

「覚えている。ずっと夢だと信じていたが、思い出したんだ。幽かだが、おまえが作った結界に閉じ込められていた時に。そうだ、わたしたちはひとつだった」

水の底に沈んだ記憶。

夏の空の青さも、庭を焼き尽くす真つ白な日差しも、少女はすべてを見つめていた。母に抱きしめられる喜びも、打ち据えられる痛みも、すべてひとつの心で感じていた。

だから、少女はいつもひとりぼっちだった。

「私は私といたいんじゃない」

いつからか心のどこかで生まれた強い願い。

誰かが欲しい。自分ではない誰かが。

私とは違うものを見て、話し、驚き、憧れ、共にいる幸福を感じた
い。

「私はおまえと一緒にいたい」

椿は必死に手を伸ばした。かつて自分であつた自分に、今は天竜寺七瀬である彼女に。

「私は、おまえだから一緒にいたいんだ！ 七瀬！」

七瀬。

それは一番大切な、かけがえのない姉妹の名。

「……椿」

微笑む七瀬の頬を一筋の涙が伝う。

「もう、遅いの」

黒竜が牙を剥いて甲高く鳴いた。

「由姫先輩、ごめん！」

「！」

亮介は由姫の身体を抱え上げ、天井から伸びる巨大な鎖を足がかりに二階の回廊へと飛び退いた。それまで二人がいた場所を竜の尻尾が一掃し、壁を粉々に砕く。

天竜寺七瀬は本来の姿となって、竜の頭と共にゆつくりと地上に下降を始める。

「どうして……、どうしてわたしたち、こんなに違うのかな。もしひとつの身体だったら、ずっとずっと一緒にいられたのかな」

七瀬は椿に手を伸ばす。椿も同じように手を伸ばす。鏡に映したようなその姿。

「七瀬……？」

「一緒にいたい。椿。今度はひとつの身体で」

指先が触れあう刹那、躊躇った椿の手首を七瀬が捕らえた。

「わたしとあなたの望みは同じじゃない」

「椿先輩！」

由姫が柵から身を乗り出す。黒竜の鱗は天井から降り注ぐ月光に照

らされ、ゆらゆらと虹色に揺らめいている。ここは水底だ。

ラゲナロク

「わたしの望みを叶えるには終末を迎えるしかないの。新しい大地で、わたしたちは本当にひとつになる。今度こそずっと一緒よ、椿……」

七瀬の瞳は幼子が夢を語るように無垢な光に満ちている。

「七瀬、」

椿は泣きそうに顔を歪める。

これが、少女が置き去りにした世界の結末。

「私は、私を取り戻すために邪魔をする者は許さない。たとえそれがあなたでも」

「七瀬……っ」

「椿が私を殺すか、それとも椿が私に全てを明け渡すか。戦うしかないわ」

「七瀬……！」

黒竜が翼をはためかせた。強い風が吹き荒れ、二人の手が離れる。

「さあ刀をとってよ、椿！ 私を殺してみせて！」

「七瀬！」

「由姫先輩！」

亮介は由姫の姿勢を低くさせ、巻き上がる風から覆い被さるようにして身を庇う。

「ラゲナロクだって……？」

由姫の声が震えている。

「ふふふ。あはははは！」

七瀬の淫奔な嘲笑が聖堂に響き渡る。黒竜は呼応するように震え、その口から凄まじい炎を吐き出した。膨らんだ熱は聖堂に張り巡らされた鎖を焼き切り、天井を呑み込んで新しい王の迎え火に最後の楔を穿つ。

「知らなかった、知らなかったの、こんなこと……。これが私の、私の願い……！」

炎の海の中、少女は産まれた。嘆きで満たされた羊水の胎盤を粉々

に砕き、今、黒竜の魔女として。

「……諦めない」

地上に落ちた鎖から燃え移った炎が地上をも呑み込んでゆく。そんな中、椿は刀を抜き、希望を失わぬ目で天井を見上げた。

「私だって諦めない、七瀬！ 必ずおまえを取り戻す。おまえを止めてみせる！」

竜が身体をぐるりと回転させ、地上へと急降下する。風圧で炎は更に煽られ、亮介たちの足場へと迫りつつある。

「さて、こちらから始めようか」

亮介は弾かれたように振り返った。いつの間にか、紀野由彰が手摺りの上に立っている。

「……あんた、誰なんだ。一体何がしたいんだ！」

こみ上げる不安に由姫の背を抱く手が強くなる。この男は危険だ。近づけてはいけない。

「世界の終末って何なんだ。由姫先輩をどうするつもりなんだ！」

男は穏やかに微笑んだ。

「順番に答えよう。俺は紀野由彰。その子の父親だ」

「父親……？」

「そう。だからそんなに警戒しなくていいんだよ、犬飼亮介君」

「俺の名前、」

「知ってるさ。君は賢者ミームルとしての犬飼大介、そして冥府の魔女、八束志乃の子だ。そして姉は稀代の魔女である犬飼奈月。番犬ガルムを呼び寄せるのにこれ以上の素材はいない」

冥府の番犬ガルム。冥府へ近づくものを追い払い、逃げだそうとする死者を狩る、それは犬のうちで最高のもの。

「目覚めた直後にも関わらず、君は俺の狼を退けた。左腕を犠牲に、脳髓へガラスを突き刺してね。ここに来る途中も片割れを仕留めてきただろう？ 全部見てたよ」

よくやったね。紀野は嬉しそうに拍手をする。

「……あいつをあんな姿にしたの、あんた？」

亮介は肥大した魔力に藻掻き苦しんでいた狼の姿を思い出す。

「もちろん、そうだ」

「何であんなことしたんだ」

「オーデインの狼の誇りにかけて君を倒すこと、それがフレキの望みだったからだ。君に倒されて、きつと本望だったに違いない。ありがとう」

思ってもみなかった言葉を掛けられ、亮介は戸惑う。

命を見送ったのが自分で良かったのか、背負うのが自分で本当に良かったのか。心のどこかでずっと不安に思っていた。

「犬飼。この男の話を聞くな」

由姫がゆらりと立ち上がる。

「先輩、」

「この男は確かに俺の父親だ。でも父だと思ったことはない。一度もだ」

紀野は慈愛に満ちた目で由姫を見ている。しかしそれは父親から息子にはなく、王が臣民に、神が地上の子らに遍く平等に注ぐ愛と同じだ。

だからこそ、指先ひとつで気まぐれに運命をねじ曲げ、命を奪ったりもする。

「紀野由彰。おまえ、最初から全部わかってて、犬飼を巻き込んだのか」

「巻き込んだのはおまえだろう、由姫。おまえが最後まで拒否できていたのなら、犬飼亮介はここにいなかった。少しなら大丈夫だと思っただか。上手くやれるとも思っただか？」

「知ったふうな口を利くな！」

逆上して杭を構える由姫に、由彰はそれでも優雅な姿勢を崩さない。

「由姫。俺はおまえを否定したりはしない。人間は過ちを犯す生き物だ。そして身勝手だ。人間はかつて争いのため、人間の意識の中に眠っていた伝説の神々を生贄よって現出させ、コレクシヨンのように写本へと封印した」

第一次世界大戦、ヨーロッパのとある場所で実験は行われた。

「魔術の材料となったのは僅かな金と引き替えに売られた子ども、捕虜、ともに使えなくなつた兵士たちだ。信じられるか、由姫。これは魔女狩りが盛んに行われていた中世の話じゃない。たった百年前の出来事だ」

由彰は眉を寄せ、初めて人間らしい顔をする。

「御園彰に写本を譲り渡したのは、実験の主任研究員をしていた魔術師だつた。軍時利用されるくらいなら、東方の島国から来たただの留学生に預けてしまつたほうがいいと思つたのかもしれない。だが結局、この国でも写本を巡る争いは起きた」

終わりにしよう。背後に火の海が迫る中、由彰は由姫に手を差し伸べる。

「世界は道筋を間違えた。俺が全てを終わらせる。俺が最後の王になろう」

それは新しい世界へと捧げられる最初の贅。

「写本を渡せ、由姫。俺はそこに封じられた全ての神々、贅となつた全ての人間の命を解放しなくてはならない」

「……解放したら、一体、どうなるんだ」

うまく言葉が出て来ない。亮介の全身から血の気が引いた。それでは自分の内に宿る途方もないこの力は、七瀬が呼び寄せたあの竜は、この手で殺した狼は、誰かが犠牲となつて――。

「人間という媒介なしにこの世に蘇つた神々は、綴られた予言の通り争うだろう。ただでさえ脆弱な人間の世界がどうなるかは、わざわざ語るまでもない」

だが予言はあくまでも予言だ。由彰は言う。

「冥府の扉は今宵既に開かれている。御園と契約した一族を始め、七瀬や犬飼君のように既に神々の力を宿している人間もいる。死者と生者と神々と、生き残つた者が新しい世界を生きる権利を得る。ほら、平等だろう？」

――この人は。

亮介は息を呑んだ。

この人は、正しいことを言っている。

「耳を貸すな、犬飼！ この男は正しくなんかない！」

由姫が亮介の制服の襟を強く掴み上げた。

「先輩、」

「いいか、どんなに正しく聞こえたって、それはこの男の主観だ。平等なんてまやかした！」

炎の中、由姫の瞳が爆ぜる光を集めて輝いている。

「こいつが言ってるのはな、時計の針を巻き戻すってことだ。終わったはずの過去をわざわざ連れてきて、今ある世界の秩序を滅茶苦茶にするってことだ！ そんなことが許されるか！？ おまえは、そんな世界を望むのか！」

全てをリセットし、平等という名の正義の下、力に在る者が創造した一点の曇りもない未来を。

「……わかんない」

亮介は強く拳を握りしめた。

「俺、……よく、わかんない」

正義が何かなんて知らない。

平等の本当の意味なんて考えたこともない。でも。

「——嫌だ。そんな世界は、どんなに正しくても嫌だ……！」

確信を得た亮介の心の奥底で、それでいいと誰かが言った。

「それじゃあ、君は僕たちの敵ということだ。残念だな、犬飼君」

「！」
炎の海の中から、白衣姿の人間がのんびりと歩いてこちらへやって来る。

「おまえの重役出勤は何かならないのか、四宮」
由彰が深いため息をついた。

「嫌味を言わないでくださいよ。足止め工作に意外に時間がかつちやつて。でもそれもいつまで保つかなあ」

「……四宮先生」

四宮は亮介に向かっておおらかに挨拶する。

「やあ、こんばんは犬飼君。僕の主人が迷惑を掛けて済まないね。申し訳ないんだけど、もうしばらく付き合つてやつてくれないかな」「どうして、つて聞くのは今更ですか。先生」

問いかけた由姫に四宮が苦笑する。

「そうだね。この場にこうして居合わせている以上、言い訳はできないね」

四宮は改めて由姫と亮介を見やる。

「改めまして。僕は紀野家に使える四宮家の当主、四宮聖司。君たちの知っている通り、有能な保健室の先生だ。どうぞよろしく」

「俺はそんな一族の話聞いた事がない」

由姫の言葉に四宮は肩を竦めた。

「それは仕方がないさ。四宮の血筋に宿ったのはオーデインの宮殿であるヴァルハラそのものなんだ。まあ、秋津家に仕える御影君と同じ立場だと思ってくれたらいいかな」

最も僕は落ち零れなんだけど。四宮は笑う。

「だから彼と同じ事を期待されても困っちゃうんですよ。ねえ？」

「俺を見るな。いいからさっさろ給料分の仕事をしろ。番犬は任せる」

「了解、ご主人様」

手摺りが焼け落ちる寸前、由彰の身体がふわりと宙に浮いた。同時に由姫の身体が同じように地上から離れる。

「先輩！」

「……っ！」

由姫が首筋を搔いて藻搔く。いつのまにかその首に嵌められているのは黄金に輝く首輪だ。炎が弾ける度に光を映してオレンジ色に染まる。

「先輩！」

もうじきここも崩れる。由姫を追って跳ぼうとした亮介の足にガシヤンと鈍い音が響いた。

「君の相手はこつち。痛いのは最初だけだからさあ、おとなしく繋がれてね。犬飼君」

拘束具から伸びる鎖の繋がった先、同じように錠が嵌った手首を見せつけ、四宮が楽しそうに唇を舐めた。

「……四宮先生」

「そんな悲しそうな顔しないでよ。君は本当に素直に育ったんだね。犬飼夫妻には感謝してもきれないくらいだ」

「何の、話？」

「僕はね、犬飼君。本当はずいぶん前から君に目をかけていたんだ」手を伸ばし、愛おしげに亮介の頬をなぞる四宮の指先から覚えのある香りがする。

消毒液の匂い。

「この十年、僕は楽しみで楽しみで仕方がなかったんだよ」

炎は揺れ蠢き、四宮の後ろに有りもしない幻影を作り出す。

何故か動けない。

「あんだ、」

亮介は眉を顰めた。

白衣。白いカーテン。

詰め襟を着た少年。絵本を差し出す手首に刻まれた傷の痕。鼻をつく消毒液の匂い。

「十年前、僕は既に出会っている。もうそろそろ思い出したらどうかな。幼い君が封じ込めた、どうしても忘れたかったあの光景を」少年の後ろにはベッドがある。

白いシーツの上、いばらの蔓のような無数の管に繋がれ、誰かが横たわっている。

『大きくなったらまたおいで。それまでこの子は眠り続けるだろう。いばらの棘に、深く深く守られて——』

「う、」

亮介は目を見開いた。

頭の中で反響する、鳴る、鳴り続ける電子音。
それは。

その人は！

「あ、——あああああ！」

慟哭が聖堂に響き渡り、勢いを増した炎は遂に足場を呑み込んだ。

第8章 - 03

「犬飼……！」

轟音に頭の中まで揺さぶられる。由姫は今や炎の海となった地上を見下ろした。そのどこにも、椿や七瀬、亮介の姿は確認ができない。「よそ見をしている場合か？」

「……！」

首にぐつと冷たい金環が食い込む。

シャンデリアの残骸に磔にされた由姫は奥歯を噛み締め、震えるほど強く掌の中の杭を握り込んだ。

「そつだ。俺を殺してみろ、由姫」

由彰は由姫の前で無防備に両手を広げる。手を伸ばせば切っ先が充分その胸に届く距離だ。

「おまえに覚悟があるのなら受け入れよう。俺の命を背負うといい覚悟ならある。ずっとしてきた。なのに今、その蒼い透明な光を灯す左目に射すくめられ、指先ひとつ動かせない。」

天竜寺椿は片割れを取り戻すために刀を取った。犬飼亮介は敵を傷つけることを躊躇わなかった。いま自分が持っている杭だって御守りではない、人を殺すための武器だ。

だというのに。

「だからおまえはいつまで経ってもお姫様なんだ、由姫」

震える由姫の手をやさしげな由彰の掌が包む。

「おまえは目覚めた世界でただ怯え、死にたくないと囁いているだけだ。やはりおまえ如きに犬飼亮介は不釣り合いだ。俺が貰おう」由彰が奪った杭は柄を伸ばし、戦場を疾駆するオーデインの槍となる。銀色の切っ先は白い光を放ち、いま由姫の心臓の真上へ突きつけられる。

「鍵を開けないというのならばこじ開けるまでだ」

「……やめ、ろっ……！」

「もう一度眠らせてあげよう、お姫様。いばらの優しい腕に抱かれ、永遠の甘い夢を見ながら果てるがいい！」

見開いた瞳に流星が流れ、振り下ろされた槍が由姫の心臓を貫いた、

瞬間。

十三番目の魔女は白い病室で微笑み、

九番目の魔女はチョコレートを嚙りながら天空へと放たれた白い光を見守った。

六番目の魔女は獣の心臓を撃ち抜き、

七番目の魔女は鏡と刃を合わせて踊る。

四番目の魔女は遠い記憶に思いを馳せ、

二番目の魔女は劫火の檻にその身を灼かれる。

三番目の魔女は遠い異国の風見鶏の上でその時を迎え、

五番目の魔女は未だ時が訪れたのを知らず書物の頁を捲る。

八番目の魔女は十番目の魔女と教室の片隅で笑い合い、

十一番目の魔女は震える手で十字架を握りしめた。

十二番目の魔女の左目は蒼く輝き、

そして世界のどこか、始まりの魔女が眠りの淵から目を醒ます。

「……なるほど」

喉奥で笑った由彰の手には、古めかしい一冊の本がある。

王の写本。

羊皮紙は風に吹かれずとも捲られ、刻まれた詩が舞い踊る。ある文字は翼をはためかせ、またある文字は馬車の車輪となって、山羊の角となって。聞こえてくる鐘の音、いや、それは鍛冶師が生命を賭して鉄を打つ音だ。絡まり合ったスペルは鎖となり、木の根となり、枝を無数に伸ばしながら由彰へと迫る。

しかし本はとあるページに辿り着くと、ぴたりと捲ることをやめてしまった。

「足りない」

写本は最後の一枚を残し、途中からいびつに破り取られていた。

饗宴は唐突に終わり、形を崩した文字はただ文字として、セピア色のページの中へ呑み込まれてゆく。

「そうか、おまえが探していたのは第九病棟への道ではなく、破れたページか。由姫」

由彰の足元、ぐったりと膝を折った由姫が荒い息の隙間に笑った。

「……そういうことだ」

百年の間で綻びた封印のためか、それとも最初から破れていたのか。由姫が母親から受け継いだ写本はあらかじめページが足りなかった。それらを焼却してしまうべく、由姫はページの在処をずっと探していた。

「諦めるんだな。封印を破っても、失われた十二枚のページを全て集めない限り、写本は本来の姿には戻らない。おまえの望む世界は——、訪れない」

由彰は跪き、閉じた本を由姫の胸元に押しあてた。

「わかった。それじゃあ俺とゲームをしよう、由姫」

「……っ！」

写本は水に沈むように由姫の身体の中へと戻っていく。

「何の、つもりだ……！」

「手元に置いておくと何かと面倒だからな。時が来るまでおまえが持っているといい」

由彰が指を鳴らした。途端、天から激しい雨が降り注いでくる。

「次に現世と冥府との境界が揺らぐのは冬至。それまでどちらが先にページを集め終わるか、勝負しようじゃないか。由姫」

「何を……、」

「王の写本はこの世と冥府、そして神々の力が住まうアースガルスへ至るための唯一の道。おまえはこれからありとあらゆる勢力にそ

の身を狙われることになるだろう。写本をもう一度封印してしまうのが一番だが、御園の血を引いていないおまえに完全な封印を施すことはできない。どうしてもというのなら妹を頼るんだな」

「瑛は、巻き込まない。おまえ、……何かしてみる、絶対に、」

「許さないって？ 健気だな。存在すら憎まれているというのに」冷笑と共に由彰は由姫に背を向ける。

「待てっ……！」

踏み出そうとした足が空を切った。固定された重力が解け、由姫の身体が炎の消えた地上へと落下する。

「由姫先輩！」

「！」

その身体を衝撃ごと受け止めたのは亮介だ。足首に引きちぎれた鎖がついている。

「四宮」

同じように地上に戻った由彰が呼ぶと、四宮が未だ煙のくすぶる木材を踏みつけて現れる。

「あーあ、もうこれダメだね、眼鏡」

今月もだめにしちゃった。四宮はヒビの入った眼鏡を外し、濡れた前髪を掻き上げる。

「僕は戻るよ、由彰。お客さんが来たみたいだ」

「天竜寺七瀬は？」

「とつくに聖堂の外だよ。椿ちゃんが追いかけていったみたいだけど、その後はわからないな」

「明日の朝、臨時の理事会を招集する。各方面へ招待状を出しておけ」

「はいはい。まったく人使い荒いなあ」

四宮は焼け落ちて蝶番に引っ掛かるだけとなった裏口の扉を律儀に閉め、聖堂を去っていった。

「——先輩、先輩！」

収まりつつある雨の中、亮介は由姫の名を呼ぶ。

横たえた由姫の、支える首筋から伝わる体温が酷く熱い。緩んだ唇から漏れる息は荒く、潤んだ瞳は虚ろな光を宿して揺れている。

「あんた、先輩に何したんだ！ 何でこんな……」

「封印を暴くために注いだ俺の魔力に触発されただろう。由姫が持つ膨大な魔力が、捌け口を求めて体中を彷徨っている。このままでは暴走して死んでしまいかもしれないな」

途端、亮介の瞳に獣じみた殺気が宿る。由彰は唇を吊り上げた。

「大丈夫だ。君が助けてあげればいい」

「どうやって？ どうすれば先輩を助けられるんだ！」

「抱いてやれ」

思いもよらない言葉に、亮介は声を失った。

「……だ、くつて……」

「言った通りの意味だ。我々が使うサイズという魔術は、時に性的な恍惚に通じる。慣れない者にとっては強烈な媚薬みたいなものだ。抱いてやればそのうち収まる。これは東の塔の鍵だ、好きに使うといい」

亮介の足元に二つの古びた鍵が投げられた。

「好きなら尚更、手を掛けて抱いてやれ。由姫もそれを望んでいるだろう」

呆然と鍵を眺める亮介をそのままに、由彰は外套の裾を翻し、今宵の舞台を後にした。

篝火は終わり、外はいつもと変わらぬ静かな夜が続いている。

「——恋をするといい」

由彰は薄く笑った。

ただの恋では足りない、望むのは狂うような恋だ。

そして引き返せなくなればいい。自分と同じように。

「冬が待ち遠しいな」

呟いた名は誰にも聞かれることなく、満月が煌々と輝く夜空に融け、

い
ず
れ
消
え
た。
。

第8章 - 04

夢を見る。

御園由姫は幾度も同じ夢を見る。

暖かくて悲しい夢。もう戻らない、かけがえのない命とともにあった頃の懐かしい記憶。

手を繋いだ。

指切りをした。

大きく手を振って、幸福な明日の約束を繰り返した夕暮れ。川の底で光るガラスを探した。空を駆け抜ける雷光も、立てかけた黄色い傘がつくる小さな水溜まりも、全部憶えている。

田畑に青い空が映っている。蝉が鳴いている。齒を立てた無花果の甘い果肉。

——夏の匂い。

『こいつが言ってるのはな、時計の針を巻き戻すってことだ。終わったはずの過去をわざわざ連れてきて、今ある世界の秩序を滅茶苦茶にするってことだ。そんなことが許されるか？』

それこそは自分の願いだった。

取り戻せばいい。誰に詰られてもいい、許されなかったもうひとつを願えばいい。耳元に誘惑を囁く悪魔は夜ごと現れては自分を誘った。それは自分を同じ姿をしていた。

けれど望まない。

彼はきつと望まない。

そう信じて、由姫はひたすら自分の影を振り払ってきた。

ろくに言葉も知らない、満足に喋ることもできない自分を友達だと言ってくれた。癪癪を起こして暴れる自分を抱きしめて、大好きだと言ってくれた。今自分を生かしているのは、そんな彼が救ってく

れた命だ。その命を、自分の身勝手な我が儘で汚せない。

必死で言葉を覚えて、勉強をして、学校に通うようになった。それは彼との約束だった。

いつかこの力を悪用しようとする人間が現れるかもしれない、そうなった時、誰も巻き込まないように他人から距離を置いた。たった一つだけ守れなかった約束。友達なんていない。

誰かが自分から遠ざかっていけばいくほど安心した。寂しくなった。夢を見ればいい。結末がどんなに悲しくても、変わらない夏の記憶が自分を慰めてくれる。

それなのに。

『俺、先輩が好きなんだ。先輩のために何かしたい。先輩が考えること知りたい。俺、本当に、本当に先輩が好きなんだ！』
どうすればいい。

『だったら俺に教えてよ。先輩のこと、もっと知りたい。知れば知るほど、きっと俺、先輩のこと好きになる。俺が好きになったのは、今こうして俺の隣にいて、俺が悲しくなったことに気づいてくれた先輩だよ』

どうすればいい。

「先輩、」

もう拒否なんてできない。

「……い、」

突き放して、でも抗えなくて、傷つけて。

「……犬飼、」

失いたくないのに、繰り返したくないのに、誰も大事にしたくはないのに。

「先輩、」

暖かい掌が由姫の濡れた頬を拭う。

「ごめんね、先輩」

ごめんね。

触れる度に謝る、その度に由姫の心は焼き切れそうになる。

謝ってなんか欲しくない。苦手なんて嘘だ、本当は怖いだけ。他人の温もりを覚えてしまうことが、いつか失ってしまうことが、犯した罪を忘れてしまうことが。

自分が世界から目覚めたことで、傷つき、今も真っ白な病室で夢を見続けている人がいる。その人を裏切ることとはできない。彼女の眠りを守り続けることは生涯に課せられた義務だ。

「い、犬飼……っ、」

ぎしりとスプリングが鳴る。熱い息が耳朵に触れて、触れられた部分が一層の熱を帯びた。怖い。

手を伸ばして辿りついた背に縋り付いた。すると返事の代わりに首筋に汗ばんだ額が押しあてられる。それは獣が従順を示す動作に似ていて、嬉しいはずなのに息ができないほどに切なかった。

涙はいくらでも溢れた。どこまでも甘やかしてくれる腕の中、子どもみたいに泣きじゃくった。どんなにみつともなくても受け止めてくれると知っていたから。

「っ、」

波が来る。攫われてしまう。指は追い上げるために速度を増した。跳ねる腰が強請るように動くのが恥ずかしくてたまらない。

もっと見て欲しい。触れて欲しい。知って欲しい。

知りたい。

「っあ、……っ！」

背筋を電流が駆け抜けた。もう止まらない。思うまま叫び、熱を放った。

快感が噴き出した。指は濡れた音を立て、残滓を絞りとうとうと動く。白いものがその指を汚すところを想像して泣きたい気持ちになった。熱は膨れあがるばかりだ。

身を擦ると、滑った指はそんなことを知り尽くしていると言わんばかりにやさしく筋を辿った。裏腹に、辿り着いた天辺にきつく爪を立てられる。

「ひあつ……！」

痛いとも気持ちいいともつかぬ感覚が全身を駆け抜ける。

「やだ、あつ、……っ、あ！」

そこが弱いのだと突きつけられた気がした。暴かれるのがつらくて逃れようとするが、身体は全然言うことをきいてくれない。つま先は与えてくれるものを捕らえるために亮介の背にきつく絡んでいる。

「犬飼、」

呼ぶと答えてくれた。その瞳が自分と同じ欲に濡れていてひどく安心した。そんな目をしてくれるなら、思うさまこの身体を与えてやりたくなる。

飢えて乾いた息、唇の隙間から赤い舌が見える。

——キスがしたい。

思った瞬間、暗闇に光が射したような気さえした。涙が溢れた。

見つけたのだ、かけがえのないものを。その感情の名前はまだわからない、けれど胸を満たすものが確かな答えだった。

キスがしたい。両手を伸ばして頬を引き寄せた。

キスがしたい。一人では抱えきれない。

どうしてもいま、この幸福を伝えたい。

「……だめだよ」

触れる寸前、人差し指が由姫の唇を遮った。

どうして？

瞳で問うと、切ない微笑みが返ってくる。

「先輩は今、身体が少しおかしくなってるだけで」

押し殺した、それでいて気遣うような声だった。

「キスは」

頬に一粒だけ温かい涙が弾ける。それでも亮介は微笑んでいた。

「キスは、先輩が本当に好きな人にしてあげて」

息が止まった。

唇が戦慄いた。

涙が後から後から溢れた。

――罰だ。

『俺は、お前のことは好きじゃない』

脳裏に蘇るのは自分が放った言葉だった。

『俺はおまえのことが迷惑だ、犬飼』

確かに言った。失うことに怯えて手ひどく拒絶した。

『俺には大事な人がいる。だからおまえの想いには応えられない。

俺はずっと、……ずっと、その人を大事にしなきゃいけないんだ』

ずっと、ずっと、大事に。

「ごめんね」

何も見なくていい。降りてきた亮介の掌がそつと由姫の目を塞いだ。暗闇の中、由姫は声もなく立ち尽くす自身を感じていた。手を伸ばせば欲しいものがそこにあった。今を逃したらもう二度と巡り会えない、本当に大切なものに。

けれど触れることは、もう。

「ごめんね、先輩」

また一筋、由姫の頬を涙が伝った。亮介はその涙を拒絶だと疑わなだらう。きっと亮介は由姫を好きでいるだらう、この先もずっと。けれどそれはただの奉仕だ。報われることを一切求めない忠誠だ。

由姫がそれを強いた。

『ごめんね』

亮介の言葉はゆっくりと闇に溶け、由姫は迫り来る絶望に抗う術を持たず目を閉じた。

暗闇に射したはずの光。ゆっくりと閉まる扉、響き渡る断罪の音。

時計の針は止まり、世界に今ひとたびの眠りが訪れる。

懐かしい子守歌が聞こえる。やさしい声に抱かれながら、由姫はせ

めてと掌の中の冷たい鍵を握りしめた。

——かわいいそうな子。かわいい子ね、由姫。

第9章 - 01

朝、玄関を開けると同時に門の前に黒い車が到着した。久志は小さなため息をつき、後部座席のドアを開けて乗り込む。

車は間もなく滑らかに発進した。

「頼んでないぞ、御影」

気まずい空気が立ちこめる車内、久志が窓の外に視線を向けたまま言うつと、運転席に座る男は「そうですね」と平素と変わらぬ調子で返事をした。

「迎えに来たのは私の勝手です。だというのに、お優しい久志様は自ら車に乗り込み、こうしておとなしく運ばれるままになって下さっている。身に余る光栄です」

「おまえ、ひよつとしなくてもかなり根に持ってたんな……」

「さあ、何の話でしょうか」

バックミラーに映る顔は一見して怒っていない。しかし面倒な事に、怒れば怒るほど表情を無くすのがこの男だった。

久志はおとなしく先に折れてやることにする。

「悪かったよ、置いてって。けど無事戻って来れたんだ。結果オライだろ」

「それ、もしかして謝っているんですか？ 謝罪の気持ちが全くない、珍しい反省の仕方ですね。初めて見ました」

「……俺おまえと話してると、時々すっげえ疲れる」

「偶然ですね。私もです」

とりつく島なし。久志は俄に焦った。こうなると後が面倒くさい。この男ときたら、自分よりずいぶん大人なくせに時々妙に子どもっぽいところがあるのだ。ひどい時はいくら呼んでも一向に顔を出さない。

「ごめん。悪かった」

今度はちゃんと言葉に心を込めて謝る。

すると御影は少しだけ心を動かされたようで、バックミラー越しに一瞬、久志に視線を送る。

「そう思うなら、もう二度と一人で先走って行動しないでください。置いて行かれるのは屈辱です」

「……そうだな」

昨夜、始まった戦闘もそこそこ、偶然射た矢が開いた正しい道筋に久志は飛び込んだ。あの程度の雑魚で御影がどうなるとも思わない、信頼したからこそ後を任せたのだが、結果として何も言わずに置いて行ったのは事実だ。

とは言え久志の方にもそれなりの事情はある。

「——会わせたくなかったんだ」

「……？」

「何でもない。言っておくが今回の件、おまえが関わっていたせいじゃないからな。東雲機関のことはもう忘れる」

「すっかり忘れていましたよ」

御影が苦々しげな口調で吐き捨てる。

「あなたの口から四宮の名前が出てくるまではね。……元気でしたか、彼は」

「おまえが俺と同類って言ってたのがよく分かったよ。嫌な奴だ」
久志はアームレストに凭れ苦笑した。頬杖をつく左手の甲には大きな絆創膏が貼られている。

「同類とは言っていないせん。人を苛々させる言動が似ていると言っただけです。あなたと四宮は、まったく別の種類の人間です」

「……そうかな」

「そうです」

力強い声だった。

「——車を止める、御影」

命令すると車はすぐ路肩に停車した。

久志は鞆をそのままに、後部座席から一旦降り、助手席の扉を開け再び乗り込む。

「出せ」

「……はい」

それきり特に会話は無い。

高速の出口に突き当たり、車はほとんど動かなくなった。通勤の車で道が混んでいるのだ。これを狙ったのだろう。久志は御影にわからないようにこっそり微笑んで目を閉じる。

「寝る。学校に着く十分前に起こしてくれ。少しは歩きたい」

今日は五月祭だ。たくさん店が出るという話だし、亮介はきっと由姫と一緒に自分を連れ回すだろう。胃袋の準備をしておかなければいけない。

「後部座席の方が寝やすいのでは？」

「いいんだ。ここで」

「奇妙な方だ」

そうだ。だからおまえみたいな奴を従者にするし、たまに甘やかしてやりたくもなる。

ふいに太陽が雲の影に入り、瞼の裏が暗くなる。久志は眠りに落ちながら、昨夜の出来事を思い出していた。

第9章 - 02

『怪我をしてしまったので』

白々しいのはお互い様だ。久志はようやく訪れることのできた保健室で、鋭く裂かれた左手を差しだした。自ら矢尻で傷つけたものだ。四宮聖司。東雲機関に所属していた研究員。と同時に紀野家の召し抱える間諜。そして過去は御影と同じ、東雲学校と呼ばれる施設で育った男でもある。

「やあ、初めまして。君が秋津久志くんだね。犬飼くんから話は聞いているよ」

「髪が濡れているようですけど、雨にでも降られました？ 降っているなんて気づかなかったな」

「局地的だったからね。辛うじて替えの服があつて良かったよ。さあどうぞ、座って」

促され、パイプ椅子に腰掛ける。久志も四宮も笑顔を絶やさない。

「亮介からって、あいつ俺のこと何て言っていました？ まさか良からぬことでも吹き込まれてませんよね、先生」

「君は猫っ被りだから、騙されないほうがいいってさ」

「あいつ……」

久志は微妙な表情を浮かべた。四宮はくすくすと笑う。

「仲がよいね、君たち」

「親友ですから」

「だから巻き込むのが許せない？」

四宮の銀縁の眼鏡が鈍く光る。分厚いレンズ越し、灰色の双眸は全く笑っていない。

「……最初の日、」

久志は始まりの記憶を辿った。

「三月の終わりだ。俺はその日、亮介に待ち合わせに遅れるとメー

ルをした」

近年まれに見る豪雪だった。久志はその前日、神奈川にある祖父の家に泊まっていた。

出かけるのをやめようかという相談はメールでしていた。しかし亮介が構わないと言ったから、付き合ってもらうことにしたのだ。

「バスの中だ。亮介からはすぐ返事があった」
「わかった、ゆっくり来ていいよ。」

余裕の文面だ。さては珍しく自分が先に着いたので、得意になっているのだろう。調子に乗っているならちよつと灸を据えてやらなければ。そう思っていた。

しかし到着した待ち合わせ場所に亮介はいない。

『門の鍵開けてもらったから、先に保健室行ってる。着いたらメールか電話して』

保健室？

久志はアドレス帳から亮介の番号を呼び出し、直ぐに電話をした。しかし返ってきたのは無機質なアナウンス音声だった。

『現在こちらの電話は電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、お繋ぎすることができません』

ようやく繋がったと思ったら何度呼んでも返事がない。

そしてその夜の電話、遂に現れなかった久志への恨み言と、出会ってしまった人の惚気へと続く。

「俺は御園学園になんて誘ってない」

亮介は言っていた。久志が御園学園に行こうと誘ったのだと。親の仕事の関係で入れるから何も問題は無いと。

久志が誘ったのは映画館だ。公開が終わってしまう日曜日だった。

「四宮。あんた、時間軸を弄ったな？」

絆創膏の封を切る四宮はただ微笑むだけで何も言わない。

「東雲学校の卒業生に、そういうのが得意な三姉妹がいるんだって

？ そいつらがあんに協力して、未来の時間軸から適当な事象を拾ってきた。犬飼亮介を御園由姫に合わせるために。亮介から聞いたが、御園先輩が起こした立ちくらみってのは大方その影響だろう」
時間は絶えず進行している。だが過去を保存することはできる。現在から続く未来に想定される、限られた可能性を現在にたくり寄せることができる。

「分岐した時間は合理的に収束しようと働く。ひとつの世界にふたつの時間、ふたつの出来事が並行して存在することはできないからだ。俺は結局、約束した前夜祭で亮介を案内してやることはできなかった。てことは、このあたりが座標の固定位置だ。違うか？」

「――参ったな」

四宮はちつとも参っていない顔でため息をついた。

「出会いはできるだけドラマチックにつて、そう思っただよねえ。我ながら少女趣味だとは思っただけ。にしても東雲学校のことまで知ってるなんて、それじゃあ御影君は本当に君に心を許しているわけだ。ちよつと妬けるな」

「あいつに直接言つてやればいい。嬉しすぎて苦無を飛ばしてくるぞ」

「そんなこと言つて、会わせてくれないんだろう？」

四宮と久志の思惑に満ちた視線が交じる。

「……亮介を絡め取るつもりならばつ殺してやろうと思っただが、あいつはそう簡単に誘惑されるような柄じゃなかったな」

久志は四宮の手から絆創膏をかすめ取り、席を立った。

「あんたたちが余所で何をしようが勝手だが、俺の親友を巻き込んだのは許せない。あんたの術のクセはもう覚えやし、これからは邪魔させてもらう。覚悟しとけよ」

「お手柔らかに。けど安心してよ、犬飼君はともかく、君自身に僕らが直接的な危害を加えることは絶対にない」

「――何故だ」

「釘を刺されたのさ。自分から首を突っ込むならともかく、僕らが

君の身体に傷一つつけたら許さないってね」

久志は表情を無くした。まったくの不意打ちだった。

「誰に言われた」

「言わないとわからないのかい？」

四宮は唇を歪ませて嗤う。

もし「彼」に会うことがあったら、今日の傷は自分でつけたものと君の口からよく説明しておいてくれよ——。

車の中、古い縫合の痕を残す左手の小指がひどく軋んだ気がして、久志は眉を寄せた。

まだ繋がっているのか。この系はおまえに。

——東雲瑞樹。

第9章 - 03

由姫は一步一步、屋上への階段を昇る。前夜祭から一夜明けた早朝、徹夜組は妙なテンションで外を駆け回っているが、ほとんどは割り当てられた教室でまだ眠っているようだ。平素とは違う、穏やかな静寂が校舎に満ちている。

『――すまなかった』

先ほど、まだ誰もいない生徒会室で由姫は椿に頭を下げられた。

「やめてください先輩。謝るなら俺のほうだ。先輩に色々黙ってた。写本のページが欠けていることも……」

「それは立場上仕方ないことだ。七瀬のこと――、いや、私自身のこと、君たちに迷惑を掛けて済まなかった」

黒板の横、ホワイトボードには生徒会役員の名が書かれたマグネツトが貼られている。

そこに天竜寺の名札はひとつしかない。

「七瀬は行ってしまった。何とか消耗戦に持ち込むことができたと思うんだが……、さすがに双子だな。読まれていた」

そうして消えた。夜明けと共に、この事件に関わっている者以外、誰の記憶からも。

「これで終わりじゃない。回復次第、七瀬はまた何かを仕掛けてくるだろう。私にも、そして君たちにも」

椿は最初にそうしたように、由姫に手を差し出す。

「ページを集めることに協力させてほしい。私はどうしても、七瀬を取り戻したいんだ」

由姫は頷き、その手を握った。

「俺は並行して、写本を正しく放棄する方法を探してみます。――こんなもの、この世にないほうがいい」

たとえそれがどんな尊い犠牲の上に創造されたものとしても。

「ありがとう。御園君」

改めて苗字で呼ばれることで、由姫はとある事実思い至った。気づいたのが今更で、何だか笑えてくる。

「由姫でいいです。七瀬先輩はそう呼んでた」

椿は少しだけ苦しそうな顔をして、それでも気丈に微笑んだ。

「ではそうしよう。由姫君」

これから椿は七瀬の影を背負って、この学園で生活をしていく。それでも椿は潰れたりしないだろう。未だ残る七瀬の気配を誇りだとさえ思はずだ。それは由姫には無い強さだった。

「先輩。ひとつだけ聞きたいことが」

「何だ」

「犬飼を、」

犬飼亮介を見かけなかったか。

——由姫は辿り着いた重い扉を開けた。

強い風が吹いている。

亮介の姿はすぐに見つかった。給水塔の上だ。避雷針が朝日を弾き返している。

由姫は真っ直ぐ亮介の元へ向かった。

明け方、目を覚ますとひとりきりだった。自分が眠っていたのは知らないベッドの上だった。

最初は何が起こったのか思い出せなかった。だるい身体を引き摺って起き上がり、薄い光が射す部屋の中を確かめた。どうやら塔の中のような。暖炉にバスタブに、かなり古いようだが人が住める一通りの設備が揃っている。

ベッドに戻ると、出た時には気づかなかった、制服のネクタイがぐしゃぐしゃになって落ちていた。自分のネクタイは制服の上下と一緒にベッドの傍のコートハンガーに掛けられているようだ。

それでは、これは一体誰の。

拾い上げ、由姫は自分がようやくシャツと下着、靴下しか身につけていないことに気がついた。

——思い出して何よりもまず最初に、顔から火が出そうだった。それから幾度も足元を危うくしながらどうにかシャワーを浴びた。水しか出なかったが気にする余裕はなかった。

外に出て、ここが東の塔だとわかった。鍵は制服のポケットに入っていた。誰にも会わないよう気をつけながら（途中幾人か叩きのめした）、本校舎のロッカーへ向かい、シャツと靴下を変える。

長い一夜だった。

「犬飼」

給水塔への階段を昇り、由姫は声が裏返らないよう気をつけながら後ろ姿に声を掛けた。

犬飼亮介は振り返った。

「御園先輩」

拳を握る。

もし無かったことにするつもりなら、殴ろうと決めていた。

「~~~~つてえええ！」

給水塔の柵に背を叩き付けられた亮介が蹲り、頬を抑える。由姫は亮介を殴りつけてじんと痛む拳を振った。殴るほうだってそれなりに痛いのだ。

「おまえ、俺が忘れてたらそのままにするつもりだっただろ」

ふざけるな。由姫は亮介の上に跨がり、シャツの襟を引っ掴む。

「先輩、」

「由姫でいい。大体、俺がいいって言っていないのに、おまえ、最初から勝手にそう呼んでたくせに」

そしてそのことに自分自身さえ気づいていなかった。初対面の人間

に、下の名前で呼ぶことを許すような自分ではないのに。

「――覚えてる、全部」

「……先輩、」

「謝るな。次に謝ったら、二度とおまえとは口利かないからな」

由姫は上着のポケットから真新しいネクタイを取り出した。ここに来る途中、まだ無人の購買のカウンターに紙幣を叩き付けて買ってきたものだ。

亮介の首に通してやる。

「巻き込んだのは俺だ。おまえのことは最後まで責任を持つ」

それがいまの由姫に出来る唯一のことだった。

「だからおまえも覚悟をしてほしい。俺のために命を捨てる覚悟じゃない。一緒にいる覚悟だ」

指先で交差をひとつ、ふたつ。輪に通す。

「俺は、おまえの想いに応えることはできない」

閉じ込めたはずの気持ち溢れそうになる。

結び目に潜らせて襟元まで上げて、もう片方の指先で整えた。

「だからこれは、俺がおまえの気持ちを一方的に利用するってことだ。おまえはそれでもいいのか？」

怖い。

由姫は指先が震えるのを感じた。

答えを聞くのが怖い。今まで散々自分の事情で振り回した挙げ句の台詞だ。軽蔑されたとしても傷つく資格なんて自分にはない。けれどどうしても、どうしても。

「……俺、傍にいてもいいの？」

弾かれるように顔を上げた。亮介が迷子になった子犬みたいな顔でそこにいた。

「おまえにいてほしいんだ」

言葉は勝手に口から滑り出た。

この想いだけは信じて欲しい、そう訴えた亮介の気持ちは今更にな
って痛いほどわかった。

伝わって欲しい。受け入れて欲しい。

どんな自分勝手な願いでも。

「うん」

亮介は眩しい目をして、由姫の手をぎゅっと握る。

「ありがとう。由姫先輩」

切ないくらい喜びに満ちた笑顔。健気なまでの、それが亮介の答え
だった。

「――俺は、死ぬわけにいかないんだ」

「うん」

「小さい頃、俺を命がけで助けてくれた人がいる。だから絶対に生
き抜かなくちゃいけない。それが生かされた俺の、努めだと思うか
ら」

「うん」

焼き切れそうな衝動を仕舞いこんで由姫は微笑む。

「約束、だからな。今日はどこにでも付き合ってやる。おまえの親
友も連れて来い」

「いいの!？」

先輩大好き！

遠慮のない力で抱きしめられ、由姫は拳を握りしめた。

「……今日だけだ。今日だけ、特別だからな」

「うん」

由姫の葛藤を知らず、亮介はひたすらに嬉しそうだ。与えられるだ
けだと思っている、その手が由姫に与えたたくさんのものを亮介は
知らない。抱き返したいと堪える手がここにあることも。

心は明け渡せない。だからせめて、この命は共にありたい。

すべてが終わるまで。亮介がいずれ自分ではない、大事な誰かを見
つけるまで。

「そういえば、おまえこんなところで何してたんだ？」

気になっていたのだ。質問をすると、亮介はぎくりと背を跳ねさせた。

「えっと、……頭、冷やしてた。ここ風が涼しいから……」

「何でだ。おまえが反省することなんて何も無いだろう」

「いや、その……、そうじゃなくて、あの」

「？」

「……あの……、」

亮介の顔がみるみるうちに真っ赤になってゆく。

程なく理由に思い当たり、由姫も同じように顔色を変えた。真っ青に。

「……忘れる」

亮介がふいと顔を逸らす。

「わ、忘れなくて良いつて先輩言った」

「やっぱり忘れる！ 今すぐ記憶を消去しろ！ お、おまえあれで抜いたりしたら本当に許さないからな！？」

「無理だよ！ だって先輩イく時の顔すげーやらし」

青空の下、いつかと同じ暴力の音が響いた。

長い一日。

御園学園五月祭はまだ始まってもない。白い聖堂は完璧な姿でそこにあり、森は朝の日差しに眠たげな葉を揺らし、小鳥たちと囁き合っている。どの庭も今日はたくさんのお客様を迎え賑わうだろう。

そのどこかで魔法使いが企み顔をし、魔女たちが出番を待っている。

薔薇の蕾は綻び、そうして季節は、夏へ。

【予言 福音の魔女】

『もっしもーし！ 朱葉起きてる？』

御園朱葉はベッドの上、受話器からダイレクトに響く高い声にうんざりと額を抑えた。

「……………流行りなのか」

『えっ。なあに？』

「人の住処に勝手に電話を通すのが流行りなのか！ おまえも由彰も本当に……………」

『相変わらず低血圧ね。チョコでも食べて目を覚まさないよ。こっちはとてもいいお天気よ』

「……………こちらは雨だ」

黒いカーテンを引かずとも分かる。強い雨が窓ガラスを叩き付けている。

「生きていたんだな」

苦い記憶がひたひたと朱葉の心の内を伝っては流れてゆく。

電話越しの相手は『ふふ』と小さく笑った。

『そうよ。結構しぶといでしょ？ でも今の私の姿を見たら、朱葉ちよつと驚くと思うな。どうしてこうなっちゃったのかしら……………』

「由彰が動き始めた」

『そのようね。だから私も目を覚ました』

「聞きたいことが山程ある」

『私から話せることは、何も無いと思うわ』

「おまえ……………！」

『知ってるでしょ、朱葉。私って本当に、すごくいい加減なの。そして楽しいことが大好き。これから起こるたくさんのことを、ここから眺めることにするわ』

「ふざけるな。刹那的に振る舞ったって私は誤魔化されないぞ」

朱葉は腹の底が熱くなるのを感じた。ようやく頭に血が巡って来る。

「おまえは見てくれからは想像もつかないくらい強かな女だ。十七年前、一体何があった。どうして私に何も言わなかった！ おまえたちが関わっていると知っていたら、私は……！」

『……やさしくなったのね、朱葉』

見なくてもわかる、受話器の向こうの彼女は微笑んでいる。

『怒られるなんて思ってもみなかった。そっか、私、あなたのことも置いて行っちゃったのね』

ごめんね。

謝る口調はあの頃と何も変わらないから、今更と吐き捨てることもできなくなる。朱葉は受話器を握る手に力を込めた。

「……今、どこにいる」

途切れた回線が繋ぐ過去。そこは寂しい所ではないのか。置いて行ってしまったのは、むしろ自分の方ではないのか。

冷たい雨は強い風に攫われ、過去へ、過去へと向かって速度を増してゆく。

「……雲が速いわ、朱葉」

一人の幼い少女が崩れかけたバルコニーの手摺りの上に座っている。投げ出された白い素足、白いワンピース。隣で黒い鴉が毛繕いをしている。

少女は指先で紙飛行機を折っている。膝の上で畳み、裏返し、丁寧に翼を作る。

「とても懐かしいのに、迷子になった気分よ。変なの」

庭園の薔薇は朝露を落とさず、湖の水面が風に凪ぐことはない。焼け落ちた聖堂、いばらの蔦が這う東の塔。地上の全てはひっそりと静止している。

「——寂しいの、朱葉。だから時々でいい、声を聞かせて」

私が一人でないのだと、私たちはまだ繋がっているのだと信じさせて。

願う少女は古い文字が刻まれた紙飛行機を飛ばした。翼が軌跡を描

く世界、天蓋に架かる太陽と月。巨大な世界樹に支えられ、昼と夜とが狂ったように廻る。

「終わらない物語に意味はないわ」

神がもたらす破滅は福音となるか。

少女の戸惑いを映すかのように、飛行機は風を掴み損ね、墜落した。

了

【予言 福音の魔女】（後書き）

第1期は終了です。第2期は2012年2～3月頃開始予定です。

【ポータルサイト】 <http://www.welft.jp/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4810y/>

いばら姫-WORLD END FAIRY TALE-

2011年11月20日05時39分発行